

死^ニ此^レ則^チ生^{ナリ}起^リ若^シ滅^ス觀^ハ者^ハ無^ク明^ク滅^ス則^チ行^ハ滅^ス乃至^チ生^ス滅^ス則^チ老^ス死^ス滅^ス因^ト
 觀^ニ十二^ノ因^ノ緣^ヲ覺^ル眞^ニ諦^ヲ理^ス故^ニ言^フ緣^ノ覺^ト

【文科】前に十二因縁を明し了るを以て、こゝは四諦との關係を明にし之を緣覺の爲に説かれたる所以を叙ぶる一段。

【句解】開合之異は前掲の十二因縁の圖に参照して知るべし。但し四諦が世間出世間の因果を併べ説けるに比して十二因縁は世間の因果のみを叙べたるのみにて出世間の因果を缺く、然れば嚴密には開合の異と言ひ難きに非ずや云何。私に考ふるに、この不審一往尤もなれど、出世間の因果は何を意味するかを明にすれば自ら理解せられることである。出世間といへばさて決して世間の因果と別なものではない。勿論迷へるものと悟れるものとは別であるが、既に生死は苦である感業の所感であること知られた苦集二諦は世間の實相である。それと同時にかく世間の實相を如實に知るとが出世間の因果であつて、その外に別に出世間相なるものはない。ただその世間の因果を身に證知することが容易でない爲に、七賢四聖の行位もあり三十七科の道品もある。けれどもそれは畢竟するに世間の實相を如實に知るといふ外何ものもない。滅諦はそれが如實に知られた處に名けたのみで、出世間の因果は世間の因果の外にあるのではない。而してその世間の因果の實相をありのまゝに知らしむるものは何であるかといへば眞諦の空理である。この眞諦の鏡に照されて世間は其の如實の相を現すのでそれが苦集二諦である。それ故

に苦集二諦には眞諦の空理を全分に現はして居るから、苦集二諦に達すればそこに眞諦の空理を見それに證入することが出来て、その外に滅道二諦なるものゝ要はない。然るにそれを別に説かれたのは云何といふに、その苦集二諦を容易に諦むることの出来ないものゝ爲に、それを諦むるに至る方法と順序(道諦)とを説き更にそれを諦められた様子(滅諦)までを説かれたまでで、その結歸する所は苦集二諦を如實に知るといふことの外何ものもない。このことは三十七科の道品が四念處觀に還元されるし、七賢四聖の行位は要するに三界の實相を知らざる惑を斷じてその實相の理に證入するに外ならぬことを併せ考ふればいよゝ四諦を合すれば二諦になるといふことが明になる。かくて四諦と十二因縁との開合の異といふ言は嚴密の意味に於いて眞實である。○既名異義同等。開合の異ならばなせ同じことを異つた語で重説するかと問ひ、それは機宜の異なるが故にと答へてある。機宜不同は根機がまち／＼といふことであるが、いかに不同であるかといへば聲聞は鈍根で内觀自省の餘裕がなく生死に急迫されて居るからして生死の苦果を前にして説けることは前に聲聞の下で辨する如し。然るに緣覺はやゝ利根で内觀自省の餘裕があり且つ合理的に解明しなければ理知に富んだ緣覺が受け入れない。それ故に苦集二諦の輪廻の因果を詳説するばかりでなく、因たる感業を前に説いてそれから苦果が生じ來ると説き、又世間の因果だけを説いて出世間の因果を省略されたものである。○先觀集諦は

生起觀と
還滅觀と

十二因縁の最初は無明(惑)行(業)の集諦から始まる故、この教によつて縁覺は先づ内心に心へ向けて煩惱を内觀する。その煩惱が行爲を生じ、業が苦果を引生ずる煩惱の運命の果てしなきことに覺醒する。この十二因縁を觀するに生起觀と還滅觀との二あり。生起觀は眞理に達せざる無明が果しもなき生死流轉の世界を開展することを觀する觀であり。還滅觀は無明を滅して眞理に達するならばそれから引生される業も苦もすべてが滅せられてたゞ眞理のみの世界に證入することが出来る。これが還滅觀である。○因觀十二因縁等は縁覺の名義を釋したるもの。これを縁覺を明す一段の結釋としたのである。即ち十二因縁を觀するといふ所から縁といひ、眞諦の理を覺るといふことで覺といふのである。

言獨覺者出無佛世獨宿孤峰觀物變易自覺無生故名獨覺。
兩名不同行位無別此人斷三界見思與聲聞同夏侵習氣故
居聲聞上。

【文科】 獨覺を明す一段。

【句解】 獨宿孤峰は一人で山中へ立籠ること。これは獨覺の一例を擧げたのみで、すべての獨覺が山中に宿るといふのではない。身はたとひ俗界にあらうとも無師獨悟するものは獨覺で

ある。又一人といふことも必然的な獨覺の性能ではない。部行獨覺といひて多勢の人が結社して覺るものもある。要は無師にて一人々々が自覺するものはすべて獨覺の名で呼ばれる。○觀物變易は例せば飛花落葉を觀するをいふ。變易はうつりかはりて止まぬこと。谿川の水の暫くも止まらぬ、山色の朝夕同じからざる。但しは人の死・時の流すべて物の變易である。それを縁としそれに點示を得て眞諦の理を覺るのである。○覺無生は眞諦の理を覺ること。理は生滅を離れたる無爲常住のものなれば無生といふ。○兩名不同は縁覺と獨覺と名が不同。○行位無別は縁覺も獨覺も行位に別はない。これら二覺は共に別な行位はない、たゞ凡夫の身で百大劫の間修行しそこで一坐の間に惑を斷じ理を證して直ちに無學果を得る。よつて一坐成覺といふて初果二果等の位は立てぬ。○侵習氣。習氣は慣習の氣分で、見思二惑の本體は斷じても尙ほその惡習が残る譬へば香箱の香はなくなつても香氣がいつまでも残ると同じである。それを習氣といふ。侵とは侵略など、熟し他人の領分に手を出すこと。今習氣を斷ずるは聲聞縁覺の領分にあらず菩薩の仕事である。縁覺はそれに手を出すといふことで侵といふ。尤もその全分を斷じはせぬたゞ少分の習氣を斷ずるゆへ侵習といふ。

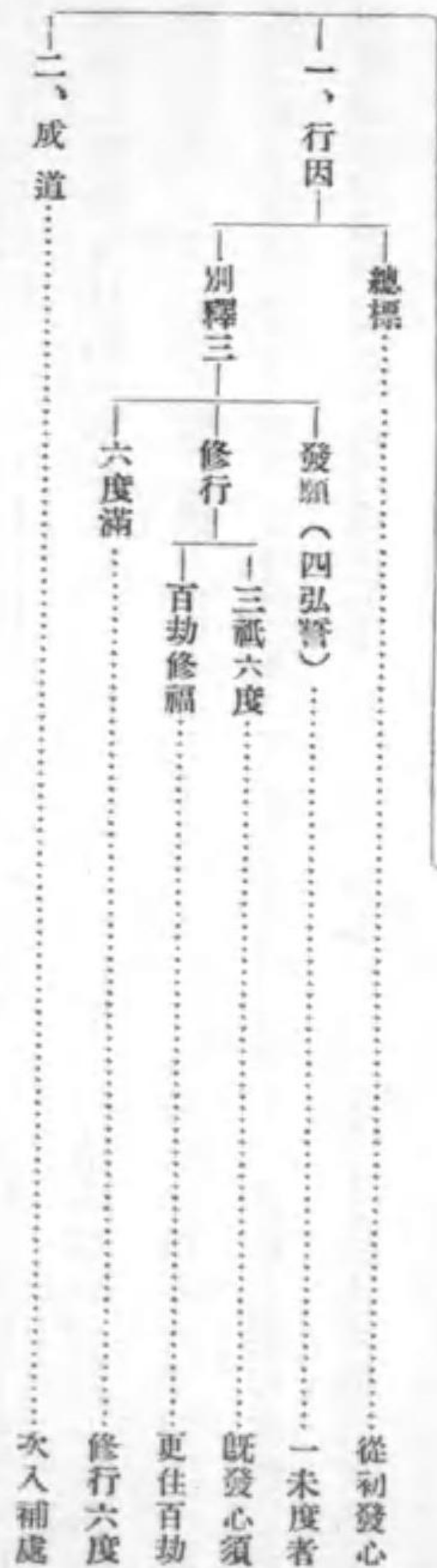
(c) 菩薩の行位

一坐成覺
習氣

次明菩薩位者。

【文科】 以下菩薩の行位を明すに當り、それを標舉する語。
從初發心緣四諦境發四弘願修六度行。

【文科】 以下正しく菩薩の行位を釋する下の大科如左



今は初めに行因を總標する語。

【句解】 從初發心等。菩薩の行因は初發心より願(四弘誓)行(六度)の二より外はないと示す

○四弘願は四大願に同じ。

一未度者令度即衆生無邊誓願度。此緣苦諦境。二未解者令解即煩惱無盡誓願斷。此緣集諦境。三未安者令安即法門無

量誓願學。此緣道諦境。四未得涅槃者令得涅槃即佛道無上誓願成。此緣滅諦境。

【文科】 四弘誓願を明す一段。

【句解】 未度者の度は度脱で生死の苦を渡り越え脱れ出すこと。○衆生無邊は迷へる者の無數のことで迷へる程の者はすべてを度脱せしめねば置かぬと誓ふが第一誓願度。○緣苦諦境。衆生は生死の苦果であるから苦諦境である。「苦なり」といふは苦諦であるが、その苦なりといふ相手は衆生である。よつて衆生は苦諦の境である。○未解者の解は結ばれをほごくこと。煩惱の結ばれを斷することを解といふ。○未安者の安は安立にて落ち付くこと。三十七科の道品を修せぬものは安立する道がないのであるから未安者といふ。○法門は三十七科の道品等をいふ。學は修行すること。○未得涅槃の得は證得で、さること。

既已發心須行。行填願於三阿僧祇劫修六度行百劫種相好。言三阿無僧祇劫時者且約釋迦修菩薩道時論分限者從古釋迦至尸棄佛值七萬五千佛名初阿僧祇從此常離女身及四惡趣常修六度然自不知當作佛若望聲聞位即五停心

總別念處凡外次從尸棄佛至然燈佛值七萬六千佛名第二阿僧祇此時用七莖蓮華供養布髮掩泥得受記荊號釋迦文爾時自知作佛口未能說若望聲聞位即煥位次從然燈佛至毘婆尸佛值七萬七千佛名第三阿僧祇滿此時自知亦向人說必當作佛自他不疑若望聲聞位即頂位經如許時修六度竟

【文料】 三祇百劫の修行の中、先づ三祇の修行を明す。

【句解】 修行填願は六度の行を積んで發願の穴を填めること。すべて願望は空虛を感ずる所におこるものであるから、四弘誓願はいはゞ大きな精神上の空洞である。これを填める爲に六度の行を是非共行せねばならぬ。○阿僧祇は無數時と譯す。但し無數といへばとて無限の數量のことではなく、例へば億兆といふやうに數の一單位である。○種相好は相好の種をうえること。佛になつてから三十二相八十隨形好の勝れた相好でなければ思ふやうに衆生濟度が出来ぬから。果上で勝れた相好を得る爲に因位に於いて特別な修行を百劫の間するのである。○且約釋迦等は且く釋迦佛の因位のことを例示して三祇百劫の大體を明すといふこと。且は必ずこれが一般的の規定ではない。それ／＼の佛によつて小異はあるが、大體をこれによつて知らし

めやうといふ意味で且といふ。○分限は藏教の菩薩の必ず踏まねばならぬ行位の分限即三祇百劫の分際のこと。○不知當作佛は初阿僧祇の間は必ず佛に成れるといふ確信がない。それで聲聞位の外凡に配す。外凡位の聲聞は皆目空理の見當もつかぬから自信がない。○用七莖蓮華等これは瑞應經に詳説する釋迦本生譚である。釋迦因中に儒童といつたが、五百人の道士の爲に講論をして五百文の銀錢を得たが、時に燃燈佛が城中に來化するといふので儒童はこれを拜せんとて城中に入つて見ると、城中の士女は名香を焚き道路を掃除して佛の來化を待つて居つた時に王家の女瞿夷なるもの七莖の蓮華を佛に奉らんとて群衆の中にあるを見て、儒童は五百文を出して強ひて其の中の五花を買ひ取り佛に供養せんとしたが、瞿夷は更に餘の二花を儒童に托して佛に捧げん とを乞ふた。そこで儒童は七莖の蓮華を佛に供養した。所がその際佛足を稽首禮拜したが地面が濕つて居るから、すぐ皮衣を解いて布いたが未だ濕つた泥を掩ひ盡すに足らなだったので、頭髮を以て地に布き泥を掩ひ、佛をしてその上を通過せしめたてまつた。この健氣な儒童を見て燃燈佛は「汝今より九十一劫を経て當に作佛して釋迦文と名のらん」と當作佛の記莖を授けられた。こゝに儒童の心は初めて成佛の自信が萌した。しかしまだ口へ出してそれをいふだけの充分な自信はなかつた。それは聲聞が煥位で初めて真理の相似の解を生じたに比すべきである。釋迦文は釋迦牟尼と同じ。○經如許時等は三僧祇の間に六度を修すると

いふこと。即ち菩薩の行體は六度の外はないと示すもの。如許時は三僧祇の時間を指す。
夏住百劫種相好因修百福成一相福義多途難可定判有云
大千盲人治差爲一福等

【文科】百劫の修行を明す。

【句解】種相好因は前に叙ぶる如し。成佛して三十二相等の勝れた果報を受くる爲に更に百劫の修行をする。○百福一相なれば三十二相を得るには三千二百福を修せねばならぬ。○有云大千等は何人の説なるか明かでない。この書は『止觀輔行』三之三七に據つたもので、『輔行』に有云といつて擧げてあるからそれをそのまま取つて言ふたものである。大千盲人は三千大千世界のありとあらゆる盲人のこと。『輔行』に福の義に十説を擧ぐる中の一説である。故に今福義多途とも爲一福等ともいふ。

修行六度各有滿時如尸毘王代鵠檀滿普明王捨國尸滿屬
提仙人爲歌利王割截無恨忍滿大施太子杼海并七日翹足
讚弗沙佛進滿尙闍梨鵲巢頂上禪滿劬嬪大臣分闍浮提七
分息諍智滿望初聲聞位是下忍位

【文科】六度の滿時を明す。

【句解】修行六度等は六度に滿時があるをいふ。六度は六蔽を除く爲の行である。六蔽とは一に慳貪・二破戒・三瞋恚・四懈怠・五散亂・六愚痴で、是を對治する爲の一布施・二持戒・三忍辱・四精進・五禪定・六智慧の六度である。(度は波羅密の譯語で、新譯では到彼岸と譯す。度は渡ること。生死の海を渡つて涅槃の彼岸に到らしむるものなれば度といふ。)されば六蔽を除き終つたのが六度の行の滿したのである。そしてこの六度滿の時は百劫の後にあることで、百劫の修行も亦この六度の外ではない。よつて今も百劫の後に六度滿時を明す。○尸毘王等以下の六度滿を明す説話は『大論』四二に出で近くは『止觀輔行』三之三以下に詳し。今も『輔行』に依て略述したものである。尸毘王は釋迦の前生である。鵠が飢えたる鷹に逐はれて尸毘王に救はれたが、鷹は尸毘王を許さなかつた。飢えたる鷹が食を奪はるればたゞ死より外はない。鵠を救へば鷹を殺さねばならぬ鷹を救へば鵠は殺さねばならぬ。そこで尸毘王は自己の全身の肉を鷹に與へたといふ。檀滿の檀は梵語で布施のこと。○普明王捨國。普明王のことは仁王經にも出づ。普明王は不妄語戒の爲に身を捨て國を捨て、惜まなかつた。普明王城外の園林に遊ばんとて城門に一婆羅門の行乞に逢つたが、歸城の後に布施すべきを約束して園林に行つた。所が當時鹿足王といへる王邪教を信じて千王の頭首を得て山神に獻げんとて九百九十九王を生擒した

が今一王を得んとして居つた。普明王は其の日遂に鹿足王に捕へられて牢獄に投せられた。そこで普明王は前の婆羅門に布施の口約を果すことの出来ないのを怨みこれを鹿足王に訴へ一日の許を得て婆羅門に布施すべく居城に歸來した。この悲しむべき運命の手に捉へられた明王の死を惜しむ臣民は普明王に説いて再び牢獄に歸る要なきことを哀願したが、王は許さなかつた。不妄語戒を破ることは何物にもかへ難きことであるとして、王は再び鹿足王の許に身を投じた。鹿足王はこの明王の熱い殉教の態度と明王の語り出づる尊き法に化せられて、終に邪教を捨て佛法に歸依した。そこで普明王は法を得たばかりでなく國を護り身を持つことが出来たといふ。尸滿の尸は尸羅で戒のこと。持戒の滿をいふ。○屬提仙人等。屬提仙人は林間に於いて忍辱を行じつゝあつた時である。歌利王は侍女を引き具してその林に遊ばれた。侍女等はかの仙人の忍辱を讚嘆する説法に聞き惚れて王にかしづくことをも忘れた。王これを見て、に怒り刃を振つて仙人を害したが、仙人は少しも心を動せず最後まで能く慈忍の心を保つたといふ説話因に屬提は忍辱の梵語である。○大施太子のこと亦大論に出づ。大施太子誤つて如意珠を海に遺失した。その如意珠は欲するものは何物でも給してくれる珠で、太子はこの珠によつて一切衆生に布施し貧を救ふことが出来た。この珠を失ふことは太子の生命を失ふことであり同時に一切衆生が救済の道を失ふことである。よつて太子はいかにしてもこの珠を得んとて、大海の

忍辱仙人

大施太子

釋迦菩薩

水を酌取り盡さんと企て筋を斷ち骨を折るも少しも懈らなかつた。諸天はその志に感じてこれを助け酌んだから、海水の半を減じ龍神も海の乾上るのを恐れて珠を太子に與へたといふ。これ精進の滿である。杼は酌取ること也。○七日翹足等。これは『婆沙論』に出で。昔時弗沙佛に二人の弟子があつたがその一人は釋迦菩薩であつた。弗沙佛弟子を捨て山に入つたが、釋迦もその後を逐ひ師の踪跡を尋ね容易に見出せなかつた。漸くにして彼佛寶龕中に在りて火界定に入り威光赫奕として常の相ではない。尊さいはんやうもない。釋迦は佛の威容を拜みたまつりて驚喜措く所を知らず、嘆佛の偈を説くこと七日己を忘れて讚嘆恭敬をいたした。その七日の嘆佛の間一足を挙げたまゝ地に下すことを忘れて佛を嘆じたそれ程に精進であつたといふ。これ精進の滿である。○尙闍梨等の事『大論』に出づ、尙闍梨は螺髻仙人であるが第四禪定を得て出入の息絶え一樹上に坐つて居たが枯木の如くであつた。時に鵠來つて其の髻中を巢として卵を生んだ。偶々仙人定より出で髻中の卵を見その破れんことを恐れて再び入定した。かくて卵が鳥となり巢立をするまで定を出でなかつたといふ。○劬嬪大臣のことは『長阿含經』に出づ七人の王ありて共に天下を領せんとして争鬪止む時がなかつたので、劬嬪大臣は閻浮提を七等分して城邑聚落等すべて不公平がなかつた。そこで諍を息めしむることが出来た。これは智慧の滿である。

螺髻仙人

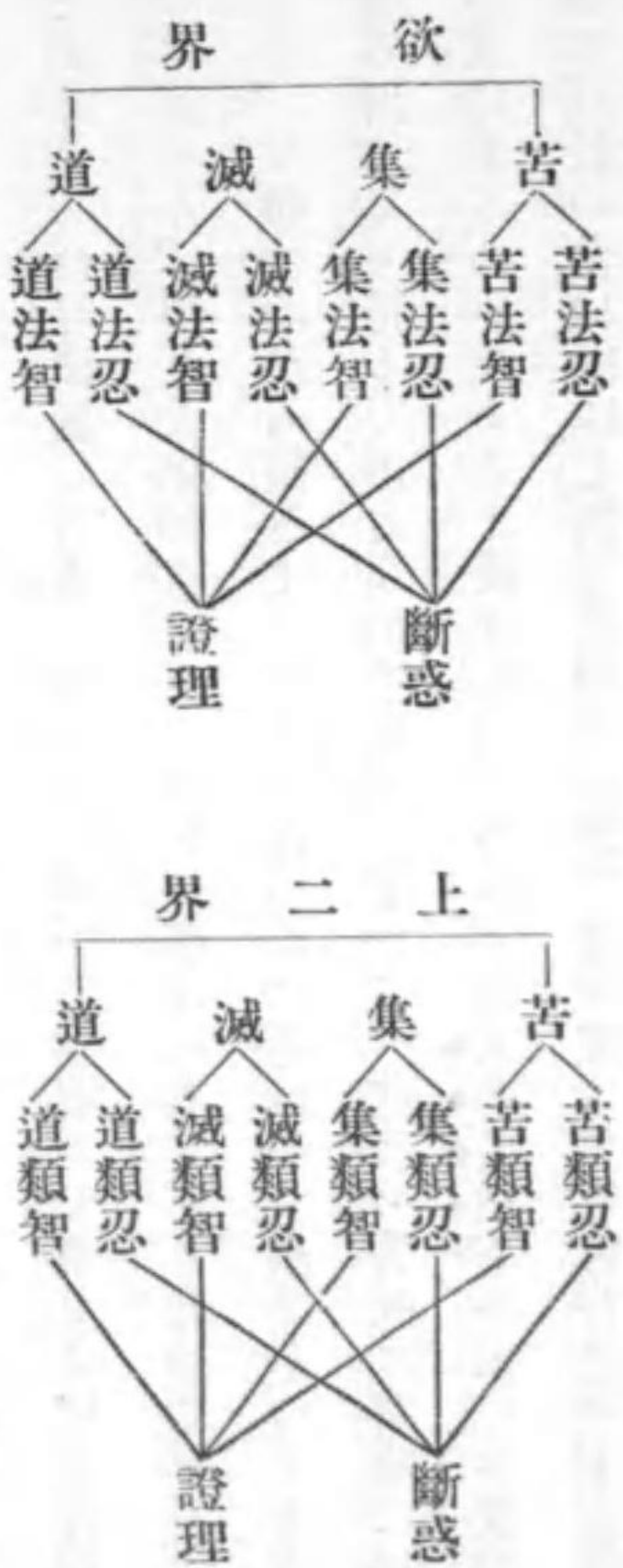
劬嬪大臣

次入補處生兜率託胎出胎出家降魔安坐不動爲中忍位次
 一刹那入上忍位次一刹那入世第一位發眞無漏三十四心
 頓斷見思習氣坐木菩提樹下生草爲座成劣應丈六身佛受
 梵王請三轉法輪度三根性住世八十年現老比丘相薪盡火
 滅入無餘涅槃者卽三藏佛果也。

【文科】菩薩行因滿ちて八相成道すること明す。

【句解】入補處の補處は佛の候補者といふ程の意。處は佛の坐處。この下八相を具す。八相は一兜率降下・二託胎・三出胎・四出家・五降魔・六成道・七轉法輪・八入涅槃である。○爲中忍位は聲聞位に引き當ると前五相は中忍位上忍位世第一位に當るといふ。忍位を上中下の三に分け。その中上忍位はたゞ一刹那だけですぐ次の世第一位に入り。それも又一刹那だけで永く停らずにすぐ見道に入るといふが聲聞位の所談である。○發眞無漏は眞理に契ひ煩惱を離れた智慧を眞無漏といふ。漏は煩惱のこと。○三十四心頓斷。無漏智の三十四心で一度に見思の煩惱を斷じて了ふが、菩薩に限つた斷惑の法である。三十四心とは見惑は十六心思惑は十八心合せて三十四心となる。見の十六心は欲界の四諦を照す智と上二界の四諦を照す無漏智とで八心、そ

れに一諦を照す智毎に斷惑と證理との二心が分れる。そこで十六心となる。即ち左の如し。



一諦を證る智に忍と智と分れるは忍は認許でそれに違いないと始めて認める、そこが斷惑である。いよくほんとうにさうだと知られたが智、即ち證理である。次に欲界に法といひ上二界に類といふは、欲界は現前に實物を捕へて居るから法である。上二界の法は實物を見ない欲界の法から類推したもの故に類といふ。以上見道十六心。次に修道十八心は思惑は九地（即ち三界）の九品の惑を通じて一品づゝ斷する。例へば先づ欲界より非想天までの下々品の思惑を一度に合して斷じ、次に下中品の思惑を亦合斷する。かくて九地九品の惑は九心で斷せらるゝ更に又その一品を斷する智毎に無碍道と解脱道即ち斷惑證理の二が分れるから十八心となる。（無碍道は智が惑に碍げられぬやうになつた所に名け、無漏智だけで獨り自在に理を照すから證

二百六

脱道といふ。そこで三十四心で見思二惑が断せらる。○習氣を断じて了ふは菩薩に限る。○因ちなみにこゝで明にして置かねばならぬことは藏教の菩薩の行因はすべて断惑以前に於いてなされることである。これを伏惑行因といふて、菩薩が自利利他の行をなすに煩惱を断せずたゞ伏し抑制して修する。これは何故なるかといふに、藏教では見思二惑は三界の生を潤す原因である若しこれを断じて了へば三界へ生を受けることは出来ぬ。若し三界へ生を受けることが出来な
いならば、衆生化益をすることが出来ぬ。化益をせねば菩薩の行は積めず従つて佛にはなれぬ
それ故に惑を抑制するだけで、その惑の力で三界の生を受けて衆生化益の修行をするから伏惑
行因といふ。そこで断惑は行因が満じていよいよ佛果に登るといふ所で一度に成就して了ふの
である。これは藏教の菩薩に限つたことで通別圓の大乗では伏惑行因を許さぬ。それは後に至
つて述べん。但し大乘からいへば自分が煩惱の身でありながら果して衆生化益が出来るであら
うか、又煩惱心から積み上げたものはいかにそれが立派であつても有漏雜善で、無漏の佛果を
得る因となり得るであらうかと批判を下して、藏教の菩薩は實際に於いてあり得ない、たゞ教
の上にあるのみであると談するのである。○木菩提樹下の木の字重複のやうであるが、これは
後の三教の佛は或は七寶菩提樹下(通教)蓮華藏世界七寶菩提樹下(別教)等といふに對して木と
いふのである。○劣應丈六身は大乘の勝應身に望めて劣應といふ。丈六は佛身の長たをいふ。○

梵王請は釋迦菩提樹下を立たず説法することなしに其のまゝ入滅せんとしたまへるを以て梵天
王が轉法輪を釋迦に懇請せられたことをいふ。○三轉法輪は説法のこと。示轉勸轉證轉を三轉
といふ。示轉とは苦諦はかくく集諦はかくくと四諦の理を示教するをいふ。勸轉は苦を知
るべし惑を断すべし滅は證るべし道は修すべしと勧めたまふ説法をいふ。證轉は我れ已に苦を
知り我れ已に惑を断せり等と佛自らの所證を證據として四諦を説くが證轉である。法輪の輪は
輪寶のこと輪寶は能く物をくだくものであるが、法は煩惱を摧破する故輪寶に喩へて法輪とい
ふ。○三根性は聲・縁・善のこと。○薪盡火滅は佛身を薪に譬へ智恵を火に喩へ灰身滅智するこ
と。藏教の菩薩はたゞ八相成道して説法度生したまふことは二乗と異なるも、その歸する所は
同じく灰身滅智の無餘涅槃である。

上來所釋三人修行證果雖則不同然同斷見思同出三界同
證偏眞只行三百由旬入化城耳

【文科】藏教の行位を總結する一節。

【句解】上來所釋は藏教の行位を明す略明藏教修行人之與位等以下を指す。○修行證果は
因位の修行と果位の證果のこと。證果の内容のことをいふにはあらず。○行三百由旬は化城の
譬に出づる化城までの距離が三百由旬と説いてある。それは三界の間のことを譬へたもの。化

城のごと前に出づ。
略明^レ藏教^ヲ竟^ス。

【文科】 藏教の所明を總結する語。

(二) 通 教

次明^ニ通教^ヲ者^{ナリ}。

【文科】 以下通教を明す。大科如左



【句解】 通教の教義の大綱は前の四教の解説^{五頁二}及び四種四諦の^{下五頁}で略辯したが。藏教と同じく空理を真諦とし三界を出づるを以て目的として居る。而も通教が大乘の初門であり藏教と異なるは云何といふに、空の考へ方が異なるからである。藏教では「因縁和合なるが故に」と

いふ理由で空を説くが、通教では更に一步を進めて「如幻如化なるが故に」といつて空を説いて居る。如幻如化は主観の妄想である。何等そこに生すべき因縁があつて生じたのではないからわれ／＼の見聞覺知せる世界はたゞ一場の夢である。如幻如化である即空であるといふのである。例せばこゝに花を盗んだといふ犯罪がある。それは花は實に美しい物であるといふ花に對する誤れる觀念と、それからそれを所有せんとする貪愛心(惑)が犯罪(業)の源因である。それ故その誤れる觀念を匡し所有慾を對治せば罪を犯さないやうになる即ち犯罪が空に歸する。かういふ風に考へるのは藏教である。通教では花を美しいと思つたことも夢であると同時にそれを盗んだといふことも同様に夢である。即ち犯罪そのまゝが夢である。犯罪を夢と氣が付かぬから罪に苦しめらるゝが、それが夢であると知らるれば別にそれを償ふべき犯罪はないのである。かく達觀する處に初めて犯罪を完全に離脱すること出来るといふのが通教である。そこでこれを因縁即空と言つて居る。即ち因縁假和合の世界はそのまゝ空である。なせなればそれは眞理を見得ない無明煩惱が勝手に作り出したもので、客觀的に何等存在の理由を持つて居ないから空である。かく夢の世界をすべて否定してそれに執着せず睡を破ることを教へて居る通教は、即空の教によつて半面に夢ならざる實在の世界、原理の世界の儼存することを暗示して居る。この夢のさめた所に新に展開する實在の世界は大乘教の力を盡して開顯せんとする界

のあるもので物質のことなれど今は廣く萬有をいふ。萬有のこのまゝが如幻如化であり妄想顛倒の世界であると空するを體色入空といふ。體色入空の語は析色入空に望めて言ふので、藏教では萬有を因縁和合の法なりと分析した上で空を證る故析色といふに對して、分析せずそのまゝにして空を證るから體色といふ。

(2) 通教の行位

依大品經乾惠等十地卽是此教位次也一乾惠地未有理水故得其名卽外凡位與藏教五停心總別等三位齊二性地相似得法性水伏見思惑卽內凡位與藏教四善根齊三八人地四見地此二位入無間三昧斷三界八十八使見盡發眞無漏見眞諦理與藏教初果齊五薄地斷欲界九品思前六品與藏教二果齊六離欲地斷欲界九品思盡與藏教三果齊七已辨地斷三界見思惑盡但斷正使不能侵習如燒木成炭與藏教

四果齊聲聞位齊此八辟支佛地夏侵習氣如燒炭成灰九菩薩地正使斷盡與二乘同扶習潤生道觀雙流遊戲神通淨佛國土十佛地機緣若熟以一念相應惠頓斷殘習坐七寶菩提樹下以天衣爲座現帶劣勝應身成佛爲三乘根性轉無生四諦法輪緣盡入滅正習俱除如炭灰俱盡

【文科】通教の行位を明す。

【句解】依大品經は大品般若經十九大論七十五六に出づ。大論にはこれを三乘共の十地と呼んで居る。尤も其の十地といつても七地までは三乘に通ずるも、七地で聲聞は證果を得、八地で緣覺は證果を得、九十地は菩薩だけの位地である。併し三乘の者が共にこの位地を歷てそれらの證果を開くから其の位地といはれる。○一乾惠地はまだ少しも眞理の濕ひを受けることが出来ぬから乾いた智恵といふのである。これは聲聞位の五停心觀總別念處の三位と同じく體空の觀法にはとりかゝつてもまだ空理の見當もつかぬ位に名くる。○二性地はボンヤリ空理の見當がついたところをいふ。性は法性で法性の眞理が臍氣ながら見えかゝつたといふので性地といふ。併しまだ明に眞理を體驗することが出来ないから內凡位である。○三八人地は八忍

地のこと。これは藏教の菩薩位の下二百頁で叙べた見道十六心の中第十五心に當る位で、第十五心は上二界の道類忍のこと、こゝまで苦法忍苦類忍等の忍と名のつく無漏智だけでは第八忍目に當るから第十五心を八忍といひ八人地と呼ぶのである。第十六心即道類智の位を見地といふ。○無間三昧とは第三地と第四地は引き續きの定中でその間に出定せぬから間斷がないよつて無間三昧といふ。○五薄地は欲界の煩惱も手薄になつた位であるから薄地といふ。○六離欲心。こゝで欲界の思惑をすべて斷盡して欲界から離れるから離欲といふ。○七已辨地はこゝで三界見思の煩惱を斷盡して出離の目的が已に成辨したから已辨地といふ。○八辟支佛地の辟支佛は縁覺の梵語で習氣に手をつける位。○九菩薩地は佛果を得る因行を積む位。通教の菩薩は藏教の菩薩の伏惑行因と異なり見思二惑を斷盡すること二乗と同じである。然らば何によつて三界に出で、衆生化益をなすかといふに答へて扶習潤生といふ。正使即煩惱の本體だけは斷じたが、習氣は斷せずに残して置きそれをたよりにして三界へ受生するのである。○扶習潤生とは習氣を扶持しより立て、三界の生を潤し受けるの意。大體習氣はたゞ煩惱の餘習であるから力が弱く到底それだけでは潤生することが出来ぬから。強い誓願力を以てこの弱い習氣を扶持し扶助してこの三界に受生するのである。よつてこれを亦誓扶習生ともいふのである。

○道觀雙流は道と觀とを併べ行するの意。道は化導にて利他の行をいひ觀は空觀にて自利の行をいふ。空觀からいへばすべて如幻如化にて化すべき衆生も化せんとする者も其體空なれば、衆生化益に實を認め功に誇るべきではない。併し夢事とは知られてもやはり夢の當事者は眞劍にうなされ苦んで居ることは否むことの出来ぬ事實であるから、先覺者はこれを默視すべきではない。夢みる者をゆり起してやらねばならぬ。それが菩薩の化他の修行である。即ち化道は世相の差別を觀る假觀である。一寸見ると空觀と假觀とは矛盾して居るやうに見えるが、決して矛盾したものではない。因縁即空と觀じて夢から覺めることがいよく明になれば、夢を貪つて世相に局執せる者をおはれむ心がいよく盛になるべきである。又世相の中に深く立ち入つて行けば行く程いよく世相が深い睡夢であると知らしめらるゝから、化道と空觀とは互に相扶けて雙び行せらるゝ。よつて雙流といふ。○遊戯神通は衆生濟度の自由自在なるをいふ。菩薩が衆生濟度をするのは丁度無心の兒童が遊戯するやうに濟度してやらうといふやうな邪智なしに自然に行はれるから遊戯といふ。蓋し夢のさめたものは自然と他人の夢を呼びさますには居れぬからさますのであつて少しの不自然がない。神通は變現自在にて少しの障礙もなく衆生濟度をする事。○淨佛國土は菩薩が因位に於いてやがて得べき果上の佛國土を清淨に莊嚴するをいふ。例せば菩薩が因位に於いて布施を行じて衆生を賑やかしたならば、その果上の佛國へは

藏教の佛と通教の佛

帶劣勝應身

布施を行する衆生が多く生れ来て佛國を淨め莊嚴する。そこで因位にあつて佛國土を淨むる爲の因行を積むのである。○十佛地等。この下藏教の佛と望めてその同異を知るべきである。通教の佛は通教の教意の表現であり藏教の佛は藏教の教意から割出して説いてある。○機縁若熟等は所化の機縁の熟した時に通教の菩薩行は満足成就して佛果を證る。これ藏教の菩薩が發願を填めるだけの行が満じた時に佛果に入ると異なる。これを齊業齊縁の相異と呼んで居る。是れ藏教では善因善果の因縁に實を認める生滅教であるから自己の行業が満じて佛果を得るし、通教では因縁即空であるから佛の存在を自行の果とすべきではない。當然所化の機縁即ち未だ即空に達せざる者の存在する所に即空を知らしむる爲の佛が現はれねばならぬ。○一念相應惠は一念に眞諦即空の理に相應する智慧のこと。これ亦藏教の三十四心斷結成道と異なる。即ち通教は體空觀であるから頓の一念にすべての眞理の光を見開く筈である。藏教は析空觀であるから漸々眞理の光明が知られて行くのである。○頓斷殘習は殘して置いた煩惱の習氣を一度に斷じて了ふこと。頓の字通教の教意を顯す。藏教では正使習氣を斷ずる。○坐七寶菩提樹下の七寶は藏教の木菩提樹に對して勝れたることを顯はす。○天衣爲座は藏教の生草を座とするに對す。天衣は生滅變化せざるものなれば通教の無生無滅の眞理を現はし、生草は生滅するものなれば藏教の教意に順ず。○帶劣勝應身は藏教のたゞ劣應身といふに異なる。通教は利根の菩薩は進んで空の中に中道を見る。これ即空の教に中道を含めて説いてあるからだ。よつてその即空を表現する佛身も亦一面中道眞如を具現する無量の相好の勝れたる佛身(勝應身)を含め一面はたゞ空を表現する劣應丈六身として示現したまふを帶劣勝應身といふ。(こゝにも通教の佛は所化の機縁の爲に現はれたものであるから、機縁の利鈍に應ずる身を現じ給ふことを注意すべし)○轉無生四諦法輪は輪法輪のこと。無生四諦は通教の教義なること前叙の如し。○緣盡入滅は度すべき衆生の機縁盡く濟度されて、度すべき所化がなくなれば入滅したまふといふこと。これ亦所化の機縁熟して成佛したまへる佛の自然の結論である。藏教の佛が薪盡火滅とて佛自らの果報が盡きて入滅し給ふに對して可知。

經云、三獸度河謂象馬兔也。喻斷惑不同故。又經云、諸法實相三乘皆得亦不名佛。即此教也。

【文科】前に通教の行位を明したつたから、今は經文を引いてそれを證する也。

【句解】經云は涅槃經德王品二十一及同獅子吼品二十五の取意の文である。此喻は亦優婆塞戒經一右にも出づ。○三獸度河。河は空理に喩ふ。象は常に河底を踏んで渡るを菩薩が空理に徹すること深く煩惱の正使習氣共に斷ずるに喩ふ。馬は淺瀬は河底を踏むが深い淵は泳ぎ越すのを緣覺が煩惱の正使を斷じて習氣の一分を侵すに喩ふ。兔は淺深共に泳ぎ渡るを聲聞の

三獸渡河の喩

たゞ正使だけを断じて習氣には手をつけぬに喩ふ。○又經云は舊華嚴二十七の文である。諸法實相は諸法即空といふに同じ。なせかといふにわれ／＼の見る萬有の如實の相は如幻如化で即空であるから、實相といふは即空と同じ意味に用ゐらるゝ。(尤も法華經の諸法實相はやゝ其意を異にして、即空の裏にあらはるゝ實在の世界の實相をあらはす語である)その即空の理を三乗の人が皆一様に證得することを三乘皆得といふ。この三乘皆得が通教の行位の相であるからこの文を引證したのである。(尤も華嚴經の本文では二乘皆得とあれども意を得て三乘皆得としたのである。如何といふに華嚴經は二乘不共の法門を明すが主であるから二乗だけを出せども空を證る菩薩が其の中に含まれてゐるのは勿論であるから三乘としたものである)○亦不名佛は諸法實相(即空)の理を證つてもそれは眞實の佛とはいはれぬといふこと。これは華嚴經の立場から三乘皆得の通教を批評したもので。通教の佛は中道の理を知らない。さういふ眞理の底に徹しない佛があり得べきではないといふは、中道を談する別圓二教から空理を眞實とする通教の批判である。但し今この下は正しく諸法實相三乘皆得の文を以て引證したのであつて、この亦不名佛は引續きの文であるから引いたのと、今一つは通教の佛が眞實のものではないといふことを點示して通教の偏權なることを知らせんが爲にこの文まで一緒に引いたのである。

(3) 三乗の同異

此教三乗因同果異證果雖異同斷見思同出分段同證偏眞

【文科】前に通教の行位を明したつたから以下はその行位を歴て修行する三乗の同異を明す。其中二に分れて今は初に總じて三乗の同異を叙ぶる(次には別して菩薩の利鈍を叙ぶ)

【句解】因同果異は因にありては三乗共に因縁即空の教を聞き、又共に體空觀を修するを因同といふ。果異は前述の如く斷惑不同に證理にも淺深あるをいふ。○出分段は三界を出づること。分段は別々な段階をれ／＼切りのついて居ること、三界の果報は身の大小壽の長短各別の段階があるから分段生死といふ。これに變易の生死と合せて二種生死といふ。

然於菩薩中有二種謂利鈍鈍則但見偏空不見不空止成當
 教果頭佛行因雖殊果與藏教齊故言通前

【文科】以下別して菩薩の利鈍を述ぶる。其中先づ鈍根の菩薩を明す。

【句解】見偏空不見不空とは因縁即空の教中には空と不空とを含むが、その空の一面だけ見て不空を見ないのは鈍根の菩薩である。即空に空と不空とを含むといふは前に叙べた如く即空といふ言はわれ／＼の主觀の妄想を空するのであるが、ものそのものゝ實在を肯定(不空)し

二百二十
 て居るからである。色即是空の空には空即是色の不空が含まれてある。○止當教果頭佛。當教はこの通教の中だけでといふ意。果頭佛は果は因を積んだ上にあるから頭といふ。その果頭は即佛である。果頭佛は要するに佛のことである。なせさういふ形容詞を遣ふのかといふに、尸位素餐の佛であるといふことを顯す爲めである。即ち通教の鈍根の菩薩は七地沈空といふて第七地で空理を證つて灰身滅智をして丁ふし。利根の菩薩は遅くとも第九地までには途中から別圓二教へ轉じて了ふから、實際佛地へ登る人はないのである。これを果頭無人といふが。このやうに通教の佛はたゞかざりの佛である。それを言外に含ませて果頭にのせてある佛といふのである。然らばなせ佛をかざつて置くのかといふに、若し果頭に佛が置いてないならばその教は不完全な教といふことを明示して居るのであるから教とすることは出来ない。たとへ權教であつても初めからこれは權教と打出したならば權教の役目はつとまらぬ。やはりそれが轉迷開悟の道がつき通つて居なくてはならぬから、四教いづれも一教々々が獨立して成佛の道であることを明さねばならぬ。それ故に四教はいづれも果頭の佛を持つて居る。しかし權教は初めから佛意では成佛の道ではなく、たゞ未熟の機を調へて實教に入らしむる階梯に過ぎない。成佛の道は唯一乗法の圓教の外はない。そこで通教のみならず前三教はすべて教の上だけに佛があるばかりで實際それによつて成佛するものはない。今は暫く通教當分の上でいふから鈍根の

菩薩も佛になるといふので止成當教果頭佛といひ止の字、當教の字、果頭の字すべて教の上だけのことで實際はさうでないといふことを言外に含ませてある。○行因雖殊は藏教は析空觀、通教は體空觀なれば行因は別である。○果與藏教齊は。これにも文相と文意と二意あるべし。文相からはいづれも空を證る果頭佛となるから齊しといふことであるが、文意はいづれも空を證つて灰身滅智して來佛が出來ぬことが齊しといふことである。○言通前とは前の名義を釋する處へ會合する語である。

若利根菩薩非但見空兼見不空不空即中道分二種謂但不
 但見但中別教來接若見不但中圓教來接故言通後問何
 位受接進入何位答受接人三根不同若上根三地四地被接
 中根之人五地六地下根之人七地八地所接之教眞似不同
 若似位被接別十廻向圓十信位若眞位受接別初地圓初住

【文科】次に利根菩薩の被接を明す一段。

【句解】不空即中道は空に即する不空なれば偏つた相待の眞理ではなく非有非空の絶待の眞理なること明である。○但中不但中。但中は別教の中道、即ち別教では中道は萬法の事象に即

せざる但理にして超越的原理なれば但中といふ。不但中は圓教の中道のこと。即ち圓教の中道は萬法の事象が其の儘中道にして性に萬法を具する内在的原理なれば不但中といふ。○來接の接は接續の義でつぐこと接木といふが如し。通教の菩薩が別圓二教に來て通教と別圓とを接ぎ合せるを來接といふ。亦これを被接といふ。被は「かむらしめる」ことで佛の力で接續せしめられると來接を佛力に歸して言ふ時の語である。別教に接續するものを別接と言ひ、圓教に接ぐものを圓接と言ふ。而してこの被接はもとく空理と中道との交際を示す法門であるから正しくはこの二種より外はないが、これに類して別教の菩薩が途中から圓教の菩薩に來接するものを圓接別といつて。前の二に合せて三接と呼んで居る。○問何位受接等の問答は被接の位地を明す。問に二あつて、何位受接とは通教の何の位で接を受けるかと。進入何位は別圓二教の何の位に進入するかの二なり。答も亦二となり初は所接の通教の位・所接之教以下は能接の別圓の位を明す○上根三地等。これによれば受接は三地乃至八地までの間なり。然るに『止觀輔行』六之四七には四地乃至九地を受接の位とす。今一地づゝ繰り上げてある。今の文は恐らく『輔行』三之三三に據れるものであらう。然ればいづれも荆溪に出で、而も其の説を異にするは云何。これに就いて先づ被接の可能なるは眞諦の空理を見たる後でなければならぬ。何故なれば大體空理そのものが中道にして、眞理の上では空と中とは一體である。それ故その實體に

觸れねば空から中道へ轉することは出來ないわけである。所が空理を見る位は第四見地である。而も第三八人地と第四地とは無間三昧にて一つ定中の二位であるから、寬にいへば第三地より數へてもよい。それから第九地まではいづれも空理を見るから被接が可能である。第十地は佛果であるから被接は問題とはならぬ。但し第九地は菩薩の因行を修する位であるからいはゞ佛地の準備位であるからそこまで乗り込んだらば第十地と同じ理由で問題とならぬ。そればかりでなく、通教の扶習潤生の菩薩も亦有教無人の位であるから、嚴密にいへば第八緣覺地に止まるべきである。よつて今第三地以下第八地までとしてそれを三品に分けたのである。『輔行』の第四地以下第九地といふもたゞ見道の後位たる第四地をとりその代りに後の第九地は當教の教意の上から取つたもので別に異説ではない。○所接之教以下は能接入の別圓の位を明す。所接の所は能所を顯す語にあらで接するところ云々と語のハヅミを見せる語である。○眞似不同。眞は無明を斷じて一分中道を見付けたが眞位で、まだ無明を斷じ得ない間を似位といふ。圓教では初住以上別教では初地以上は眞位。それ以下はすべて似位である。其中別の十廻向及圓の十信位を似位の被接とするは最も勝れたる位を擧げたものにて、それ以下の似位に入る者もあるべきである。但し通教にて見惑なり思惑なりを斷じて居るから、それ相當の位地に轉入するは勿論である。其の中似位に接入するを按位接といひ眞位に接入するを勝進接といふ。似位に入

つて來た者はたゞ中道の理を解了したので別圓二教へ入つては來たが、既に通教に在る間に見惑なり思惑なりを斷じて居る以上に位を進まぬから按位といふ。按は抑へて進まぬこと。眞位接入は之に反し無明の惑を斷じて佛の仲間入をするから勝進といふ。○眞位受接は眞位能接とせねば意通せず。

兩理交際

【餘説】被接の義意。被接は天台發揮の説として天台一家の誇る所であるが、「空」と「中道」の兩理の交際を明確にした點に於て天台の教學史上の功蹟は没すべからざるものである。「空」と「中」は印度では中觀瑜伽兩宗の諍となり、支那では三論成實の空宗と地論攝論の有宗との對立となつて天台以前の教學界の宿題であつた。否な啻に過去に落謝した問題ではなく現實は夢として否定すべきか、現實は理想實現の世界として肯定すべきか、常にわれらの精神生活に往來して解決を迫つて居る千古の懸案である。而して天台がこれに明快な解決を與へてくれた。それは現實を夢として否定し切つた所から新しい理想實現が生れて來るといふのである。通教の菩薩が別圓二教に來接するのはこゝに目が醒めたからである。そしてこれらの被接の菩薩が圓教に徹して更に一轉機を見出したのである。新しい理想實現の世界が見開かれることによつて始めて夢のやうな現實を否定することが出来るのだ。即ち空から中道へと進んで眞に中道に徹した時に中から空への妙趣に接するのである。それで空は中道を内容

とする時徹底した空であり、中道は空によつて純眞な相を顯すのである。この兩理の不可分の交際を明確にするものが被接の法門である。

(4) 藏通同異

問。此藏通二教同是三乘同斷四住止出三界同證偏眞同行三百由旬同入化城何故分二答。誠如所問。然同而不同。所證雖同。大小巧拙永異。此之二教。是界內教。藏是界內小拙不通。於大故小析。色入空。故拙此教。三人雖當教內。有上中下異。望通三人。則一槩鈍根。故須析破也。通教則界內大巧大謂大乘。初門故巧。謂體色入空。故雖當教中。三人上中下異。若望藏教。則一槩爲利。

【文科】 以上に通教の概要を明したつたから、今この一段は藏教を望めて二教の同異を料簡す。

【句解】 問。此藏通等。問の下に二教の同點を擧げて二を分つを問ふ。四住は見思二惑のこと。藏教集諦の下に出づ。○答。誠如所問等。答の下に二教の異點として大小と巧拙の二對を擧ぐ

○藏是界内小拙等。二教が同じく界内教でありながら藏教を小乗といふのはたゞ界内の迷をさますだけを教の目的として居るから、専ら界内の事相を明にすることに努めて灰身滅智に至らしむるにあつて、少しも界外の淨土に心を向け中道真如の理に通入する所がないから小乗である。それを不通於大故なりといふ。それに對して通教は界内教ではあるが界内の事相を明にするのが教意ではなく、その界内そのものが依止して居る本體眞理を明にするのが本意である。界内の本體眞理は空の言で顯されてはあるが、それは直に中道眞如の中道を指して居るのであり、又隨つて界内の本體眞理を明にせんことそのことが界外の淨土へ通入せしめねば置かぬから大乘といはれる。今それを大謂大乘初門故といつてある。○次に巧拙の異は觀法に就いていふもので、藏教は析色入空觀で拙・通教は體色入空觀で巧である。一々分析して空を見るは、そのまゝの上に空を見るに比して手ぎはが拙いといはねばならぬ。析色體色の解説は前述の如し。○一槩鈍根は藏教の上人たる菩薩も尙ほ析空より知らぬから通教の下人たる聲聞の體空を修するに比して尙ほ鈍根であるから一槩に鈍根といふ。○須析破也は方等の會座で小乗が析破せられ大乘が嘆譽せらるゝことを挿語したもの。

問。教既大乘何故有二乘之人。答。朱雀門中何妨庶民之出入。故人雖有小教定是大大乘兼小漸引入實豈不巧哉。

【文科】 この問答は前の問答に通教を大乘とせるより派生したもので、通教に二乗あるに就いての料簡である。

【句解】 答。朱雀門等。朱雀門か天子の南門にて而も庶民の通行を許すに譬へて、通教は大乘の外廊にある初門であるから二乗の通入を許すのに何の不思議はない。庶民が出入すればとて門は天子のものである。二乗が所被の機としてあらうとも教は大乘であるに疑ふ餘地はない。却つて大乘教に二乗の通入を許されるので、二乗の小機を大乘の眞實に方便誘引せられる様を見るべきである。豈佛の善巧方便を仰ぐべきではないか。

般若方等部内共般若等即此教也。

略明通教一竟。

【文科】 通教の所明を結ぶ語。

【句解】 般若方等等。通教は藏教の阿含經のやうに通教だけを専ら説かれた經典を持たぬ。その散説してあるのは般若部と方等部の經典である。○共般若は大論には般若に共般若と不共般若とを分けて居るが、それを取つてその共般若が通教であると指示したのである。共般若といふは聲聞緣覺の小乗の機を菩薩と一緒にして説きたまふ般若といふことである。不共般若は菩薩だけに特別に説かれた般若をいふ。三乘人を一緒にして説かれる教は通教である。

共般若と
不共般若

(三) 別教

次明別教者

【文科】 以下別教を明す大科如左



【句解】 別教の教義の大綱は前の四教の解説及四種四諦の下で略述する如し。地論學派の眞識緣起説及び攝論學派の妄識緣起説は共に別教所談とせられ、又従つて起信論の眞如緣起説及び唯識論の賴耶緣起説も亦別教の典型とすべきものである。殊に唐朝以後の天台宗に於ては唯心緣起説の用ゐらるゝ間に立ちてその教義を主張せしより眞如緣起説を別理隨緣といひて別教所談となし、これを以て殆んど別教の代表的教義とするに至つた。よつて別教の教義の大綱

斷惑證理は標語

はこれによつて知るべきである。即ち別教は萬法のいかなるものであるかを探求してそれが眞如の一理の隨緣の世界であることを明にした。然らば自性清淨にして絶對平等の眞如がいかにしてこの汚穢不淨に充てる相對差別の世界となつたか。曰くそれは無明（眞如の理を見得ない無知）の所作である。鏡の如き湖が怒濤荒れ狂ふやうになるは無明の風が吹き來つたからである。眞如は無明によつて相對差別の世界となり無明のある間は生死流轉は止まない。さればわれらは無明を斷じて眞如を證らねばならぬ。斷惑證理は此教の標語である。従つて歷劫迂廻の修行を積みて罪業を償ひ惑障を滅して後涅槃の妙諦を證るのである。即ち流轉門に於いては眞如の別理の隨緣を説き、還滅門に於いて斷惑證理を明し、眞如を以て超越的の原理として、生死に即して涅槃を觀する能はざるは別教の權教たる所以である。

(1) 別教の名義

此教明界外獨菩薩法。教理智斷行位因果別前二教別後圓教。故名別也。涅槃云。四諦因緣有無量相非聲聞緣覺所知。

【文科】 別教の名義を釋す。

【句解】 界外獨菩薩法。別教は圓教と共に界外を談する界外教である。蓋し界外の淨土を談

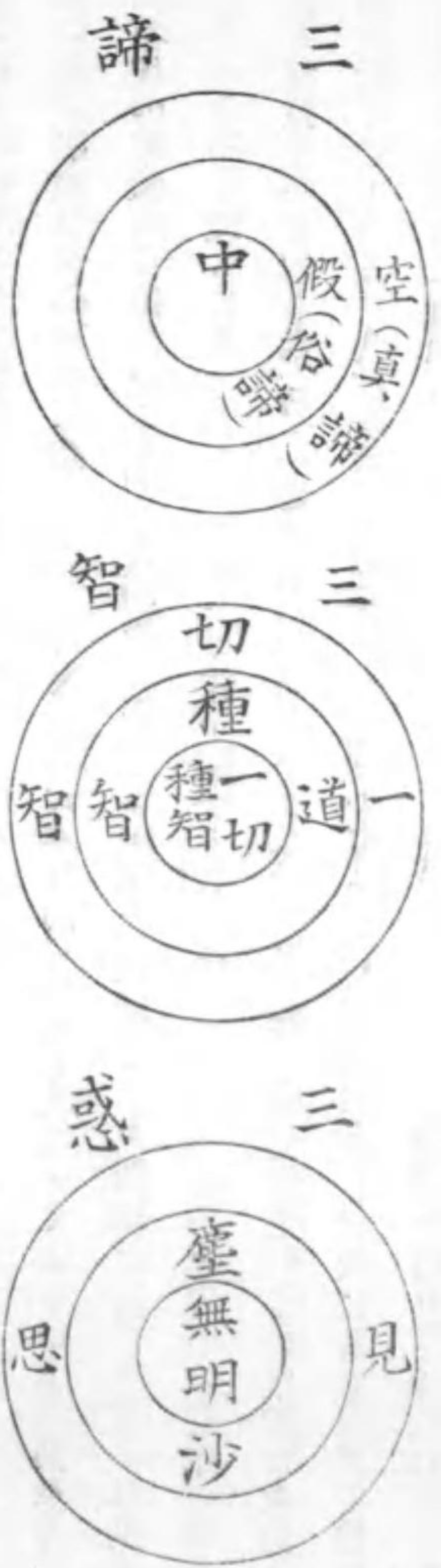
するものは、觀念の世界實在の世界（それは經驗の世界の外なる）を信するものであつて、眞に生きんとするものが當然到達すべき境地である。獨菩薩法とは菩薩だけ一人を所被の機とする菩薩獨特の教法の意である。これ前二教及圓教と異なる點で、前二教は三乘を所被の機として居り、圓教は菩薩を所被の機とするが、その菩薩といふは二乘を包容したものであつて、二乘を除いた獨菩薩ではない。別教は二乘を除いた菩薩だけを所對とするから二乘はその教益に參することが出来ない。獨の字は圓教を簡ぶ語、菩薩は藏通二教を簡ぶ語である。○教理智斷等は正しく別の名が別前別後の義なる旨を釋す。教は能詮の教法で、そこに説かれてあるが所詮の理。その所詮の理をわれ／＼の觀るのが智、その智慧でわれ／＼の煩惱の斷せらるゝが斷。煩惱を斷じて行くところに修行をするのが行。修行してだん／＼進んで行く跡に位がある。その位に因果が分れ因位が極まつて佛果を得る。されば教理等の八法は教によつて轉迷開悟する始終を示したものである。いづれの教もこの八法がある筈であるから、今この轉迷開悟の始終の説き方が餘の三教と別であるから別教と名くるのである。然らばどういふ風に別であるかといふことを簡單に述べん。教に就いて居は、前にも出たやうに二乘を相手にせずたゞ菩薩だけを相手に説いたもの故餘三教と別である。その教に證顯した理は眞如中道であるから前二教と別であり、その中道は但中であつていはゞ絶待の絶待・平等の平等である。相待差別の事相か

轉迷開悟の始終

別教と餘
教殊に圓
異との相
教理の別

智の別

ら孤立した絶待平等の理が別教中道の性能である。そこで第一義諦の中道は眞諦の空と俗諦の假と別なものである。眞俗の空假は相待差別界の原理であるから、絶待平等界を支配する原理とは相容れないものである。たゞその中道は差別界の事象によつて深く閉ぢこめられて居るからして、その差別界の事象を取り除かねば絶待界は顯はれぬから、その差別界を取り除く爲に差別界を支配する眞諦の理によつて先づ三界著有の見を除き次に俗諦の理によつて著空の見を除くのである。かくして差別界の事象のありのまゝの相を徹見して何等差別の事象に迷はされぬやうになつた所に、九界の差別相がわれらの前から除かれそこに心・奥に深く閉ぢ籠められて居つた眞如中道の理が始めて觀せらるゝのである。されば眞如中道は差別の事象の奥に原理として存在するが、差別の事象から孤立した絶待平等の理である。これを但中といひ隔歴三諦といふ。隔歴は眞俗中の三諦がそれ／＼孤立した本質的に特異なものとするをいふ。圓教でいふ空理の當體に中道を見・差別の俗諦のそのまゝが第一義諦とする。圓融三諦の中道とは別である。よつて理も亦別である。次にその理を觀する智も亦別である。前の空假中の三諦の理を見る智慧を一切智・道種智・一切種智の三智といふ（二智の解説は後に出す）。この三智は次第に得て行くのである。先づ著有の見を破して空理を見る時に一切智が生じ、次に著空の見を離れて俗諦を見る時に道種智を得、かくて最後に中道眞如を見る一切種智を得るのでこれを次第



三智といつて居る。圓教の三智を一心中に頓に得るといつてたゞ眞如實相を體驗する一念にすべての智慧を得るといふとは大に懸隔がある。斷はその三智の生ずる時三惑が自ら斷せらるゝよつて三惑が亦前後して斷盡せらるゝのである。即ち別教では三惑は別體で本質的に異なるからして別々に斷せねばならぬ。圓教では三惑は惑相こそ各別であるが、惑體は一の眞如中道に達せざる無明であるとするに異なる。従つて別々な方法で別々な努力を拂つて三惑を次第に斷盡せねばならぬ。これ別教といはるゝ所以である。行は萬善諸行の行相に至つては別圓異なることなきも、行の本質意義は同じではない。別教では行は眞理を得んとする行者の行爲所作と考ふるが、圓教では行は眞理そのものがもつて居るは、たゞ、所作即如來行であつて、その如來

斷の別

行の別

位の別

因果の別

行が行者の上に現はれて來るのが萬善諸行である。よつて別教の行は行者の努力の結晶であるから一行々々が別體である。圓教の行のやうに一行ある所には如來の徳をすべて具有し專注されてあるからして一行に一切行の徳を具へるといふやうな力の充ちた行ではない。次に位は行者の修道の歷程をさすのであるから、別教の位次は行者の努力の延長であるから、一位々々に如來の全徳を胎むことは出來ない。一位々々が不充實であり不満足のものである。その不充實不満足が更に行者を發奮せしめて位次に進ましめるものが別教の位次である。圓教の位は一位一位に如來の萬徳が注がれ従つて一位に一切位の徳を攝めた充實したものであり、その充實の感激が行者を一處に停滯するを許さないで前へ前へと進ましむるが圓教の行者の修道の位次である。かく別圓趣を全然殊にして居る。次に因果は位の前後であつて妙覺果滿の位は果であり十信以上等覺までは因である。又言ふべし、中道眞如を見る初歡喜地以上は果位であり十回向以下を因位といふべきである。いづれにしても位の前後に因果がある。この因果の意義に於いて別圓二教大に趣を異にする。別教では因を積み上げた所に果があると考へる。これは常識的な考へ方で必ずしも別教のみの考へ方ではないが、その常識すなはち眞理の世界を見得ざる情見を基點として打算的功利的にすべてを考へるのが別教である。常識を否定して眞理の世界を見る智慧を本として考へるが圓教である。別教は因を積み上げた所に果があると考へるから果

を得んが爲に因を積むことに努める。併しそこに大なる矛盾が伏在して居る。別教の佛果は眞如の顯現であり絶待の絶待であつて超越的の實在境である。この考に順へばいかに因即ち行者の萬善諸行を積聚すればとて、それは有漏雜善であり相對差別の事象に外ならぬ。然らばいかに因を積み上げばとて超越的の佛果は來らない。然るにも拘らず別教の行者がやはり因を積むことによつて果を得んとするのは、そこに一飛躍即ち相對界と絶待界の境界の超ゆべからざる橋はたゞ相對界の果に立つて論理の許さない一飛躍によつて絶待界に入ることを得るとする。たゞわれらは行けるだけ行くといふことがやがてわれわれの飛躍を可能ならしむるものであるとして、超越的の實在界を夢想しつゝ而も因を積み上げた果を固執して捨てない。併しこれは明に矛盾である。但し超越的の實在を考へることが既に常識の理知であるからして、同じ理知によつて因果を單に對立的なものとするのはそこに一貫した論理によるものである。かの善導が日夜頭燃を拂ふが如くにして積める萬善萬行がすべて虛假雜毒の善であると喝破して、これを以て理想の淨土へ願生せんとするも必ず不可なりと自覺したのは、正にこの常識的因果の概念の破綻を示すものである。然らば圓教の因果は云何なる意義かといふに、因は行者が眞如の理に未達の現實を痛感することであつて、果は眞理そのまゝの世界即ち已達の理想をいふのである。かゝる意義に於ける因果は對立的のものではない。即ち未達の現實はいかにして現は

れるかといふに已達の理想を體驗することによつて始めて現はれるのである。即ち因は果によつて現はれる。これを宗教的に表現するならば如來と等し(果)と知られた所に始めて菩提の道中に入り出した未達の行人(因)として自己を見出すのである。こゝに於いて如來は單なる憧憬の對象ではなく、明に自己の上に其の全相を現した現實の如來である。こゝに眞の因が生れる又その眞の因が生れた時に現實の自己に停滯することなしに大涅槃の果を求めて已まざる心が生れる。因から果へ現實から理想へとの自然の進展が生れる。即ち因が果を生むのである。理想を求め得た人にして始めて理想を有ち得るのである。これによつて因果は眞如實相それ自らのものであつて、因果不二(實相)の基調に立つので、別教のやうに因を積んで後に果があるのではない。因中に果を攝め果の中に因が攝めらるゝ、それだから始めて明に因(未達)を因として認め果(已達)を果として認めて行くことが出来る。所謂不可思議な因果である。かく圓教とは別異な因果を談するが別教である。以上八法に就いて別教が圓教と異なることを叙べたが前の藏通二教の中道眞如を談せざるに異なることはこれによつて推知すべし。以て別教と名くる意義を可く知。○涅槃云は涅槃經聖行品の四種四諦を明す下に出づる文である。無量の四諦のことは四種四諦の下で解説する如く別教の説相である。非聲聞緣覺所知は別教の眞如なり界外淨土なりの無量の四諦を説くことは現實の世相ばかりに心を奪られて居る二乗の及ばぬところで

ある。

(2) 別教の行位

諸大乘經廣明菩薩歷劫修行行位次第五不相攝。此並別教之相也。華嚴明十住十行十迴向爲賢十地爲聖妙覺爲佛。瓔珞明五十二位。金光明但出十地佛果。勝天王明十地涅槃。明五行。如是諸經增減不同者。界外菩薩隨機利益豈得定說。

【文科】 別教の行位を明すに三段ある中、今は初總列諸大乘經所說之行位の一段。

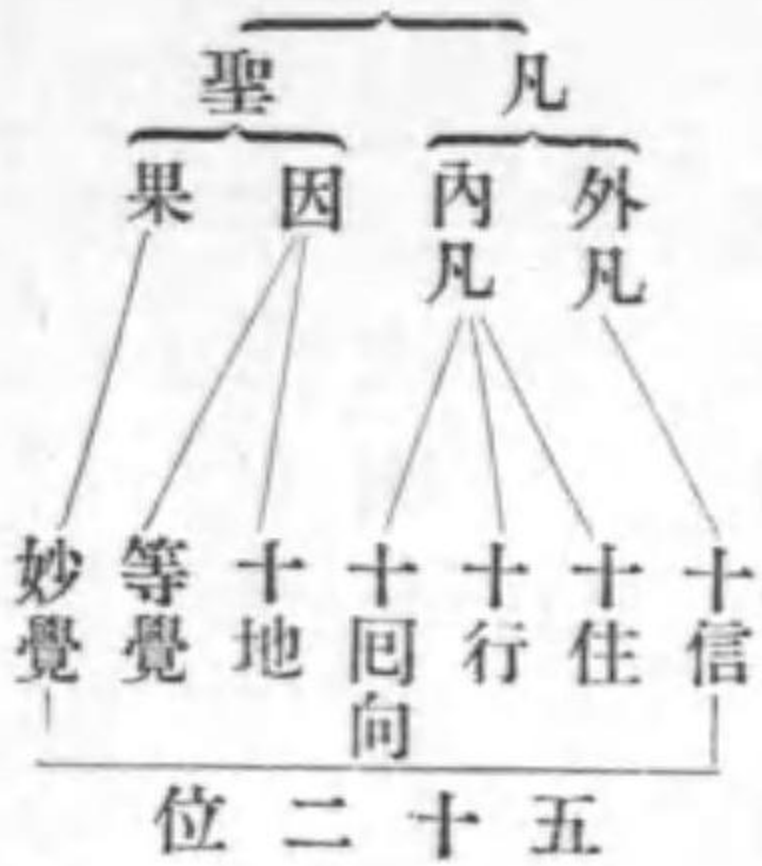
【句解】 諸大乘經等は別教は華嚴般若等の諸大乘經中に說かれてあるものであるが、別にこれが別教の法門なりといふことは經中に斷つてないから、かういふものが別教の行位である。其の範疇を示したのである。○歷劫修行が別教の一の目印である。因行を積み上げて佛果を得やうとする別教、又煩惱を斷じて後に涅槃を得やうとする別教が、無量の徳を積み無數の煩惱を斷ずる爲には無限の時間を要すべきである。これによつて歷劫修行は別教の特徴である。○互不相攝は第二の特徴である。一位々々が各別であるのは前に言ふ如く自力勤修の跡としては

止むを得ぬことである。○華嚴等。華嚴經十住品以下に明す。惣じて四十一位。○爲賢爲聖。賢は凡夫位聖は聖者位のこと。賢は學んで後知るが賢であるから煩惱にまみれて居る凡夫は修行して後に眞如を見るから賢の字で顯し。聖は生れながら能く知るが聖であるから、無明を斷じて眞如を見付けた者は本有の佛性を開覺しいは生れながらの佛と知つたのであるから聖といふ。○瓔珞等は本業瓔珞經上に出づ。○金光明等は合部金光明經三七。○勝天王等は勝天王般若經一八。○涅槃等は同經十一に出づ。五行とは聖行(初地以前の自行)梵行(初地已前の化他行)天行(初地以上の自行)病行(初地以上同惡化他行)嬰兒行(初地已上同善化他行)のこと。○如是諸經等の下は諸經の行位不同なる所以を叙ぶ。隨機利益は不同の所以を擧げたもの、根機まち／＼であるから多を喜ぶものも少を好むものもあれば、それに應じて行位に多少増減を說かれたのである。

然位次周足莫過瓔珞經故今依彼略明菩薩歷位斷證之相。以五十二位束爲七科。謂信住行向地等妙。又合七爲二。初凡二聖。就凡又二。信爲外。凡住行向爲內。凡亦名爲賢。約聖亦二十地等覺爲因。妙覺爲果。大分如此。自下細釋。

【文科】 以下は二別依璣瑠經「明行位」の一段。

【句解】 然位次等は先づ諸乘大經中別して璣瑠經に明す行位は五十二位で周足する故、それ



によつて別教の斷惑證理の様子を叙べると斷るのである。○以五十二等は五十二位を七科に分けて大綱を示すのである。○内凡外凡は十信位は未斷惑の位なれば外凡となし初住に見惑を斷する故内凡とす。初地には一品の無明を斷じて一分の眞如を見る故これ以上を聖といふ。内凡を賢といふは前に叙ぶる如し。但し十信は未斷惑ゆへ暫く賢の字を與へず、併し十信までも賢とする時もあり一概すべからず。

十信位

初言十信者一信二念三精進四惠五定六不退七廻向八護法九戒十願。此十位伏三界見思煩惱故名伏忍位。外與藏教七賢位通教乾惠性地齊。

【文科】 先づ初に十信位を列す。

【句解】 十信は十位の通名。信は教法を聞いて信順すること、行者が煩惱心の本性は眞如心であるから煩惱を退治せば成佛を得る、といふ別教の教を始めて聞いて信順し、佛道修行の

五忍

志を立つる所に名附けた位である。○信は初めて信心を生ずること。○念は一度信じたことを憶念して忘れぬこと。○精進は信じた通りに佛性開覺の道にまっしぐらに進むこと。○慧は分別で。意志の精進を有意義にするは、理知の分別を以て邪道へ墮ちぬやうにする慧である。○定は理知の慧ばかりに偏すると散漫になつて一向實行が俱はぬ。そこで妄念を止めて心を佛性開覺の道に專注するが定である。○不退は前の定で妄念を息めて眞理を見る智慧がいよ／＼明になつたからいかなる障礙にも打ち勝ちてその定慧を修するが不退心。○回向は以上修行によつて得たものを私すれば直ちに魔道に墮して了ふ故それを私せず佛地に回向するをいふ。○護法は教法そのものをどこまでも保持して失はない用心をするが護法心。○戒は心を引締め戒めて油斷せぬこと。○願は一切衆生と共に佛道を成せんとの念願をすること。○伏忍位は伏忍は仁王經に明す五忍の隨一。忍は認可許定で判斷する義、智慧のこと。五忍は菩薩の智慧のこと。これを五十二位に配當すると伏忍(十信)信忍(十住)柔順忍(十行十回向)生忍(十地等覺)寂滅忍(妙覺)となる。よつて今十信の菩薩位を伏忍位と名く。煩惱を伏したから伏忍といふ。伏は抑制すること、まだ斷せぬをいふ。因に仁王經の上では十信より十回向までを伏忍とし初二三地を信忍、四五六地を順忍、七八九地を無生忍とし十地以上を寂滅忍とす。○外凡とは伏惑位をいふ。藏通二教では見思二惑を伏した位は内凡であるが、別教は眞如中道を談ずる故に無明

を伏するを内凡とするから見思を伏する十信を外凡とする。

次明^ニ十住者^ヲ一發心住^ニ初果通教八人見地齊二治地^ニ三修界思盡三修行^ニ四生貴

五具足方便^ニ六正心^ニ七不退^ニ已上六住斷三界思盡八童真^ニ九法王

子^ニ十灌頂^ニ界外塵沙前二不知名目亦名習種性^ト用從假入空觀^ト見真

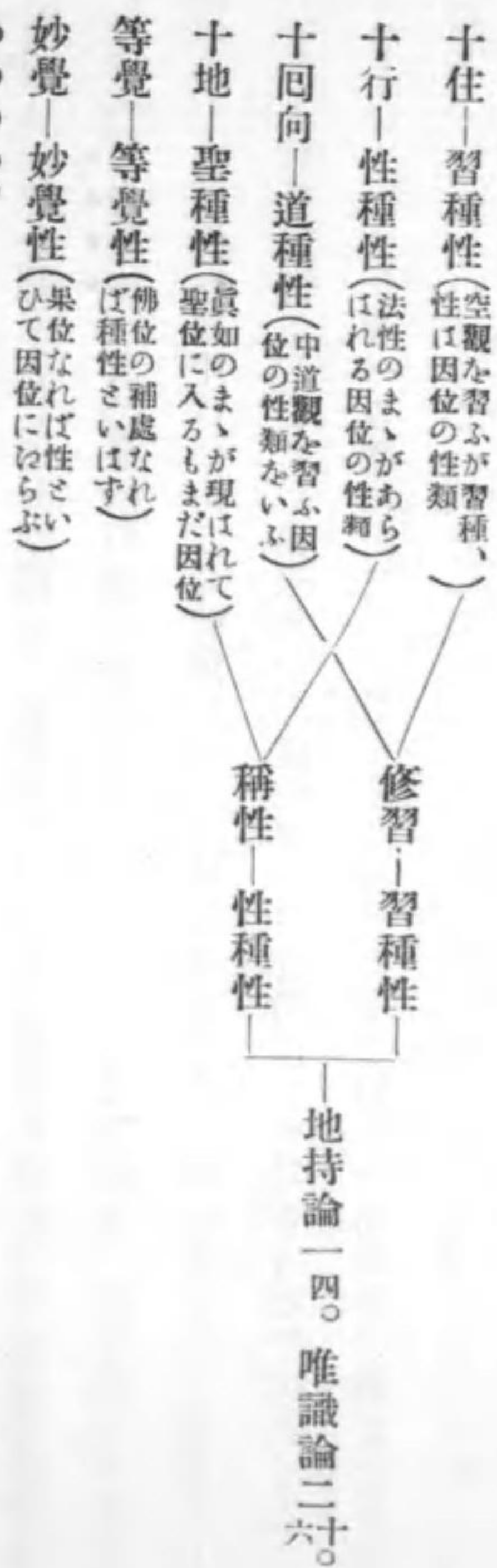
諦理^ト開惠眼^ト成一切智^ト行三百由旬^ト

【文科】十住位を列す。

【句解】十住の住は心が理にすはり落付くをいふ。此位では見思二惑を斷じて空理に心を据えるゆへ住といふ。○發心住はこゝで見惑を斷じて空理に安住し始めて眞無漏智を發したから次にはなんでも眞如の中道を見付けねばならぬと腰を立て直す位ゆへ發心住といふ。○治地は空理に住する無漏智でもつて從來色眼鏡で見て居つた一切の法門に對する偏見を對治し、新しく一切法門を見出す位ゆへ治地といふ。○修行は前の新しい見解でもつて出直して行を勵む位○生貴は高貴の家に生れるの意。即ち煩惱を斷じ三界生死の家を出づる佛家に生れたといふ新しい自信をもつた位。○具足方便は佛家に生れたといふ法喜はやゝもする空理に沈ましめるものである。よつてこゝでは更に六度等無量の善根を修し調へる位なれば具足方便といふ。

善根は空觀の方便である。○正心は。空觀は方便の助を得て空に偏せず中正を得るから空觀こゝに成就して正しい空惠が生ずる位なれば正心といふ。○不退は空觀成就して三界の思惑まで盡く斷せらるゝから、もはや三界へ退轉せぬゆへ不退といふ。○位不退は凡夫に退墮せぬこと。行不退念不退と合せて三不退といふ。○童真是童子の如き無邪氣なことをいふ。こゝでは見思の二惑を離れ了つて無邪氣な心で修行するゆへ童真といふ。○法王子は法王の相續者のこと。空觀いよく熟して完成に近いから法王の位を紹ぐべき資格が出来たから法王子といふ。○灌頂は王位を紹ぐと。即ち空觀全く成就し空理の法水を頭に灌いで佛位に登る位ゆへ灌頂といふ。○界内塵沙。大體塵沙の惑は理知の缺けた無知のことである。即ち萬法差別に關する知識が乏しい。例へば甲はいかなる性癖のある人物であるかその癖はどこから源因して出来たものであるかを洞察することが出来ない。従つてその性癖はいかなる方法で匡正することが出来るかといふことを考へる聰明がない。是が塵沙惑である。即ち一切衆生の病とそれを治する薬に關する無知をいふ。これはその数が多いから塵の如く沙の如く無数であるといふので塵沙といふたもの。されば直接三界流轉の原因とはならぬ。よつて自利を主とする聲聞緣覺は自分の無知を斷する要はない。併し衆生化益を本とする菩薩は無知では出来ないので感といはるゝ。よつて塵沙を化道障の惑といひ又不染汚無知とも名けて居る。これを界内に對する無知

と界外に對する無知とを分けて界内塵沙・界外塵沙とに區別する。○前二不知等は藏通二教では塵沙といふ名すらも知らぬといふこと。○亦名習種性。瓔珞經に六種性を明しこれを五十二位に配してある。即ち如左。



○從假入空觀は假は差別法が實に有りとと思ふこと。それをすて、空理に證入するが空觀である。

- 十信 — 伏見思
- 十住 — 正修空觀 (兼假中) — 見眞諦理 — 慧眼 — 一切智 — 斷見思
- 十行 — 正修假觀 (兼中) — 見俗諦理 — 法眼 — 道種智 — 伏塵沙
- 十回向 — 正習中觀 — 伏無明
- 十地 — 證中道 — 見中道理 — 佛眼 — 一切種智 — 斷無明

かく漸次に三觀を修し三諦の理を見て三眼を開き三智を得て次第に三惑を伏斷するのが別教斷證の次第である。○一切智は空理を知る智恵をいふ。一切法を觀じて皆空なりとする故に一切智といふ。道種智は法の上の差別相(情見の差別に非ず)を見る智恵のこと。道は一切諸佛の道法で種は衆生の一切善根の種なり。即ち無量の道法の藥を以て衆生の病を治して本有の善根を生せしむことを洞觀する智恵といふことで道種智といふ。一切種智は中道眞如を見る智恵で一切法空の當體に差別相(種)に達するといふことで、一切種智といふ。○前の圖にある十住には正しく空觀を修するが、それに假中二觀を兼ねるといふのは、空觀といつても前の藏通二教ではそれが唯一の觀法であるが、別教ではさうではなく、中觀を修する爲のいはゞ足場に過ぎぬから、空觀を修する間にも常に眞如中道の理想を心あてにすることは寸時も忘れぬ。又それ故に空を修する間に空に著してはならぬといふ用意も自らするわけであるから、空觀を修する傍に兼ては假中の二觀を修するのである。亦十行の位に至ればもはや空理を見たから空觀の足場は無用となるからそれを用ゐないで、第二の足場たる假觀を修するに全力を注ぐ。而し前と同じ道理でその假觀は中道を見る爲のものであるから中道は寤寐にも忘れぬ故に中觀を兼ねるのである。十回向位まで登るといよく中道觀にとりかゝつたのであるから、空假の二觀は差措いて用ゐぬ。併し容易に中道に達し得られない。漸く中道觀が成就して永く理想とした眞如

の月を見ることの出来るのは初地の位である。かく空假二觀を方便として中道觀に至るのを次第三觀といつて別教の觀じぶりである。圓教では三觀がすべて眞實であるから、たとへ實際には空假中の次第を逐ふて觀じても(別教と同じく)その空を觀する時は空だけに全力を注ぐのであつて別に其の外に中道も假觀をも豫想しない。なせなれば空を觀することがすぐ眞如中道を觀することであつて、その外に眞如中道はあり得ないからである。これを不次第の三觀といふこれによつて別圓二教の觀法の模様を相違を知るべきである。

次明^{ニハ}十行^ヲ者^{ニハ}一歡喜^{ニハ}二饒益^{ニハ}三無違逆^{ニハ}四無屈撓^{ニハ}五無癡亂^{ニハ}六善現^{ニハ}七無著^{ニハ}八難得^{ニハ}九善法^{ニハ}十眞實^{ニハ}亦云^{ニハ}性種性^{ニハ}用從空^{ニハ}入假觀^{ニハ}見俗諦^{ニハ}開法眼^{ニハ}成道種智^{ニハ}

【文科】 三に十行位を列す。

【句解】 十行は假觀を修し化他の行を修する位。行は進趣の義で一處に止まらずに前へ進んで行くことで、前の十住は空理に安住してデット、据りこんで生死の繫縛から脱れたから、十行では歩み出しはたらいで以て涅槃空を執する心を解放するのである。○歡喜は涅槃の空理に達したことを喜ぶこと。内に充實した時には外へ現はれず居らぬ。法喜はその表現である。こ

れが活動の源泉であり第一歩である。○饒益は一切衆生に己が法喜を願ち與へて化益をなすこと。○無違逆は一切衆生に逆らはず隨類應同すること。眞の教化はこの用意を缺いては行はれぬ。○無屈撓は教化の志を曲げぬこと。隨類應同すればとて衆生の情を迎へるのではない、情見を打破して究竟涅槃に導くといふ確固不拔の志がなくてはならぬ。それを無屈撓行といふ。○無癡亂はいかに無屈撓といへばとて對機見すの狂暴の亂に陥らぬ用意が肝要である。○善現は化他を全ふせんとする者はわが身に福德善根の相を現はさねばならぬ。善現は善を以て外に現はれること。○無著は心に少しの執著をもたず、常に光風晴月のやうな心であるをいふ。愛憎好惡の心を持って居ては教化の任は果されぬ。○難得は自ら心に得難い徳を持つことがやがて化他の行となる。○善法は自ら作した善が一切衆生の軌範(法)となること。そこに自ら一切衆生が善を作すやうになる。それが眞の化他行である。○眞實は中道のこと。假觀か明になつて涅槃の空に著せぬやうになり、ものゝ相をハッキリ見ることが出来る。併しその相は空理の鏡に浮き出されたものであるから、不知不識に非有非空即ち中道が知らるゝやうになるから眞實行といふ。

次明^{ニハ}十廻向^ヲ者^{ニハ}一救護衆生^{ニハ}離衆生相^{ニハ}二不壞^{ニハ}三等^{ニハ}一切諸佛^{ニハ}四至^{ニハ}一切處^{ニハ}五無盡功德藏^{ニハ}六入^{ニハ}一切平等善根^{ニハ}七等隨順^{ニハ}一

切衆生八眞如相九無縛無著解脫十入法界無量習伏無明亦名道種性行四百由旬居方便有餘土凡上三十位爲三賢亦名內凡從八住至此爲行不退位

【支科】 四に十回向位を列す。

【句解】 十回向は中道觀を修する位。回向は廻轉趣向にて、前の十行出假に於いて明になつた事を回轉して中道の理に趣向し（事を回して理に向ふとは、差別の事相に執著せず、その上に眞如を見付けて行くこと）又因行を回して果徳に向ひ（化他の行因によつて佛果菩提を得た）又己が功徳を衆生に廻施することを回向といふ。この三は要するに別のことではない。即ち衆生に廻施するのは一切衆生と共に菩提の果を得んとする果へ向ふのであり、それがやがて差別の事相たる因果自他を回して眞如の一理に向ふのであるから、十回向位は直ちに中道眞如の理に心向け、すべての上に中道を見開かんとする位である。○救護衆生離衆生相は衆生を救護するのは衆生相を見てその迷を惑むからである。而も眞に衆生を惑む者は衆生に同じて衆生の迷を自己の迷と觀する者でなくてはならぬ。即ち救護者と被救護者とが一つになり別に被救護者を見ないのが、眞の救護者である。それを離衆生相といふ。○不壞は迷悟因果の差別の事相を壞らすそのまゝの上に、而も迷悟因果を空じた一如の理を達觀するを不壞といふ。○等一切諸佛とは、諸佛と等しからんと念すること。それは心が中道の正念に住することによつて得らるゝ。○至一切處とは十方法界の佛土に至りて一切佛を供養せんこと

發願すること。○無盡功徳藏は眞如。眞如は一切處の佛を供養する自行の徳を生じ、又一切衆生に眞如の功徳を廻施しても尙盡きない化他の徳をも生ずる。今は自行化他を行すること。○入一切平等善根。善惡の二つの上に眞如の一理を同じやうに見開くのが一切平等善根である。然れば平等善根は眞如の理に契ふことで、さういふ善根に入り込んでそれを行するやうになるがこの位である。○等隨順一切衆生。一切衆生の善惡の別を見ずすべてが一佛の子である一眞如の隨縁であると知られたならば、惡人を棄てず善人に誂はず同じやうな心を以て接して行ける。それを等隨順といふ。○眞如相は善惡も有無もすべて眞如の相であると差別の事相の上に眞如の一理を觀するをいふ。○無縛無著解脫は諸法の差別相を緣じて而もそれに囚れずに自由な態度で行けるのが解脫である。かゝる態度は差別相の上に平等眞如を見るから生ずる。○入法界無量は眞如の一理を觀することによつて、そこに法界の無量相を觀て而もその眞相に悟入するから入法界無量といふ。○習中觀の習は修習で未だその法性に稱ふことの出來ぬを顯す語。○四百由旬は化城の三百由旬と寶所の五百由旬の中間にあることを顯して四百由旬といふ。化城は空涅槃であり寶所は中道涅槃であるから、十回向位は其中間に在るから四百に配す。○方便有餘土は四土の隨一。天台は界内外の土に四土を開く。即ち如左。

方便有餘土―見思の惑を斷じ未だ無明の惑のある者の住處。
實報無障礙土―無明の惑を斷じて一分中道を見た者の居處。

常寂光土―無明を斷盡した者の住處。これは別の土があるではない理土なり。

方便有餘土の方便は中道の眞實を知らざる者の住處なることを示す。有餘は無明の惑がまだ残つて居る者の住處なることを顯す。中道の眞實を見た因に報みて現れた淨土といふことで實報無障礙土といふ。無障礙は物質的にも精神的にも障礙のない勝れた果報なることをいふ。常寂光土は眞如の理の表現の土である。常は常住法身の徳を、寂は寂靜解脱の徳を、光は智惠即般若の徳を現はす語で、三徳に充ちた實在の世界をいふ。○行不退位は三不退位の隨一。行は化他行をいふ衆生化益の行のやめられないやうになつた位をいふ。塵沙の惑が斷せられて衆生の藥病が明になれば自ら化導を倦うく思ふことがなくなる。

十地位
次明十地位者一歡喜從此用中道觀破二分無明顯一此是見道位又無功用位百界作佛八相成道利益衆生行五百由旬初入實報無障礙土初入寶所二離垢地三發光地四燄惠地五難勝地六現前地七遠行地八不動地九善惠地十法雲地已上九地位地各斷一品

無明一證一分中道

【文科】五に十地位を列す。

【句解】十地はいよ／＼中道を見付けて佛地に入つた位。地に能生と負載の二義あり。即ち大地が草木等を生ずる如くこの位に入るものは能くもろ／＼の佛智を生ずるから地といひ、又大地が何物でも載せるが如くこの位の菩薩は無縁の大悲心を以て一切衆生を荷負して出離せしむるから地といふ。○歡喜は法悅のこと。十信位以來求めて來た中道を始めて見付け出して法悅湧くが如きものがある故に歡喜といふ。○見道位は中道を見る位。○無功用位は自力の功夫をせず自然と修行の出來る位の意。十回向までは中道を見付けぬ故に自力の功夫を凝して中道を目懸けて修行をするから有功用位であるが、初地以上は中道を體驗し自己のものとなつたから、中道眞如の用が顯れ、その力によつて修行が出來、別に自力の功夫の要がないやうになるゆへ無功用位といふ。○百界作佛。十方世界へ佛として生れ以て衆生濟度をする事。○八相成道は應身佛のこと釋迦佛の如し。○離垢地。百界作佛して衆生に應同して衆生身となつても、少しも衆生惑業の垢に染まらず泥中の蓮花の如くなるを離垢といふ。○發光地は衆生界中にあつて智徳の光明を放ちて迷界を照す燈明となる。○燄惠地は中道の智惠がいよ／＼明になるをいふ。○難勝地は斷じ難き無明の惑を斷ずるから難勝といふ。○現前地は無明の惑障を斷ず

るに従つて眞如法性の徳が現前する位。○遠行地は惑障漸く除くる故に自由にどこまでいもか
けめぐることが出来る。○不動地は空有の二邊に墮することなく常に心が不動なるをいふ。○
善思地は中道無生の善恵を念々に観するをいふ。○法雲地は妙法の雲で覆はれて見聞覺知する
ものすべて眞如妙法ならざるものなきをいふ。

要斷一品入等覺位亦名金剛心亦名一生補處亦名有上士

【文科】 六に等覺位を明す。

【句解】 等覺は覺即佛に等しき位にてたゞ一品の無明が残るそれを斷じて成佛するなり。○
金剛心は觀智が堅固にして且つ鋭いこと譬へば金剛の如くにて壊れないから金剛心と名く。○
一生補處は尙ほ一品の無明が残つて居るから一生を経て後妙覺の場處を補ふ位ゆへ一生補處と
いふ。○有上士は上に妙覺があるから有上士ともいふ。

要破一品無明入妙覺位坐蓮華藏世界七寶菩提樹下大寶
華王座現圓滿報身爲鈍根菩薩衆轉無量四諦法輪卽此佛
也。

【文科】 七に妙覺位を明す。

妙覺

等覺

異說料簡

【句解】 妙覺は佛果位をいふ。○蓮華藏世界は實報土のことで、華嚴經の盧舍那佛所居の淨
土の名である。蓮華によつて包まれた世界の蓮華の蓮片のある大蓮華の上に坐を占めたまふことは梵網經に説
まふ臺座をいふ。盧舍那佛は千葉の蓮片のある大蓮華の上に坐を占めたまふことは梵網經に説
いてある。華嚴經の下三頁に述ぶるが如し。今それによつて大蓮華の臺座を大寶華王座といふ。
○圓滿報身の圓滿は智斷二徳の圓滿成就するをいふ。報身は常の如し。○鈍根菩薩は圓教に望
めていふから鈍根といふ。

有經論說七地已前名有功用道八地已上名無功用道妙覺
位但破一品無明者總是約教道說有處說初地斷見從二地
至六地斷思與羅漢齊者此乃借別教位名通教位耳有云
三賢十聖住果報唯佛一人居淨土此借別教名明圓教位也
如此流類甚衆須細知當教斷證之位至何位斷何惑證何理
往判諸教諸位無不通達

【文科】 以上に瓔珞經に依り別教の行位の分齊を明したつたから。今は因に諸經論に出て居る行位の中紛はしいものを舉
げて會通する一段である。

【句解】有經論とは華嚴經・仁王經・解深密經並に瑜伽論・唯識論等の所説を指す。○七地已前等は八地以上を無功用道とする説。前に列した瓔珞經では初地以上が無功用道とするに異なる。依てこの相異を會するのである。有功用無功用は前の如し。○妙覺位但破一品無明は「集註」には妙覺位だけに一品無明を斷するのみで初地以來無明を斷せぬといふやうに解したから、さういふ説が一向見當らぬといつて居るが。これは恐らく、妙覺位但破云々であるのは等覺位に望めていふとで初地に望めたのではない。さすれば等覺位を略して第十地からすぐ妙覺位になる故にたゞ一品無明を破す云々といふたものであらう。等覺を略するは華嚴經等諸經論にあるとで前の八地無功用説と一連になる。○是約教道説は相異を會通する釋である。教道とは對機に應同して説かれた佛の言教をいふ。方便の教は對機に隨つて説かるゝ故に一様にはならぬ。尤もすべての言教はやはり教道といはるゝが天台はそれに權實の別を立てゝ權方便の教を約説教道といひ、(これに對して佛の内證のまゝを説くを約説證道といふ)眞實教即ち法華に明す圓教を約行教道と呼んである。(親り眞如法性を證するは約行證道也)眞實教は佛自内證のありの儘を説かれたものだから同じ圓教の説に矛盾があつてはならぬ。併し權教は對機に従つて説かれたから同じ別教の中にも多少の矛盾撞著があるわけである。別教は約説教道の權教であるから、斷道の上に矛盾があるのは止むを得ぬといふのが今の會釋の意である。例せば無明の斷道でも圓教で

は初住より四十二品の無明を斷すると説いてある。それがありのまゝの説法である。然るに別教は十二品の無明を斷し若しくは十一品(等覺を略す)の無明を斷じて佛になると説いてある。されば十一品といふも十二品といふもいづれにしてもまだ三十餘品の無明の餘殘があるから實際は佛になれぬ位を成佛位と説かれたのは調機誘引の方便である。この意趣が知られたならば經の上の相異が會通せらるゝ。○有處説は「止觀」六之一に擧ぐる説である。これは初地に見惑を斷じて二地乃至六地に思惑を斷じて羅漢と齊しといふ説である。初地二地の名は別教であるから解し難いが、實は通教の位地を言つたものである。然れば忽ちに通釋が出来通教の位地參照。○有云は仁王經教化品の偈に出づ。三賢は住行向の三十位十聖は十地のこと。果報は果報土の略で實報土のこと。別教の意にていへば初地から漸く實報土に住するに、今初住から實報土に住するといふは云何といふが不審の點なり。これは三賢十聖といふ名は別教であるが實は圓教のことをいふたものである。なせなれば圓教では初住位に無明を斷するから實報土に生ずるといふのである。○唯佛一人居淨土とは妙覺位の佛のみが常寂光の淨土に居るといふ意。○如此流類等。以下は總括して諸經論の異説を會通する方途を叙ぶ。即ち以上擧げたやうな異説は甚だ多いが若し別教の斷證の網格を詳しく會得したならば、たとへ名と實とが混雜して居る諸教の諸位であらうともこれを判斷して領解の出來ぬことはない。

略明別教竟

【文科】別教の所明を總結する辭。

(四) 圓教

次明圓教者

【文科】以下圓教を明す大科如左



圓は不偏の義

【句解】圓教の圓は不偏の義でかたよらぬこと。すべての人の情見に倚るものは偏である。われ／＼は有といへば空に反對した有より考へることが出来ぬ。反對に空といへば有にあらざる偏空より考へることが出来ぬ。然らばその偏見を破せんとして非有非空といへばそれを一つの概念化して考へて了ふ。真如も實相も人の情見の中へ入つて來ると「かくあるべきもの」の概

佛の認識の可能

念になつて了ひ、非真如非實相の無明に對立した相對的な存在となる。一度人の情見の手を觸るゝ時絶對界の何物も相對化されずに居らぬ。かくてわれ／＼はかゝる情見を打破した處に眞如が見披かれ、煩惱の覆を除いた處に佛となれると、實在を超越的に考へる。併しその超越的な眞如や佛もやはり現實と對立した相對的な存在であつて、われ／＼の眞如や佛であつて決して眞如の眞如・佛の佛ではない。別教の所説が眞如を超越的實在とし、中道を空假に對立したものとし、煩惱を斷じて後佛と成るとするのは、要するにすべてが人の情見の手の觸れたものであつて、もの、そのものではない。別教が偏權の教といはれ隨機應同の説と貶しめらるゝは無理もない。然らば人の情見によらないもの、そのものは永久にわれ／＼の認識することを許さなれないものであつて、われ／＼は相對有限の世界に止まるべきであらうか。曰く然り人の情見を絶滅しない限りはもの、そのものは永劫に認識の外のものである。若しもの、そのものが頑石の如き原理であつたならば、われらは到底出離の機なき衆生である。それに反してもの、そのものがそれ自らの意思をもつ能動的な原理であるならば、衆生の出離の要道はそこに開かれる。即ち人の情見を絶滅してたゞもの、そのもの、の世界に没入し、それ自らの意思をもつて意識し、それ自らの力をもつてはたらく時にそこに人の情見の手の觸れざる眞如の眞如・佛の佛が明かに認識され絶對無限の風光に親り接することが出来る。法華經に佛の自内證の世界は唯佛與佛乃能

窮盡といふのはこれをいふのである。げに佛を見るものは佛だけである。佛以外の何物も窺知することを許されぬ。歷劫修行の後に得らるべき果頭の佛は佛を見ざるものが思想せる佛に外ならないから眞實の佛ではない。(但し眞實の佛にあらざる佛を經に説けるは人の根強い情見を打破して自力無功を悟らしめんが爲の方便であつて、その權教を信する人々は權教によつて自力無功を悟る所に眞の佛道が開顯される)。眞實の佛は人の情見の夢が破れて人の上に佛知見が全領せられ、何等これが佛であるこれが眞如であると思惟することを待たずに、佛知見が開かれる。佛知見を開くものも佛であり、開かるものも佛知見である。そこには能所主客はあり觀る知見と觀らるゝ眞理とは對立して居るが、それは人が未だ曾て經驗し得ざりし妙不可思議の對立の世界であつて、その能所の理智がそのまゝ、渾一圓融の絶對の世界である。この佛の知見によつて佛を見る世界こそ釋尊が成道一念に經驗せられた實在の世界であり、それを開顯したが法華經の妙法である。而して妙法は即ち圓教である。圓は人の情見に倚る偏を離れた不偏を意味するのである。天台は四教義一經に圓以三不偏爲義此教明三不思議二諦中道事理具足不別といつて居る。不思議は圓教の目印である。人の思慮言説を絶してたゞもの、そのもの、みが存在を許さるゝから不思議である。そこに山あり河あり樓臺ありで、空有の二諦と中道の第一義諦とが共にこの不思議の山河の色を顯すものであり、その山河の事象がそのまゝもの、そのもの、

理である、事理具足して渾一圓融である。この釋語短くして意長し、よく圓教の綱領を盡すものである。

(1) 圓教の名義

圓名圓妙圓滿圓足圓頓故名圓教也所謂圓伏圓信圓斷圓行圓位圓自在莊嚴圓建立衆生。

【文科】圓教の名義を釋す。

【句解】圓名圓妙等は圓の字の意を妙満足頓の四義によつて示す。○圓妙は不可思議にて人の情見の及ばないことを顯す。○圓滿はかけめのないことで、その中には十法界の事理の總てのものを攝め盡して少しも缺けのないことをいふ。それを顯すのが事理三千の標語である。○圓足は充實し具足することで、法界のいづれをとつても一切の徳は具へて居り充實して居る。一色一香無非中道といひ又それを凡夫の心に就いて一念に三千を具するものが充實を顯す語である。○圓頓は頓速はやいことで、漸を逐ひ時を経て積み上げ造りあげたものではなく、先天的の實在であるからそれを體驗するのは一念の頓速に成就することを教へるから圓といふ。以上不可思議な實在そのもので(妙)あるから、相待差別の事象を一の缺けもなく備へ

て居る(滿)さればといつて廣く擴げられた淺薄なものではなく、一々が充足した生命そのものであり、いづれの一を取つても全法界のすべてを盡して居る(足)。それ故に一念の頓速にそのすべてを證り盡すことが出来る(頓)。よつて圓教と名くる。○所謂圓伏等は圓教の體を出す。○圓伏はあらゆる煩惱を伏することを明すが圓教である。○圓信は法の實相があるがまゝに信するが圓教の信である。○圓行は如來行で、圓教では自力策勵のはたらきは行ではなく法そのものゝはたらきを行といふから、一行には一切行の徳を攝めた力の充實した行である。○圓位圓教の菩薩の位次は法そのものゝはたらく足跡であるから一位に一切位の徳を攝める。○圓自在莊嚴は佛の自行の徳のこと。圓教の佛を莊嚴する福德と智慧とはこしらえたものでなく法そのまゝの光であるから、莊嚴せねばならぬといふ力味心を離れて、任運自在に莊嚴されたものゆへ自在莊嚴といふ。○圓建立衆生は佛の化他の徳のこと。圓教の佛は一切衆生を悉くもり立て、佛にする。なせなれば一切衆生は本來佛であるから。その本來の面目があるがまゝに自覺させることが化他である。それ故に開提も尙ほ成佛を得る。

(2) 圓教の行位

諸大乘經論說佛境界不共二乘位次總屬此教也法華中開

示悟入四字對圓教住行向地此四十位華嚴云初發心時便成正覺所有惠身不由他悟清淨妙法身湛然應一切此明圓四十二位維摩經云薔薇林中不嗅餘香入此室者唯聞諸佛功德之香又云入不二法門般若明最上乘涅槃明一心五行又經云有人入大海浴已用一切諸河之水又娑伽羅龍樹車軸雨唯大海能受餘地不堪又檣萬種香爲丸若燒一塵具足衆氣如是等類竝屬圓教

【文科】圓教の行位を明す中三段に分る、中、今は初に總じて諸經に散説する位次を列舉する一段。

【句解】說佛境界。佛自内證の心地(境界)をありのまゝに説いたものが圓教である。○不共三乘は別教に簡んでいふ。別圓二教は共に菩薩を所被の機とする中、別教は不共二乗であるが圓教はその別教の菩薩も未だ聞き得ざる妙法であるから不共三乗といふ。よつて圓教の對機を佛乘といふ。その佛乘の位地が圓教の行位である。○法華等は方便品の開示悟入佛知見の文をいふ。この文を天台釋するに四釋ありて約四位・約四智・約四門・約三觀である。(文句十一)可披見)その中の約四位釋に従へば開示悟入の四字が十住十行十廻向十地の四十位の菩薩が佛知

見をささる順序を顯したものと釋する。今それによつていふ。勿論經文に顯はに言ふてあるのではない。その開示悟入と一口にいつてある處に一位に一切位を攝めることを顯すのである。それで圓教の位地を明す文となる。○華嚴等は舊華嚴八三の文である。この文は次下の本文に擧げて解してあるからその下に至つて叙べん。この文の初發心時とは初住の菩薩が始めて中道を見付けたことをいひ初住位を明す文であり別に其他の位次を明してない。然るに此明圓四十二位といふは云何といふに、この初住位の一位に四十二位の徳をすべて攝めて居る。そのことは便成正覺の言にも顯はれ佛果位の正覺の徳が初發心の初住位に具はると説いてあるから、この文が圓教の四十二位を明したものと云ふのである。○維摩經等は觀衆生品に出づる文。薺荷は黄花と譯しよい香のする花、その花園の中では餘香を嗅ぎたくとも嗅げぬ。なせなれば如何なる香も薺荷の香に同化せられてよい香となつて了ふからである。その如くに此室（維摩居士の室をいふ）に入る者は、聲聞も緣覺もすべて佛の香に化せられて了ふとなり。言ふ意は大乗圓教の法中に證入する者は頓に佛徳を具へるといふのである。故に今この文を以て初住位の者が一切位を攝することを明すものとしてこゝに引用したのである。入此室は華嚴の初發心と同義である。○又云等。維摩經入不二門品の文。不二法門は法そのまゝの佛境界をいふ。不二は相對の二にあらざる絶對をいふ、法門は法即ち門で門は何者の通入をも拒まぬから法のことを門

欠

欠

三法無差別

豊儉なり、降雨種々として添えず盡きず、蓋し是れ色法にして尙能く此の如し況んや心神の靈妙寧んぞ一切法を具せざらんや」と。妙心は體に法界三千を具ふるもたゞこれ一念の妄心で何の奇もない、さはいへ縁至れば地獄身を現じて地獄苦に入り、又機熟すれば佛身を現じて佛土に住して、應用自在なること普門品に説ける觀音菩薩の如くである。而も行く處として自ら主ならざるはなく法界の衆生の迷夢を破らすには措かぬ。斯の如く入出自在應用無碍なることを如意珠の喩に依て顯したのである。○心佛及衆生是三無差別。此文は華嚴經夜摩天說偈品に出づる心如工畫師等の取意である。此文を釋するに華嚴家と天台家と同じからず、華嚴家の釋は『探玄記』六_{廿九}『清凉大疏鈔』十九上_{廿四}等に出づ。天台家の釋は今その大要を叙べん。心は妄心でたゞ狭く自己の一心をいひ、衆生は同じく迷妄なれども廣く十方を該ねていふ。それらの迷に對して佛は悟境をいふ。即ち三法は迷悟の因果及び自他を擧げたものである。これらの三法が各々妙法であるから一法の上に三千法界を攝め盡すを以て三法は無差別であるといふが華嚴經意である。先づ心法に就いてはいはい。前にいへる様に妄心は即ち妙心であつて法界を家とするからその當體が佛であり、又その同じ當處が十方衆生である。即ち心法は一切の衆生と十方諸佛とをその中に具へ藏めて、自由にそれらの迷悟を緣起變造して止まないものである。これと同じことが佛にもいはいはい。佛はその全體を十方衆生の上に投げ出して攝化無窮であると同時に

に、見る影もない妄心に悲智の全力を傾注して惜しみ給はぬのである。それがそのまま佛が衆生を自己として保ち亦同様に妄心を體内の迷妄として攝取されてあることで、佛が他の二法の爲の能具能造の法である。衆生法に就いても亦同じことが言はれる。即ち衆生はたゞ佛なしには有り得ないのである。衆生のある處常に佛を藏する。又衆生の迷の全體はたゞ一人の而も一念一心の中にそれ自らの棲家を見出して棲息する。それ故に一切人類(狹義の衆生)を知らんとしたならば必ずしも人類全體の討査研究を要としない。たゞ一人を仔細に徹底的に討査すればそこに一切人類を知ることが出来る。かく衆生法は又他の二法を所具所造として持つて居る。かくて三法は言の有する嚴密の意味に於いて無差別である。以上の解説によつて略ぼ三法の無差別を領解することは出来たが、此に不審なるは同じ迷妄法を廣狹自他の別はあるとはいへ何故に煩はしく二法としたか。これ華嚴家より難する所である。(華嚴家では心法は非迷非悟の眞如心にて能造の原理とし、佛と衆生は所造の事象なりとする)それは妄心がわれ／＼に妙法の世界を開いて來れる最も大切の扉であるから心法を別開したのである。それは唯心論の人々が言ふやうに心のみが不思議な世界を開展する原理といふ意味ではなく、われ／＼にとつては最も開き易い扉であるといふのである。佛界は亦扉である。しかしそれを開くにはわれらは餘りに底下の凡夫である。佛界は高過ぎる。それに反して衆生界は低くて手は届くが悲しい哉や、

餘りに廣漠にして捕捉し難い。されば衆生法の扉もわれらにとつては開くに困難である。かくてわれらが絶對 世界に遊ぶ爲には最も手近で最も狭いわれら自らのこの心こそはわれらに恵まれた絶對の扉である。華嚴經に三法を説きながらも而も先づ心法を殊更指示して心如工畫師と説かれたのもこの所以である。以上三法無差の文解し竟る。次にこの文をこゝへ用ゐたのは何の爲であるかといふにこれは前の妙心體具の句意を愈々明に助成せんが爲である。即ち自己の妄心はその儘是佛である、又その儘法界心であると顯さんが爲である。此の如く道の運きに在りてふ教法を聞いて誰れか自己の心をいつまでも虐げて顧みずに置けやう。何人もこの心を觀じてその妙法を實證せずには居られなくなつたのが、即ち隨喜品の行人である。○此心即空即假即中より三諦宛然までは心の當體が三諦三觀なることを明す。前來は心が法界三千を體具することを叙べて心の哲學的價值を説いたから、こゝでは心がすべての眞理の淵藪であり且つすべての智慧の策源であることを明して、心の宗教的價值を説くのである。三諦とは眞理をいひ三觀は智慧をいふ。理智は所觀の境(見らるゝもの)と能觀の智(見るもの)とで對立したもの、常識的には二つの別體を豫想するが、深く立ち入つて考へるならばそれは二の對立した別體をもつて居つては眞の認識が成立しない。卑近な譬喩を示さば光とそれを見る智慧とは別なものであるが、若し光が放たれなかつたならばわれ／＼は光の智慧を持ち得ない。光の智慧は光によりて成立つ

もので決して別なものではない。これはホ、ノ、譬喩に過ぎぬから勿論絶対認識の場合の全分を顯すものではないが、これに依て絶対認識の場合に於ける無對立の對立を窺知すべきである。眞理がもしそれ自らに認識作用を持つて居ないならば、到底眞理は認識の對象となり得ない。いはゞ有名無實なものとなつて了ふ。眞理がそれ自らに認識作用を持つて居ることによつてそれが體驗せらるるのである。體驗はわれらにとつて唯一の眞理を生む母胎である。これによることなしにわれらは絶対界に觸るゝことを許されぬ。而してこの體驗は眞理を見る智恵であるがその智恵は眞理の全體を領受して了つたものであるから同時に眞理そのものである。智恵の外に眞理を見ないのが絶対認識の體驗である。それはたゞ智恵ばかりで理はないといふ様な偏見でなくて、智恵といふやうな特別なものを考へずになゞ眞理ばかりになり切つたいはゞ絶対性永遠性そのものが眞實の智恵即ち體驗である。これを理智不二といふのである。——この體驗の境界を述べたものが圓教であるから、この理解に立たなければこの下の文意も解し難い。○此心即空即假即中とはこの理智不二の境を説いたものである。此心とは安心即妙心の心を指したので體驗の一念心である。即空は一切の情見を離れ相對的思念の跡を止めないことで何物の誘惑にも動せられず毅然として常に靜寂なる心地に名くる。即假は十界三千の差別の相を明に見ることで眞に迷に泣き悟を悦び機に臨み變に應ずる機動的な心をいふ。即中は中道眞如そのもの

を心の當體として見ることで、心の絶対性永遠性をいふ。即ちわれ／＼の心に不動性(空)と機動性(假)と絶対性(中)を一念同時に體驗することを此心即空假即中といつたのである。これを一心三觀といふ。別教が空假の方便によつて中道觀を得る次第の三觀なると簡別して知るべきである。この圓教の一心三觀は智恵であるが、その智恵そのまゝが眞理である。即ちこの心に不動性を見るときには眞理そのまゝの屬性たる不動性そのもの、體驗であるから、その不動の智はたゞ刹那的な且つ簡別的な不動を見るのではなくて、永遠的な且つ普汎的な不動性そのものを見ることであり、同時にその智がそのまゝ眞理そのものである。これは假觀中觀の智に於いても同じことであつて假中の二智が其のまゝ假諦中道諦の二理である。それを一心三諦といふ。然れば此心即空假即中の句は一心三觀をいふと同時に一心三諦を叙べたものである。即ち一心が智恵の全體であり眞理の全體であつて、此心を外にして理智はあり得ない。誠に不可思議の一心である。○常境無相常智無緣。常境は三諦の理・常智は三觀の智をいふ。共に一心を指すもので、一心が常境であり同時に常智である。常は常住で永遠絶待を顯す語。一心は三諦であるから十界三千の不可思議境である。そこには迷悟染淨のすべての相を具へて居り、而もそれは一念刹那も靜止することなしに變作動亂の波を續けて居る。併しそれは無始より以來永劫の末まで常住不斷に、絶対永遠の響を立てゝ流れて行く絶対永遠の大きな流である。そ

れ故に一心を常境といふ。無相は情見を以てこれは迷へるものこれは悟れるものと區別する相を絶したものであるといふこと。所謂絶對永遠の流なる常境は三千の相はあつても、それは永く情見を離れたもので、情見の所謂三千の相のないものであるといふのが常境無相である。常智無縁は亦同じやうに一心は三觀の智なるが故に常智といふ。この三觀は前に言つたやうに三諦それ自らのもつて居る智恵であるから、體驗によつて始めて動き出した智恵ではあるが、その體驗はその永遠の智恵を得るのであるから、それを常智といふ。無縁とは情見の所謂智恵はその智恵と別な所觀の境を縁じてそこに智恵を生ずるが、三觀の智はさういふ別體の境を縁する智恵ではないといふので常智無縁といふ。○無縁而縁無非三觀は。前には情見の所謂對立的境智ではないといつたから、こゝではその裏を翻して無對立の對立でありそれが眞實の境智であると示すのである。無縁といへばとて所觀の境なしに生ずる智恵ではない。常に眞理を所觀所縁として生ずる智恵で、どこまでも眞理を明に見それを仰いで行く敬虔な智恵である。それは空假中の三觀を不斷に觀じて止まないものである。一念も一刹那もその三觀の智恵なしにはあり得ない常智である。○無相而相等。無相といへばとて差別の色のない無相な世界といふのではない。却つて十界三千の無盡の差別の色に彩れる有相の世界である。その一々に三千の徳を收めて而もすべてが花紅柳緑の差別相を具現する。それが空假中の三諦の境であつて眞理

さながらの相である。宛然とは少しも手を加へずありのままなるをいふ。即ち三諦の眞理の鏡の明なる當處に三千の差別相が現するをいふ。○初心知此等は前來所隨喜の妙法を釋したつたから、今は能隨喜の相を示す。知此は前來明した妙法即ち安心なる教理を聞信すること。慶己は自己の絶待永遠性を自覺せる慶喜をいふ。慶他は自己の自覺はやがて十方衆生の代表者としての自覺であるから、十方衆生の絶待永遠性を我が慶喜とする。己を慶ぶが故にいよく自行の道に進むのである。慶他の故に化他の行を棄てることが出来ぬ。これ大乘菩薩の佛道上る第一歩である。知此は隨順妙法で隨の字の意を釋し、慶己慶他は喜の字を釋す。よつて故名隨喜と結んだのである。○内以三觀等は、隨喜品の菩薩の修行を明す。その修行に正助二行を擧ぐ。正行は一心三觀で助行は五悔である。○内以三觀觀三諦境は即ち一心三觀の觀法で、この觀心の方法は後に明す十乘觀法がそれである。内心を觀する行ゆへ内といひ、それに對して五悔はその内心の觀解を外から助成する行なれば助行といひ、又外といふ。蓋し圓教の修行はたゞ妙法のまゝを自己の内心に體驗するにあるから、最初から最後まで一心三觀の觀法を以てつき通すのである。唯その觀法を成就する爲に障礙となるものを除去する爲に五悔の助行を用うるのである。これ別教が次第を逐ふて三觀を修するのと大に趣を異にする。

言五悔者有二一理二事。理懺者若欲懺悔者端坐念實相衆

罪如霜露，惠日能消除。即此義也。言事懺者，晝夜六時三業清淨，對於尊像披陳過罪，無始已來至于今身，凡所造作殺父殺母殺阿羅漢破和合僧出佛身血邪淫偷盜妄語綺語兩舌惡口貪瞋癡等如是五逆十惡及餘一切隨意發露，更不覆藏，畢故不造新。若如是則外障漸除，內觀增明，如順流舟，更加榜棹，豈不速疾到於所止。修圓行者亦復如是，正觀圓理，事行相助，豈不速至妙覺彼岸。

【文科】以下別して五悔を明す。分科すること如し左



今はこの中正明三事理二懺二の一段也。

【句解】言五悔等は懺悔・勸請・隨喜・廻向・發願を五悔といふ。五行悉く悔といふはいづれも

滅罪懺悔の法であるからだ。勸請は心内に潜む無佛を望ましく念ずる罪を懺する法であり、隨喜は他人の修善を却つて心憎く思ふ罪を悔ゆるのであり、廻向は功德を私して三界を貪らんとする罪の懺悔であるし、發願は修行を怯退するの過を懺する法である。○言五悔者の下一懺悔の三字を加ふべし。○理懺は眞如實相の理を念ずる故に理懺といひ、事懺は通常の懺悔で罪を告白して懺悔すること。前に望めて事懺といふ。○若欲懺より能消除までは普賢觀經の文である。○端坐は威儀を整へること如法なるをいふ。○念實相は眞如實相を念ずること。われ／＼が罪惡に苦しむのは罪に客觀的實在性を認め罪を犯したといふ意識に脅迫せられることが多いのである。これは要するに實在を信する念が微弱であるから、罪の夢に脅される。よつて先づその罪には構はずに實相眞如の妙法を念ずる。若し妙法を念ずる心が明になつて見れば、罪惡は畢竟迷夢中の所作であつて、何等客觀的存在の意義があるものでなく、従つてそれ程に脅迫さるゝこともないことが明になつて罪から解放されるのである。罪惡を轉じてそこに實相眞如の實在を觀するのが根本的の懺悔法である。實相眞如を念ずる智慧を慧日といふ。この慧日の前には衆罪は霜露の如く消える。これを理懺といふ。これは一面一心三觀の内觀であるが、罪を對象として觀するから懺悔の中に構めるのである。○言事懺者等は事懺を明す。この下解し易し。十惡を擧ぐる中殺生を略して等す。隨意發露は意中にあるまゝをスツカリ告白すること

畢故不造新は罪を再びせざることを誓ふ也。○若如是則等以下は五悔が助行なる所以を釋す。外障は罪を抱へて秘して居ることは一心三觀の内心を觀することを妨礙するもの故に外障といふ。今は懺悔に就いていふも五悔すべて外障を除く法である。○順流舟は一心三觀の内觀に譬へ楞棹は懺悔等の助行を譬ふ。所止は目的の地にて涅槃のこと。○事行は内心の理觀に對して五悔を事行といふ。

莫見此說便謂漸行謂圓頓無如是行謬之甚矣何處天然彌勒自然釋迦若纔聞生死即涅槃煩惱即菩提即心是佛不動便到不加修習便成正覺者十方世界盡是淨土觸向對面無非覺者今雖然即佛此是理即亦是素法身無其莊嚴何關係證者也我等愚輩纔聞即空便廢修行不知即之所由鼠啣鳥空廣在經論尋之思之。

【文科】これは因に斥圓行無行之謂の一段なり。

【句解】莫見此說等は。妙法即妄心と説き是心是佛と明す圓教を聞いて、この儘佛なれば別に修行の要なしと考へる謬見を破斥するのである。○此説は此叙説の意にて、前に明した正助

二行を修せねばならぬといふ叙説をいふ。○漸行は次第を逐つて修行すること。即ち方便漸教の修行をいふ。○天然彌勒等。すべて修行の因によつて佛果に到られたもの故に生れながらの彌勒も釋迦もない。○十方世界盡是淨土は娑婆即寂光淨土のこと。○觸向對面は見聞覺知のことで、よると觸ると皆佛といふことで無非覺者といふ。○然即佛等は。凡夫のこの儘が佛といふのは理即(六即の第二)で、道理としての佛だといふことが知れたわけで、いはゞ概念だけの佛である。その道理を自己の上に實現し概念ではなしに佛をこの儘の上に體驗した所にこの儘佛といふことが我身に實證される。道理を自己の上に實現する爲には是非共修行が肝要である。○素法身は木地のまゝで粉飾のない法身の理佛のこと。○其莊嚴は福德と智慧は佛の莊嚴である。○關係證者也。修證は人の上に法のまゝが證られたこと即體驗である。體驗のあるものは自ら福智の莊嚴があるべき筈だ。○我等愚輩は著者自ら謙遜していふこと。○即之所由はこの儘が即ち佛といふわけのこと。それは迷情を破つて法のまゝに通達する體驗によつて始めて實證さるゝから體驗は即之所由である。○鼠啣は鼠のソクソクと鳴くと同じやうに、即だ即だと惡平等を喧しく言ふものゝこと、鳥空は鳥がクウ〜と啼くと同じ空だと貶しめていふ。○廣在經論はかゝる口頭の即空を排するは諸經論に出てあるといふこと。鼠啣云々の語は『摩訶止觀』八之二三に出づ。其他未だ檢せず。

二勸請者勸請十方諸如來留身久住濟含識。三隨喜者隨喜稱讚諸善根。四廻向者所有稱讚善盡廻向菩提。五發願者若無發心萬事不成。故須發心以導前。四是爲五悔。下去諸位直至等覺。總用五悔。更不再出例。此可知。

【文科】五悔中勸請等の四悔を明す。

【句解】勸請は佛の此に來りて法輪を轉じ給はんことを佛に向つて念願すること。われらは荒み果てた己心を念する時佛出で給へ聖人來り給へよと佛聖を請じたてまつることの急要を感じる。自己のみを信賴せんとするは未だ法界心を得るの途ではない。○隨喜は他人の善行美德を衷心から喜び讚へること。正法を修するを見ては仇をなすは凡情の陥り易い魔界である。この排他の偏見を却けて他善を己の如くに喜ぶは必ず求道者の用心せねばならぬことである。○廻向は己が内に積める善根功德を私せずしてこれを十方衆生に廻施し衆生と共にひたすら菩提涅槃に向ふのである。少しく内に得るものが出来ることそれを以て自己をかざり他を蔑んとするは凡情である。この凡情を捨て、自他を隔てざる法界に入らしむるものは廻向である。○發願は上求菩提下化衆生の願を發すと。この念願が終始求道者の内心に燃えねばならぬ。然るに

順逆共にこの念願を見失ひ勝である。この念願の燃えざる時にはたとへ萬行諸善を積むも御者なき馬車の如く、積める荷の重みでいよ／＼深く惡道に墮するのである。文に無發心萬事不成とはこの謂である。○下去諸位等は、この五悔の助行がたゞ最初の隨喜品だけの行法ではなく、凡そ因行を修する程のもの即ち等覺位までは修すべき行法であるが、煩はしいから後には略して言はぬ旨を附言したのである。

二讀誦品者。經云。何況讀誦受持之者。謂內以圓觀。更加讀誦。如膏助火。三說法品者。經云。若有受持讀誦爲他人說。內解轉勝。導利前人。化功歸己。心倍勝前。四兼行六度。經云。況復有人能持是經。兼行布施等。福德力。故倍增觀心。五正行六度者。經曰。若人讀誦爲他人說。復能持戒等。謂自行化他事理具足。觀心無闕。轉勝於前。不可比喻。

【文科】五品位の中第二讀誦品以下の四品を明す。

【句解】經云は四品の下共に分別功德品の文。○讀誦は口で讀むこと。受持は心に持つこと。○齊は讀誦に譬へ火は圓觀に喩ふ。讀誦することは新しい知識を吸取することであるから、こ

兼行六度
正行六度

れによつて圓觀がいよ／＼明にされる。○内解轉勝は讀誦の助によつて圓觀の内解がいよ／＼勝れること。○化功歸己は說法すればたゞ讀誦した時よりは一層法門が明になる。說法の教化の功はやはり說法者の自行を進むるものである。○兼行六度は圓觀を修する傍に兼ねて六度を行すること。この場合は圓觀と六度を別なものと考へるから兼行といふ。即ち圓觀は智慧を進むるもの、六度は福德を積むものとする。それで六度を修するのが直接圓觀の智慧を研くのではない。例せば布施に於いていふならばたゞ財法共に私に所有してはならぬ。この所有欲の貪愛が圓觀を妨げるから、これを除去する爲に布施を行じてこれを除き、福德を積んで以て圓觀を滞りなくせんとする。それ故に布施は圓觀とは別なことであるが、唯圓觀の準備とし資助として布施を行す。よつて布施は方便行である。餘の持戒等亦例して可知。○正行六度は同じく六度を修するのであるが、六度を修する所に圓觀を修して行くので、別に六度の外に圓觀を要とせぬから正行六度といふ。この場合は前の兼行六度と異なり、六度の福德で直ちに圓觀の智慧に達するのである。布施の例に就いてはいはゞ、布施は所有欲を離れることでやがて自己の有執を空する空觀である。又布施は一切衆生の貧窮を肯定してそれを己の貧窮として哀愍することであるから、空執を破する假觀である。又布施することそれ自らが如來行であつて決して人我の所作ではないのであるから、そこに如來即ち絶對的實在を確認することである。それ

六根清淨
位

でなければ眞の布施ではない。よつて布施即中道觀である。かく布施即圓觀・圓觀即布施であるから布施は正行である。五度は例知すべし。○自行化他は六度を行す所に圓觀の自行も進み同時に他を教化するから一行に自他が具足する。○事理具足は六度は事行であるがそこに圓觀の理行を修する故に、正行六度は事理不二の行である。よつて事理具足といふ。

此五品位圓伏五住煩惱外凡位也與別十信位同。

【文科】これは五品位を結ぶ語である。

【句解】外凡位は未だ見思二惑を斷じないから外凡といふ。○與別十信位同とは伏惑するところが同じといふので、觀行に就いては二教別なること勿論である。

次進六根清淨位即是十信。

【文科】第二に六根清淨位を明す。分科如左

- 一 總標……………次進六根
- 二 別釋……………
- 一 初信……………初信斷見
- 二 二信乃至七信三……………
- 一 初正明……………次從二信

一合仁王經文二一 正會釋
 一因辯二惑斷ノ義
 然圓人本
 永嘉大師
 三釋永嘉集文
 八信乃至十信
 次從八信

【句解】 六根清淨位は六根が自由の作用をなすことを清淨といふ。蓋し觀智いよ／＼明になれば内心の自由が肉體の自由を俱ふやうになつたのが此位である。是れは圓教の十信位である。初信斷見惑顯眞理與藏教初果通教八人見地別教初住齊證位不退也。

【文科】 初信位を明す。
【句解】 文解し易ければ略す。

次從二信至七信斷思惑盡與藏通二佛別教七住齊三界苦集斷盡無餘故仁王云十善菩薩發大心長別三界苦輪海解曰十善者各具十善也若別十信即伏而不斷故定屬圓信

【文科】 第二信乃至第七信を明して仁王經文を會釋す。
【句解】 仁王云は仁王經教化品の文。この文に十善菩薩とありて十信の菩薩たること明でない。

い。よつて天台は長別三界苦輪海の文より見て圓の十信とす。今それを會釋する。○十善は不殺不盜等の十善のこと。仁王經天台疏卷四に十善は國王の天下を治むるだけの善なりと釋してある。十信の菩薩は國王と同じ徳を有つといふので十善菩薩と名く。一位々に十善を具へる。○長別三界苦輪海は圓教では第七信位である。よつて十善菩薩は圓信のことをいふ。若し別教の十信位は三界見思の二惑を伏したばかりで斷せぬから、三界苦を長く別るゝとはいへぬ。

然圓人本期不斷見思塵沙意在入住斷無明見佛性然譬如治鐵蟲垢先去非本所期意在成器器未成時自然先落雖見先去其人無一念欣心所以者何未遂所期故圓教行人亦復如是雖非本所望自然先落

【文科】 見思及塵沙二惑を斷する義意を釋す。
【句解】 然圓人等以下に二惑の斷義を明す。こゝにこれを明したのは見思二惑を斷盡する位を明す下であり仁王經の三界苦海と別るゝの文を叙べたに因つて今見思塵沙の二惑のことを釋するもの。○圓人本期は最初から一心三觀を修して無明を斷するにあつて、少しも念頭に見思

圓教の二惑斷の義

塵沙の二惑の斷盡を考へて居らぬ。これ別教の斷惑義と大に異なる點で、別教では最初は主として見思の惑を次には塵沙の惑といふやうに、第一第二第三とそれ／＼の目的を立て、次第に斷ずる。尤も最初から無明を斷ずるのを究竟目的とはして居るが、それは裏にあることで表には三惑次第斷が目的である。これは教理に根本的相違があるからで、別教では三惑別體論であり、圓教では同體論である。即ち三惑はその表現した相狀に於いてこそ別異はあるが、惑の根本はたゞ中道眞如の理に達せざる根本無明である。それから塵沙の惑も見思の惑も生じたものとする。それ故に斷惑に於いてもたゞ一心三觀によつて根本無明の迷夢を破るが唯一の斷道で更にその餘を工夫する要はない。然るにまだ無明の本陣を陥れない前にその出城たる見思や塵沙が期せずして先づ陷落するのである。○然譬如等は譬を擧げて如上の意義を明す。譬は鐵を鍛へて器(例せば刀)を作らうとする刀鍛冶は最初から刀を作ることのみを目的として一意専心に鍛へる。然るに刀が作れぬ前に鐵の垢がいつのまにやら落ちて了ふ。併しそれだけを見ては鍛冶師は少しも嬉しくない。なせといふにまだ所期の目的が達せられぬからである。圓教の行人が一心三觀を修して居る間に自ら二惑が剝落して行くのもそれと同じである。

永嘉大師云、同除四住、此處爲齊、若伏無明、三藏則劣。即此位也。解曰、四住者只是見思、謂見爲一名、見一切處住地、思惑分

三一 欲愛住地、欲界九品、思二、色愛住地、色界、四地、各九品、思三、無色愛住地、無色界、四地、各九品、思此之四住、三藏佛與六根清淨、人同斷、故言同除四住也。言若伏無明、三藏則劣者、無明、卽界外障、中道之別惑、三藏教止論界內、通惑、無明、名字尙不能知、況復伏斷、故言三藏則劣也。

【文科】 三に永嘉集の文を釋する一段。

【句釋】 永嘉大師は眞覺禪師玄覺のこと。永嘉は其出生の地名である。初め天台宗七祖慧威の門に學び後禪宗六祖慧能の門に投じた人。傳記は『宋僧傳』第八『佛祖統紀』第十にあり。其著『永嘉集』は藏中に收む。今の文はそれに出づ。この文が宋朝天台の勃興の機縁となり殊に著者諦觀が新羅より來り天台の人となれる動機をなせるゆかりある文である。よつて殊に此文を引釋するものであらう。此文も『法華玄義』五之上に出でそれを『永嘉集』に引用してあるから今永嘉大師云と眞覺禪師の言にしてある。○同除四住等、『玄義』では藏教の位次と圓教の位次とを比較する下に出づる文で、『玄義』の前後の文を出すと。若三藏佛位斷見思盡望六根清淨位、有齊有劣、同除四住、此處爲齊、若伏無明、三藏則劣、佛尙爲劣、二乘可知とある。よつて今

六根清淨位のここで會釋するのである。○四住の解説は前に出す如し、其他は解し易し。文に就いて知るべし。

次從八信至十信斷界内外塵沙惑盡假觀現前見俗諦理開法眼成道種智行四百由旬與別教八九十住及行向位齊行不退也。

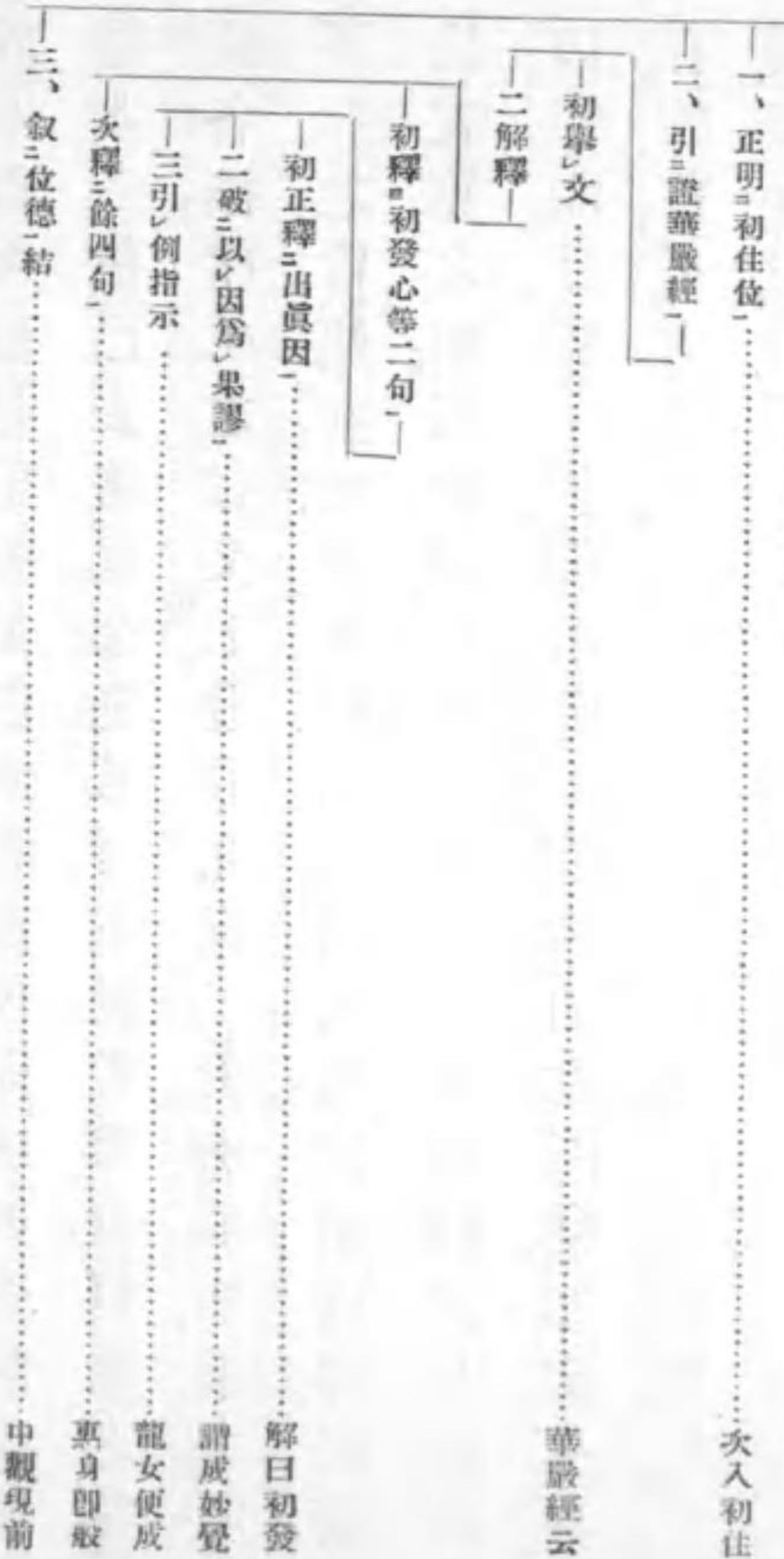
【文科】 第八乃至第十位を釋す。

【句解】 假觀現前見俗諦理等は別教の如くに別に假觀を修して俗諦理を見るのではなく、一心三觀を修して居る間に塵沙惑が斷せられ、その結果自ら假觀が成就して俗諦理を見るのであるから、結果は別教と同じでも其の内容意趣を異にする。それを詮すが現前の文字である。自然に向ふから現出すること、こちらの意志のはたからぬことである。これに例して前の見思二惑を斷盡した時に空觀現前見眞諦理開慧眼成一切智行三百由旬と挿語すべきであるが、煩を恐れて前には略してこのみに出したのである。○法眼・道種智・行不退等の解説は別教の下に叙ぶるが如し。

次入初住斷一品無明證一分三德謂解脫般若法身此之三

德不縱不橫如世伊三點若天主三目現身百界八相成道廣濟群生華嚴經云初發心時便成正覺所有惠身不由他悟清淨妙法身湛然應一切解曰初發心者初住名也便成正覺者成八相佛也是分證果即此教眞因謂成妙覺謬之甚矣若如是者二住已去諸位徒施若言重說者佛有煩重之咎雖有位位各攝諸位之言又云發心究竟二不別須知攝之所由細識不二之旨龍女便成正覺諸聲聞人受當來成佛記莖皆是此位成佛之相惠身即般若德了因性開發妙法身即法身德正位性開發應一切即解脫德即緣因性開發如此三身發得本有故言不由他悟中觀現前開佛眼成一切種智行五百由旬到寶所初居實報無障闍土念不退位。

【文科】 初住位を明す一段大科（左）



三徳の次

【句解】 解脱般若法身の三は本質的の次第前後はなけれども、その徳がわれ／＼の上に現前してくる順序からいへば空の解脱が最初であり假觀の般若が次に中觀の法身が最後である。故に今はこの順序によつて列ぬ。若し法そのものがわれ／＼にはたつきかける順序からいへば、法身の理體から般若の智慧が生じ、智慧が行の自由(解脱)の本源となるから法般解の順序であ

不縱不横

る。即ち法の流出の邊である。前は機の趣入の邊である。今は位次を明す處ゆへ機の趣入の邊に就く。○不縱不横は渾一體を顯す語。三徳はもと妙法そのもの、價値であるから、圓融渾一なものである。不縱は本質的に次第前後のないことをいふ。暫く機の趣入の邊からいへば前後はあるも、それは本質的な絶對的な次第ではない。即ち解脱(行)がある處には理(法)智(般)の全體が具つて居る。理智を内容とせずに行の自由は體得の出来るものではない。行の自由即ち解脱を體得した所にそこに顯現して居るものはたゞ唯一の解脱ではあるが、それが絶對的存在であるからその解脱はその外に眞理も智慧をも考へない否考ふることの不可能なものである。従つて解脱といふ一徳に法般の二徳が具はつて味はるゝのである。それと同じやうに般若の徳はそれが體験せられた一念には唯一絶對である。そこに眞理の全部を持つて居るのであり、行の自由をも確保して居る智慧である。又法身の徳もたゞ智慧なり行なりから引離しては決して存在とはなり得ない有名無實のものである。般若を目とし解脱を足として具備して居てこそ眞の法身の體である。されば三徳は決して個々別々に存在し得ないから、本質的な次第前後があらう筈はない。それを不縱といふ。次に不横とは各一徳が必ず餘の二徳を具備するといへばさて、それがいつでも同時に同處に併列して存在するといふのではない。即ち三徳は般若が現はれるときにはたゞ般若だけが絶對的存在であつても、そのものが全體を般若一つに表

現したのである。(それより外に法そのもの)よつて決して餘の二と對等の關係に平面的に置かれぬ
 解脱が現はれ法身が體驗せらるゝも亦同様であるそれを不横といふ。○世伊三點は梵語の「い」
 の字はその形が●●であるから縦の●●にもあらず横の●●にもあらず不縦不横であるから、三
 德の不縦不横を顯す譬喩に擧げたもの、天主三目は阿修羅天主は三目あつてやはりその形が●●
 であるから、亦不縦不横の譬としたものである。○現身百界は十界身を自由自在に示現するこ
 と十界が各々に十界を具へるから百界といふたものですべての法界を示す。○八相成道は釋迦
 佛の如くに八相を示現して佛道を成じ作佛するをいふ。また本地は因位の菩薩であるがその證
 得したものは中道の理であるからその德によつて自ら化地の爲に百界作佛が出来る。

斷惑行因

【餘說】菩薩行因論。こゝで菩薩化他の行因に就いて附言して置く。藏教の菩薩は伏惑行因。
 通教の菩薩は扶習潤生で菩薩化他の爲に三界受生する原理を説明したとは。前二〇六頁并二に
 叙べた如くであるが、別圓二教の菩薩は斷惑行因である。藏通二教では眞理を空寂な消極的な
 ものと説くから斷惑して理を證つては化他の行の爲に三界に受生することは出来ないが、別
 圓二教ではそれと反對に見思二惑があるが爲に菩薩は自由自在の化他が出来ぬ。何となれば
 惑はわれ／＼を三界に縛りつけて置くからして自由を得ない。そして惑のある者がいかに化
 他行を修して因德を積んでも、やはりそれは惑の所産であるから菩薩の行因とはなり得ない

よつてこれらの惑を斷じて三界の上に自在を確保し更に塵沙を斷じて化導障を除去し、更に
 復た無明を斷じて中道眞如を體驗する所に、始めて眞如それ自らの力を得るからして眞の化
 他が行はれる。よつて別圓二教では斷惑行因論を説く。この點に於いては別圓二教其の説を
 一にするが、斷惑の意義に於いて兩教の別を生ずること前に屢々叙べたるが如し。

○華嚴經云。此の文諸經の位次を總説する下二に引用せるが、こゝで再び引證して詳しく釋す
 るは圓教の位々相攝の旨趣を明にして修觀のこゝまでも怠るべからざることを闡明せんが爲で
 ある。○謂成妙覺は謬見を出す。便成正覺とある文を直ちに妙覺と解するが謬見の根據である
 よつて先づそれを斥けて、それならば二住以上の諸位は徒に施設することゝなるではないかと
 難す。○若言重説は謬見者の會通の言。即ち謬見者がそれは徒施ではない可憐親切に重説し給
 ふのであるといふならば、その會通は佛は用事もないに煩重に説いたといふ咎ありと難する。
 煩重は不聰明から生ずる過失である。○雖有位々等の下は謬見の根柢を明にする。前に述ぶる
 如く華嚴經の便成正覺の文は同經に四十一位の位次を明す所から考へたならば、それを妙覺と
 解するの謬であることは見易いことであるが、どうしてそれを謬るのかといへばそれには根柢
 がある。その根柢は位々相攝とか發心究竟不二とかいふ文に誤られてその相攝する所以又不二
 の意味を知らないことにある。よつて今それを叙ぶ。一位々々に各諸位を攝する所以はそれが

法そのもの、歩あゆみの跡であるからだ。法そのものは人がそれを體驗すると否とに頓著せず、常恒不斷に歩む。その一步々々の跡が圓教の位次である。併し修行の當事者たる菩薩人にとつてはそれがすべてではない。即ちその法の歩の中に歸入して行く所に法そのもの、脈膊を明に體驗するそこに位々相攝が味はれる。併しそれと同時に尙法の歩に一致し切れない人我の現實が迷妄とは知りつゝもどうすることも出ない事實として、一位々々の法の歩の中に見出さるゝ。この矛盾が菩薩人の胸に明になつた所に菩薩人は自ら法の歩の中に進み入らずには居られぬ。即ち位々相攝は菩薩人が法の上に自分を見出した所に味はるゝ體驗の叫である。それ故に同時にその叫は法に及向ふ人我を明に信知した悲痛を俱ふ。それをたゞ概念的に取り扱ふから惡平等に墮し因果撥無の邪見になる。發心究竟不二の旨も亦例知すべし。この相攝の所由不二の旨に就いては次下六即論に於いて更に詳しく闡明しやう。尙ほ發心究竟不二の文は涅槃經三十四の文である。○龍女便成等は法華經提婆品の龍女成佛のこと。諸聲聞人等は法華經方便品以下に開顯した舍利弗以下の聲聞の授記作佛のこと、これらの作佛がすべて初住位の八相成道を説いたものであつて、華嚴の便成正覺の例として見るべきものである。○惠身即等は華嚴の經文を解しつゝ、三徳と三因佛性の關係を明にする。

所有惠身一般若一了因一惑

清淨妙法身一法身一正因一苦一本有一不由他悟

湛然惡一切一解脫一緣因一業

三徳は果上顯現の名・三因佛性は在纏隱沒の名・名は別であるが體は別でない。どうしてそれを知るとならば經の不由他悟の句である。これ法そのもの、徳で法以外の願行等の他によつて積み上げ悟つたものではない。言を換えていはゞ本有の徳であるといふが不由他悟の句である。本有の徳であるならば三徳はその體三因佛性である。單に法そのもの、上をいふならば三徳と三因とは嚴密の意味に於いて別なものではない。在纏にある時も法そのものは暫くも理を失はぬばかりでなく、睿智を以て常に照し、行の自由を得て常に所作する。照すは般若である所作するは解脫である。名別體同である。而も別な名で呼ぶのは人の上の情智隱顯の別を示す爲である。別教でいふやうに凡夫は正因佛性は保有して居るが了因緣因はないと談するとは全く別である。圓教では三因と三徳とは當體全是の相即關係にある。その關係を尙ほ明にいふならば惑業苦の三道がそのまゝ三徳である。惑業苦の三道は單に人の迷悟のみに就いて言つたのであるが、その迷情も亦法の上にこれを還元して見るならば法の自らの徳はそこにいつも顯現されて居る。人の煩惱に惑つて居る當體に法の般若が輝いて居り、人の生死の苦果の當體が法身を

のものである。業に縛られて居る相の當體に解脱の自由が漲つて居る。法は人の情智の云何に拘らず、暫くもその徳を韜晦し得ぬ。否人の情智のいづれにも應同して、異つた色彩で同じものを表現せずには居られぬものが法である。かゝる法の不可思議を體驗するのが初發心時便成正覺の初住位でその體驗を説いたものが三徳であるから、今それを釋して三因佛性を點じてその意趣を明にしたものである。○性開發とは佛性開發で佛性は果人の性で佛の性能である。智惠慈悲等が佛性である。それが開發するとはわれ／＼の人の上に發見されることで、佛の上で今まで發揮して居らなかつたものを新に開發したのではない。佛の上では古往今來發揮して手を引かない本有のものである。その事實がそのまま菩薩の上に發見されたのを性開發といふ。○不由他悟の句は經の上ではたゞ所有惠身に就いて言ふた語であるが、上承起下の語で後にもかゝることを顯し、三徳がすべて本有なる旨を明にせんが爲に態々後へ廻して釋したものである。○中觀現前以下は別教の下語を参照して解すべし○念不退位は中道法性を開覺した正念を失ふことのない位のこと。

二住位十

次從二住至十住各斷一品無明增一分中道與別教十地齊

【文科】 第二住より第十住までを一括して明す。

初行位

次入初行斷一品無明與別教等覺齊

【文科】 初行位を明す

二行位

次入二行與別教妙覺齊從三行已去別教之人尙不知名字何況伏斷以別教但破十二品無明故故以我家之眞因爲汝家之極果只緣教彌權位彌高教彌實位彌下譬如邊方未靜借職則高定爵論勳其位實下故權教雖稱妙覺但是實教中第二行也

【文科】 第二行を明して別教の行位はこゝで盡くる所以を釋す。

【句解】 我家之眞因は圓教家では第二行はまだ眞因である。○教權位高は根機未熟なる者に對する方便である。未熟の拙なき機には佛の極果はあまりに高く遙かにして及び難いものなれば、その極果を暫く低位に引下して説く故に位は實教に對して高く見える。○譬如邊方等は譬喩を擧ぐ。邊方の動亂に征夷大將軍として將帥の職に就いても、本國へ戻つて論功行賞の場合に元帥として取扱はれない。動亂鎮撫は無明退治に征夷大將軍は別教の妙覺位に譬ふ。即ち別教を説くは暫く無明を退治し機を調へる爲であるから、無明が對治し根機調熟せばありのまゝ

の眞實に立ち返るより外はない。圓教はその本國の眞實を顯す教であるから、征夷大將軍が大元帥として取扱はれぬのはそれだけの實力がないからであるやうに、別教の佛も圓教の本國へ歸つて見ればまだ因位の菩薩であるは、實際まだ斷盡すべき無明が残つて居るからである。

次從三行已去至十地各斷一品無明增一分中道即斷四十二品惑也。

【文科】 第三行已去第十地までを一括して明す。

【句解】 四十品惑は初住より第十地まで一品づゝの惑を破するから四十品である。

更破一品無明入等覺位此是一生補處。

【文科】 等覺位を明す。

進破一品微細無明入妙覺位永別無明父母究竟登涅槃山頂諸法不生般若不生不生名大涅槃以虛空爲座成清淨法身居常寂光土即圓教佛相也。

【文科】 妙覺の果位を明す。

【句解】 一品微細無明は中道眞如の法性に達せざる情見即ち無明の最も原始的なるものをい

十地位ま

等覺

妙覺

元品無明

圓教の教

ふ。それは迷の根源であつて法性の絶對そのものから相對差別の世界へ移らんとする念であるから最も力弱く最も微細にて法そのものと見紛らかす程のものであるから微細といふ。迷の元初といふ所からこれを元品無明といふ。○無明父母は中道の理に達せざる根本無明を父といひ事象の實相に執著する貪愛の思惑を母に譬ふ。即ち迷理惑と迷事惑を暫く父母の二に分けたので、其體はすべて無明なれば無明父母といふ。○涅槃山頂はこの上なき最上無上の涅槃をいふ。○諸法不生般若不生等、涅槃は人が法そのまゝに證入し盡した境界に名くるもので、從來永く迷つて來た無明界中所見の諸法もそれを見る智慧も全てをすてはてた、いはゞそれらの境(諸法)智(般若)對立を絶滅した所に味はるゝ境智不二の絶對である。否境も智も忘れて了つた不可思議そのものである。併しその不可思議そのものゝ中に境智を了々に分別するものである。依て諸法不生般若不生等と境智を擧げて涅槃を示す。不生といふはそのまゝ常住の生命であつて生滅轉變の暫有的在生ならざるをいふ。諸法不生は境がそのまゝ生滅轉變のない生命的實在なるをいひ、般若不生は智がそのまゝ生命的實在であつて生滅に移されぬをいふ。不生不生は境も不生・智も不生でたゞ法そのものの絶對そのまゝなるをいふ。それが大涅槃である。即ち境と智と境智不二の三不生を以て涅槃を明す也。○虛空爲座は法身佛正覺の座は虛空である。これ法界遍滿の理體なるが爲である。その法身佛の居住處は常寂光土である。即ち圓教の佛は

三身中の法身なりと明したものである。これは前の別教の佛が報身佛なるに比較して勝れたるを顯す爲に法身佛といつたもので、報身佛や應身佛にあらぬ法身佛をいふのではない。圓教の佛は法性を窮め盡したものであるから暫く法身佛といつたばかりで、それは三身を圓具した法身である。法身佛なるが故に同時に報身佛であり又同時に應身佛である。即ち法華を説いた釋迦佛は三十二相の應身佛であるが同時に光壽二無量の本門久遠の報身佛である。亦同時に微妙淨法身の法身佛である。これが圓教の佛の典型である。

(3) 六即判位

然圓教位次若不_レ以_レ六即判之則多_レ濫_レ上_レ聖故須_レ六即判位謂一切衆生皆有佛性有佛無佛性相常住又云一色一香無非中道等言總是理即次從善知識及從經卷聞見此言爲名字即依教修行爲觀行即相似解發爲相似即十分破分見爲分證即智斷圓滿爲究竟即約修行位次從淺至深故名爲六約所顯理體位不二故名爲即深識六字不生上慢委明即字不生自屈可歸可依思之擇之

【文科】これは六即を以て位次を判することか明す一段。

【句解】然圓教等は先づ六即判位の理由を叙ぶ。○多濫上聖の句は正しく理由を叙ぶる語。

圓教では最初より是心これ佛の教であり従つてその行位を明すも行者の自力策勵の行を排してたゞ法性それ自らのはたらき即ち如來行に歸するを要と教へ、その如來行にあつてはその徳初後別なしと談す。この圓頓の教は稍もするとこの儘佛なりとて、修行無用を執するの謬見に陥り易いものである。これは前に叙べたるが如く圓教をたゞ理智によつて概念的に取り扱ふからである。それを更に自己の情意に訴へ自己の全體に信受し體得することを怠るゝからである。換言せば圓教の教は佛の體驗である唯佛與佛の佛境界であるから、それは體驗によらねば信受し得ざるものであるといふことを見落すのである。それでこの謬見に陥らしめぬやうに體驗即人の上の全體的満足が、圓教の行者に是非共要求せらるゝものであることを明にせねばならぬそれが天台が六即を以て行位を判する理由である。それを今多濫上聖といふ。上聖は佛である體驗のない凡夫がこの儘佛であるといふて居るのは、佛凡の別を混濫するものである。さういふ混濫者が行人の多數を占むるから六即を言はねばならぬ。時に上來は六即を立つる理由は増上慢の行者の弊を匡す爲であるといふことを叙べたが、これが六即を立つる理由の全體ではない。何となれば増上慢の行者の濫聖の弊は六の別を立つることによつて撓めらるゝ。然るに即

の字を以て因果不二を明にしたのは、元よりその六の別が不二の上にある圓教の妙旨が然らしむる所であるが、この卽の字によつて一面自屈の菩薩を引き立てるのである。自屈の者は菩薩の行位の長遠なるを見て、到底我等凡小怯弱の徒の企及する所でない、自屈の精神から却つて修行を廢する。依てこれらの行者の爲に佛は遜きにあることを明にしてその謬見を破するの卽の字である。よつて『摩訶止觀』一之五辯には自屈と増上慢の兩謬なからしめんが爲には六卽を知るべしといひ。本書次下には自屈と上慢を擧げて六卽の所明を結んである。今何故にたゞ濫上聖の一を擧ぐるかといふにこれは『止觀輔行』一之五辯によるものであらう。『輔行』に曰世有講者皆以初住爲果佛亦由失於六卽之意講者尙爾況暗禪耶。暗禪は所謂野狐禪の徒をいひ増上慢の徒である。講者は教相の文字に拘泥するいはば道學者流である。道學者は形式を尙び自屈に陥り易い素質があるにも拘らず尙ほ初住佛果を執じて濫聖の弊に墮する。況んや野狐禪の徒に於てをやである。卽ち圓教の圓融談に俱ふ弊は多く増上慢である暗禪である。よつて且く其多きに從つて上慢のみを出したものである。尙ほ天台の時代は一面には瑣瑣なる教相文字の弊が教界に蟠つて居たからして并べ擧げられ。荆溪（輔行の著者）の時代は禪宗新興の結果寧ろ暗禪の弊が多かつたから、それに對して六卽を高唱されたのであるから『輔行』にはたゞ上慢を擧げられたものであらう。（尤も『輔行』にも次には兩謬を并べ擧げてある。）本書述作の時

代はやはり禪學旺盛の時代であるから、『輔行』によつて初には多濫上聖といつて上慢のみを擧げて而もそのみに非ざることを多の字にて示し、次下に兩謬を并擧したものであらう。○謂一切等。先づ理卽を明す。理卽は全く煩惱に埋もれ未だ圓教の妙法を聞かざる間をいふ。この間には衆生は少しも是心卽佛の妙法を知らぬが、しかし法そのものは常にこれらの衆生心の上においてその用を止めない。卽ち佛の全體が衆生心の上に注がれて居る。よつて卽佛である。理とは道理として佛であるが、その當事者の自覺には佛の影すらもないから理といふ。尤もこの理卽に收めらるゝは佛教を稟けざる凡夫人ばかりではなく、藏通二教を稟けて居る三乗と別別教初地已上の菩薩は教は方便なれどもはや教に頼らず直ちに中道眞如を證る位（これを證道といふ）なれば、その證は圓教の妙法と別なものでないから理卽ではない。○皆有佛性。佛性は別教では「佛になるべき可能性」の意に解し、煩惱に泥れてある間はやがて佛になるべき徳は具へて居るも、佛の智恵も慈悲もその佛性には顯在せぬ。たゞ修行の功積まばやがて顯現するだけの可能性だけは現在凡夫心中に現存する。これは別教悉有佛性の考方である。圓教にては然らず。佛性は「佛のもつべきすべてのもの」の意に解し、惑業の中に常に佛の正因を藏するのみではなく、佛のもつべきものは慈悲も智恵も常に藏して居る。それ故に一切衆生はいつも

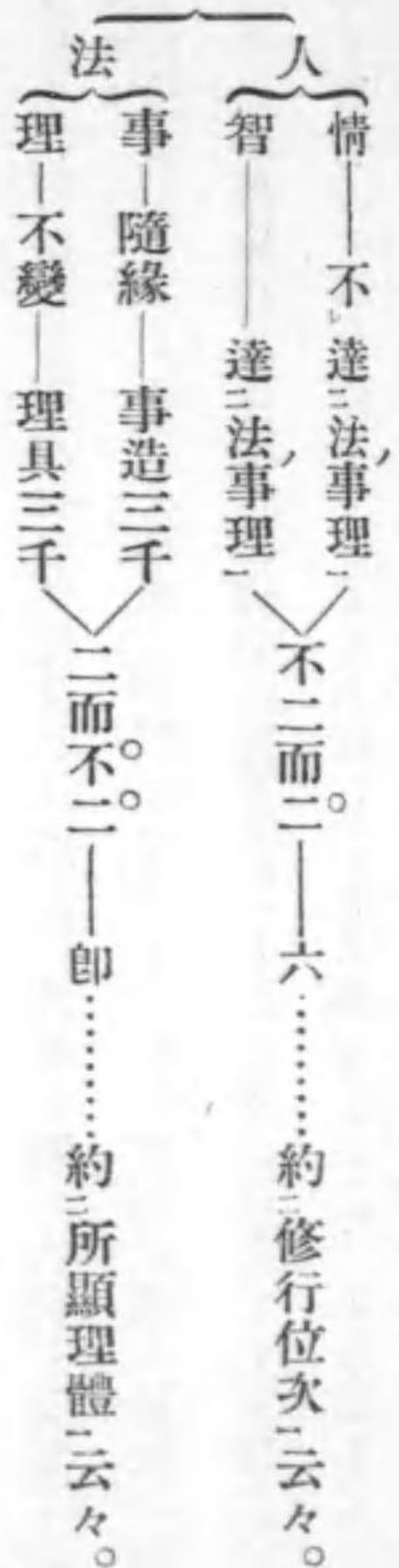
皆有佛性
の義

佛の光明中に棲息するばかりでなく、佛光は己れ自らの身心から放ちつゝある。それを一切衆生皆有佛性といつたのである。それは煩惱に泥れた凡夫には少しも知られないことであるが、それにも拘らず佛の悲智は衆生の心に注がれ衆生の心から放射される。衆生はかういふ不可思議境中の存在である。しかしこのことは觀行によつて體驗せられ實證せらるゝ事實であるから全く觀行せざる者には難信の法である。然るにも拘らず先覺者即體驗者には疑ふべからざる事實である。○有佛無佛性相常住とは、佛があつてそれを體驗しやうともそれを體驗する佛がなくて世には全く知られないにしても、一切衆生皆有佛性の事實には何等増減する所がない。法そのものゝ世界はそれを知る人の有無によつて少しの影響をも受けない。永劫の昔より未來際をかけて性相共に常住不易である。性は理體で相は事象である。法身に即する生死の苦果は性である。般若解脱に即する惑業はその相である。法身はいつも生死の苦果の上に其全體を投げ出し、般若解脱はやはり惑業の上にその全相を現はして易ることがない。又はいふべし十界三千の差別は相にしてそれが一法界の實在であるのは性である。その差別の波が平等の水を自體として常恒不斷に絶對無限の音を立て、岸を打つことは昨日も今日も變りがない。それを性相常住といふ。○一色一香無非中道は前には有情の上に就いて即佛の旨を示したから、こゝでは更に非情に就いて即佛の旨を明す爲に此文を引用したものである。色香は色聲香味等の六境の

中の二境であるが、これによつて六境のすべてを代表せしめたもの。朝に咲いて夕に萎む一本の草花も、やがて行衛も知らず消え失する一炷の香煙も中道ならざるものはない。一色一香すべての眞如の顯現であるばかりでなく、眞如のもつて居る程の悲智は草花なり香煙なりが所有するものである。一事一物として存在する程のものは一々がその體眞如であつて、悲智の光を放射して止まない不可思議の實在である。荆溪は其著『金錫論』に於いて華嚴宗の清涼澄觀の非情無佛性説を排して非情有性説を力説して居るが、その論據とする所は體驗によつてのみ知らるゝ不可思議の實在であるといふにある。體驗を外にして草木の發心修行の可能不可能といふことの詮索をしたならば、それは闡提成佛と同じやうに到底極難信の事である。併したとひわが身が未だ實證することを得ないとしても、唯一眞實が體驗の世界にあるを信じ得るならば何人も草木國土悉皆成佛の實在の世界を否定することは出来ない。藝術家は特別な世界に住んでそれを一般未知の人々の前に紹介し表現する。若しその藝術に理解をもつ人であつたらば何人も藝術境は主觀の妄想で何等客觀的確實性はないと否定し、凡人の寫象する世界のみが眞實であると自惚るわけには行かない。一色一香無非中道は佛の體驗境である。それは體驗によつてのみ實證さるゝ唯一の實在である。而してたとへそれを實證するものが一人もないとしてもその實在性には搖ぎを感せぬ。かうした實在の佛境界に浸りながら、それを信じそれを知ること

となしに、平凡の生を食るものはすべて理即である。○次從善知識等以下は名字即を明す。名字即は體驗者の教示によつて自己の即佛なることを開知したる位で、たゞ聞きたるばかりで少しもそれを自己の上に體驗せんと企てないから名字といふ。名字は名のみで實がないことを顯す語。○依教修行等は觀行即。教の如くに體驗せんとして觀心修行にぞりかゝつた位である。此位では觀智の動いて居る間だけは法そのもの、世界に心を遊ばしむることは出来るが、觀行をやめて禪座を立てば實在を照すことが出来ない。天台大師はこの觀行即で終つたと自白して居られる。○相似解發等は相似即。觀智が漸く進んで六根清淨即肉體に自由を感知するやうになり、觀行の座を離れても理を照すことが出来るやうになり。實在の境が漸々自分の前に開けて来るやうになつたのが相似即である。○分破分見は分證即。又分眞即ともいふ。いよく實在の境に一足入つたが未だ入り切らざる處。時に眞如を分割的に考ふるは別教的偏見ではないかといふに然らず。分破分見は人の上に就いていふのであつて、眞如の法を分割するのではない。それ故に一位一位に即佛を談じて法の不可分を明にして居る。法の世界に入り切らない現實人の根強い力を信する者は、分證即到四十一位を立てることに異議を挾むわけには行かない。○智斷圓滿は究竟即。理想の實現である。智斷は二徳一體なれども煩惱を離れた無碍道を斷徳といひ、眞理を見極めた解脫道を智徳といふ。○約修行等は六即の義意を明す。これに就いて

古來異說紛々たるも人法相對說を正しとすべし。人法相對說の要旨は左の如し。



實在の世界(法事理)の證明はたゞそれを體驗し實證する智慧によるのみである。この經驗的事實が法とそれを認識する智(人)との對立に絶對的價値を確認せしむる。即ち人は實在の世界を認識することによつて、それ自らの永遠性絶對性を信知する。それと同時に實在の世界を否定し若くはそれと相背せる世界に實在性を移入することが、すべて誤れる認識(人ノ情)の所産にして「そらごとたはごと」として拒否せずには居られぬ。この情と智との戦が圓教の行者の前に現前する悲痛なる現實である。しかしそれは實在に根ざせる智とたゞ根もない宿習の情との戦であつて、實なるものが虚なるものを征伏して行く行進である。情は法そのものに達せざる根もなき宿習である。それは譬へば睡夢の如きもので何等實在の世界そのもの、隨緣變作の創造に参加し、それを支配する威力のないものである。しかし眠は深く宿習は厚い。情は根もない宿習なれども、凡夫にとつては何物にも増して嚴かなる事實であるから、それを肯定せず

は居られぬ。單なる夢幻に過ぎないと抑へつけて了ふには、あまりに確實性に富んで居る。それを征伏するは決して容易なことではない。たゞ法の事理のありのまゝを知つて、より確實な實在を惠み與へ、その智によつて情のあからさまを照し、それが夢幻であり根無し草であるを覺らしむるが唯一斷惑の方法である。即ち夢の當處が實在であると知らしめられた時に、夢を夢として知ることゝ新しい實在だが、同時に知らるゝから夢から出で、實在に進む。實在に進むからいよゝ夢を夢として知らしめらるゝ。この悲痛にして且つ微妙なる矛盾の調和が、われら衆生をして夢を貪りてこの儘佛であると證りすまさせず、いよゝ情を破つて法の世界へと進ましめずには措かぬ。この情を轉じて智へと進む足跡が、圓教の重々の位地であり六即位である。然るにこの悲痛なる戰の現實の根柢となり糧食彈藥となるものは法の事理即實在そのものである。情智の如何に拘らず常に同じやうに絶対永遠の生命と力を、いかなるものゝ上にも投げかけて變易せざる法そのものが、現實の戰の方向を支配するのである。事造三千理具三千といふはいかなる事象(隨緣)もすべてそれが真如に據り真如の顯現でないものはない苟くも一の事象のある處には理の全體を具有しないものはないから理具といふ、又反對に一理のある處暫くも事を變造せざるものはないから事造といふ。ありとあらゆるものが苟も存在であるならば、すべてそれは理を全具する實在である。又理を全具しない所に存在は創造されな

いから、すべてのものが理具の事であり、事造の理であるといふことで事理三千といふ。迷の夢はたゞそれだけでは存在ではないが、その夢がやはりこの法を離れてはあり得ないし、法そのものは夢の當處に遍在せずには居らぬからして、夢が亦法そのものであつて嚴かなる實在である。是心是佛といひ理即佛といふはこれが爲である。それ故に六道生死の迷界も界外淨土の悟界も、すべて理具三千の實在であり、又同時に事造三千の實在である。いかに重々の階次はあればとて、その實在の波の打たぬ所はなく従つて水の潤を受けぬわけには行かぬ。これを即の字で顯したものである。○約修行等。修行の位次は情を轉じて智に進む足跡である。法そのものには階次はない。○約所顯現體。智によつて顯はさるゝものは法の事理である。それを所顯理體といふ。○是故等は六即の一段を結んで誠め勸むる語である。この下上慢と自屈の兩謬を出す。前述の如し。思之擇之は六即判位の理を能く辨へたならば兩謬を離れて圓修が成せらるゝから、之を思擇せよと結勸する也。

略明圓教位竟

【文科】圓教の行位の一段を總結す。

第四 觀心の 大綱

然依上四教修行時各有方便正修謂二十五方便十乘觀法。若教教各明其文稍煩義意雖異名數不別故今總明可以意知。

【文科】上來教相門を明したつたから、こゝより下は觀心門を明す。大科如左



【句解】然依上四等は、前に明した教相門に依つて觀心門が引き出される教觀二門の關係を叙ぶ。大體斯書は教相を明すのが一部の要旨であるから、觀心も教相の中に攝めて依教修行といふ。序講の教義を概説する下で叙べて置いた通り、天台は教宗であつてどこまでも教を重んじ、教が明になつた所に自然に修行がおこるので、教を外にし不立文字であつてはいつまでも

開解立行

修行が出来ない。たとへ修行が出来るとしてもそれは眞實の修行ではない。虚假の行である。眞實の修行はたゞ教相を明にし教に依つてどうしても修行をせずには居られぬといふは、充ちた智慧の眼が先づ開かれねばならぬ。若し教が明になれば、充ちた智慧が生れる。智慧があれば自然に修行をするやうになる。それを『摩訶止觀』では開解立行といつて居る。第一の行は開解である。それから第二の立行が生れる。斯書に就いていは、前來の五時八教の教相はやがて立行を生せしめずに置かぬ開解で觀心の初門である。これからはいよく奥の觀心門を開いて見せるものである。この下の所明はたゞ其大綱だけを示したけだが、この方便正修の二門は實に觀心の總要であるから、『摩訶止觀』の所詮こゝに盡きるので『止觀』には方便正修の二章を開いて特に力を入れて説いてある。○各有方便等は四教は一教々々に各方便正修があるといふこと。方便は行者がいよく修行するに先ちて注意すべき用心準備であるから方便といふ。正修に對していふ。この方便の準備が整つて始めて正修が滞りなく修せらるゝ。○二十五方便は『摩訶止觀』では、六方便章一章に詳しく明してある。十乘觀法は同第七正修章に明す。この方便正修の二章は止觀一部の眼目である。○若教教等は今の二十五方便はどの教の方便といふことになしに、一般四教に通じて明すと斷り書したものの。尤も十乘觀法は圓教に就いて明してある。○義意雖異は用うる行の仕方は同じものでも、それを用ふる人の意によつて別な意義を

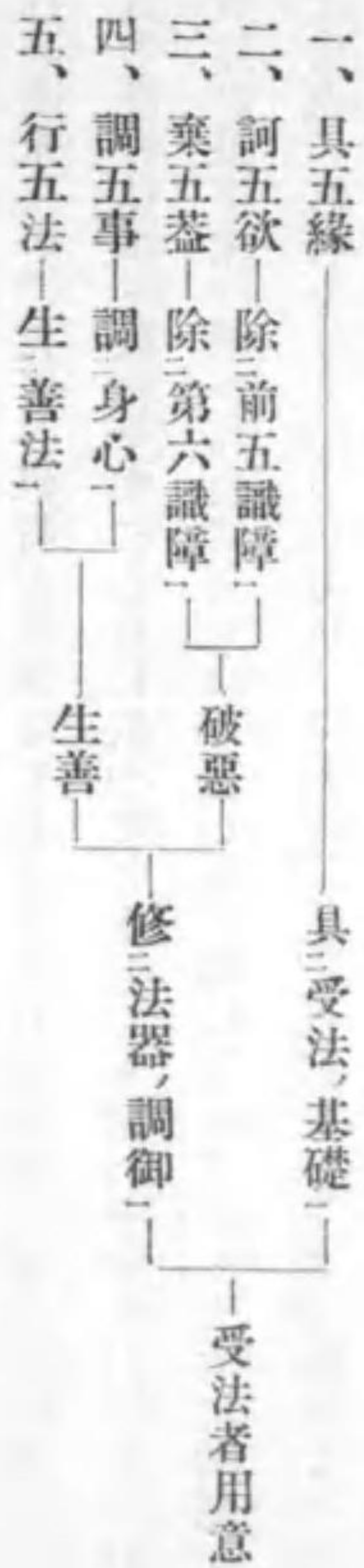
もつて来る。例せば同じく十戒を持つにしても、藏教の人と圓教の人とは別な心持であるから、戒そのものゝ意義が別異になる。

(一) 二十五方便

言二十五方便者、束為五科。一、具五緣。二、訶五欲。三、棄五蓋。四、調五事。五、行五法。

【文科】 以下二十五方便を明すに先づ分科を明す。

【句解】 五科は『摩訶止觀』四之一に於此五法三科蓋五法出大論一種五出禪經一種事是諸禪師立云々とありて、天台はこれらの經論によりてそれを整理し一般修行者の用意に具へたものである。而してこの五科は其の一をも缺いてはならぬといつて嚴守すべきを勸めて居る。私にこの五科の布列次第を案するに左の如し。



初明五緣者。一持戒清淨。如經中說。因此戒得生諸禪定及滅苦智慧。是故比丘應持淨戒。有在家出家大小乘不同。

【文科】 初に五緣を明す中一持戒清淨。

【句解】 五緣は受法の基礎條件で、この基礎を据えねばいかに立派な法器でもそこに法の家を建てることは出来ぬ。依つて方便の最初に案す。緣は資緣で受法を資くる緣(因ではない)となるものをいふ。○持戒清淨は戒を持つて自ら身を清淨に持することが出来る。清淨は持戒の持戒者に齋す自然の結果である。故に持戒清淨といふ。○經中説は遺教經なり。諸禪定は四禪八定のことで世間有漏禪をいふ即ち色無色界に遊ぶ因なり。滅苦智慧は生死の苦を滅す智慧で出世間無漏智である。戒は世出世の定慧を生ずる徳がある。三學中でも最も基本的のものであるから五緣の最初に擧げる。○在家出家等は戒の種類を擧ぐ。戒の種類は五八十具といひ凡そ四類あり、五戒八戒は在家の戒で其の中八戒は神聖日たる六齋日に限つて持つ戒である。十戒と具足戒は出家の戒にて沙彌沙彌尼は十戒を受け、比丘比丘尼は具足戒を受く。四分律本によれば比丘は二百五十戒・尼は三百四十八戒である。以上は小乗戒である。梵網戒の十重四十八輕戒・大論の十戒等は大乘戒である。これは在家出家男女を問はず一様に受くる戒である。

二衣食具足。衣有三。一者如雪山大士。隨所得衣。蔽形即足。不游人間。堪忍力成。故二者如迦葉等。集糞掃衣。及但三衣。不畜餘長。三者多寒。國土如來亦許三衣之外。畜百一衆具。食亦有。三。一上根大士。深山絕世。菜根草果。隨得資身。二常乞食。三檀越送食。僧中淨食。

【文科】五緣中第二衣食具足を明す。

【句解】衣食具足は如法に衣食を整へること。○雪山大士のこと涅槃經十三品に出で、釋迦佛の本生である。大士は深山に隠れて人間界の交を絶ち鹿皮を衣とし菜根草果を食して修道し少しも倦むとがない上根の修道者である。斯の如き上根の人々は木皮獸皮何でも手に入るものを衣として別に制定を設けない。○迦葉等。佛在世の大弟子は中根である。この人々は佛制に従て衣食住を調へる。即ち衣は但三衣だけで餘のものを用ゐぬ。○糞掃衣は世人の棄てたツギ切の類。それを拾ひ集めて佛弟子は衣に仕立て、被るのである。今日でも袈裟は切れをツギ合せて作るのも此佛制によるもの。○但三衣は僧伽黎(大衣)と鬱多羅僧(中衣)と安陀會(下衣)のと。大衣は二十五條十三條九條の別あるも、すべて說法又は城に入つて托鉢する時に被る衣。中

衣は七條で儀式に用ふる。下衣は五條で寺内で被る通常服である。○餘長は三衣の外の餘分の衣類のこと。それを畜へることを許されぬ。○畜百一衆具は必用の手廻品は一種一個だけは畜へることを許される。百一とは必ず百種に限つたことではない。尙ほ此には言ふてないが、更に下根の弟子に、尙ほその餘のものを必要缺くべからざるものは、衆中にそれを略つた後に畜へることを許されて居る。○常乞食は一年中托鉢によつて食を調へ其他を許さぬこと。○檀越送食は檀越の方から食を寺の方へ持來つて供養すること。○僧中淨食は僧伽の仲間て賄をして食を調へること。尤もそれには規定があつて、寺中の一定の場所を定めそこで炊事をするので、寺内ならばどこでもよいといふのではない。

三閑居靜處。不作衆事。名閑。無憤鬧處。名靜。處有三例。一衣食可。知。四息諸緣務。息生活。息人事。息工巧技術等。五近善知識。三。一外護善知識。二同行善知識。三教授善知識。

【文科】五緣中後の三縁を明す。

【句解】閑居靜處は住處を選定すること。○不作衆事等は閑靜の語義を釋す。閑はひまのあること靜はさしなくないこと。たとへ靜かな山里でも忙がしい仕事をして居る中ではいけない

い。閑な所でも市中の難關の閑ゆる所ならば住居するに適しない。閑にして而も靜なる處が修道者の住處である。○有三例衣食。前に例せば上根は深山中、中根は聚落を離れた林中、下根は伽藍の中をいふ。○四息諸緣務は緣は蚤緣で人事に關すること。務は業務職業のこと。それらをすべて息めて了ひ専ら道の爲に全生活を注ぐ。これに四あり一には生活即職業。二には人事即慶弔往訪等。三には技藝即ち書畫彫刻工藝等一切の趣味生活。四には學問即ち讀書究理等一切の研究生活。この四を息めるが息諸緣である。等の字は學問を含む。○五近善知識。内外の指導者に近くこと外護は道俗に拘らず、修道を外から間接に保護してくれる者。同行は同心同志の友人のこと。教授は直接に修道上の指導者。

第二訶五欲。一訶色謂男女形貌端嚴脩目高眉丹脣皓齒及世間寶物玄黃朱紫種種妙色等。二訶聲謂絲竹環珮之聲及男女歌詠聲等。三訶香謂男女身香及世間飲食香等。四訶味謂種種飲食肴膳美味等。五訶觸謂男女身分柔軟細滑寒時體溫熱時體涼及諸好觸等。

【文科】五法中第二訶五欲を明す一段。

【句解】 訶五欲等。後の四法は法器を調御鍛鍊すること。前の五緣を具備せば形だけの修道者たることを得るも、修道者自身即ち受法の器が法を受くるに堪えないならば道は進まぬ。依つて進んで法器を調へることに力を用う。その中先づ法器の汚れを除去せねば新しい法食は受け得られぬから、その汚れを除去するがこの五欲と次の五蓋である。五欲は五境を緣じて生ずる前五識の上の障で、五蓋は第六意識の上に生ずる妄念の障である。前は外界の刺戟に應じて生ずる衝動的な心的作用であり、後は更にそれに思慮分別を加へたより、複雑な心的作用であるから、先づ單純な心の障を取り除く、欲は五境を緣じて生ずる衝動的な心的作用である。○訶色。色は欲を生ずる根本であるからその根本の刺戟を遠けるを訶色といふ。それを除けばそれによつて生ずる心内の樂欲は自然に消滅する。○男女形貌は有情に就いての色。世間寶物は非情に就いての色。○絲竹は絃管の樂器。環珮は指輪首飾等裝身具のこと。其他は解すべし。

第三棄五蓋謂貪欲瞋恚睡眠掉悔疑

【文科】五法中第三棄五蓋を明す。

【句解】 五蓋は心内の法境(六境)を緣じて生ずる意識の妄作用で、正しい智慧の生ずる蓋となるから蓋といふ。○掉悔の掉は掉擧でハシヤグことで浮ツ調子のこと。その輕薄な所作をス

グあとから反省し後悔するが悔である。是非ハシヤイダあとにはそれを後悔するものであるがそれが道を塞ぐ蓋になるから除去する。○疑は狐疑すること。これに自を疑ふと師を疑ふと法を疑ふとあり、いづれも道を塞ぐ蓋である。

第四調五事。謂調心不沈不浮。調身不緩不急。調息不澀不滑。調眠不節不恣。調食不飢不飽。

【文科】五法中第四調五事を明す。

【句解】調五事は前に法器の錆(障)を取つたから、更に進んで磨をかけねばならぬ。第四第五は法器の生來の徳を磨き出すのである。その中第四はその用意方便に身心を調へ、第五は正しく徳を磨き出すこと。○調心は心を平正に保つやうにすること。それが爲には心の沈み勝の時は念を鼻端にかけ、心の浮き立つ時は念を下腹部にかけ、やうにするは其一例。○調身は如法に端坐し又衣服を被るにも緩急なきやうにするが其の方策。○調息は數息もその一例。以上身心息の三は禪の入住に就いて調ふべきである。次の調眠・調食は定外の心がけである。平常に眠食を調へねば禪に入ることが難い。

第五行五法。一欲欲離世間一切妄想顛倒。欲得一切諸禪定智慧門。故二精進。堅持禁戒。棄於五蓋。初中後夜勤行精進。故。

三念。念世間欺誑。可輕可賤。禪定智慧。可重可貴。四巧惠。籌量世間樂。禪定智慧樂。得失輕重等。五一心。念惠分明。明見世間。可思可惡。善識禪定智慧功德。可尊可貴。

【文科】五法中の第五行五法を明す。

【句解】行五法は進んで正しい心持を持つやうに努めること。○欲は樂欲で邪を憎んで正を愛する正しい感情を持つこと。○精進は道を倦まずに進む正しい意思を持つこと。初中後夜は六時中夜三を出し晝三を略す。これは怠り易い夜を出せば、これに比況して晝三のことは自ら顯はるゝ故に略するのみ。○念は思慮分別のこと。次の巧惠も同じく分別の智慧であるが、あれは隨機應變の思慮分別をいふ。念は正しい考をもつ知のこと。○一心は前の分別して選び取つた正しいものに専注して心を外に散らさぬこと。要するに五法は正しい知情意を持つことである。

此二十五法爲四教前方便。故應須具足。若無此方便者。世間禪定尙不可得。豈況出世妙理乎。然前明教既漸頓不同。方便亦異。依何教修行。臨時審量耳。

【文科】二十五方便の一段を結ぶ語。

【句解】此二十五法等は結勸の語。この二十五方便は四教の修行をする前方便であるから一つも缺かさずに勤めねばならぬ。若しこれが缺けるならば凡夫外道の有漏定すら得ることが出来ないから、出世間無漏の眞理を見る^レことがどうして出来やうぞと結勸する也。○然前明教等は。いよくこれを修する人々の爲に注意を喚起したもの。即ち前に明した二十五法を四教通じての型を示したものであるから。これを用ゐて修行する時には四教の教意が違ふから、その教その教の意を以てこの方便の型を使用せねばならぬが、それは何れの教に依らうともその時その時に望んでよく考へてやれば誤りはなからう。

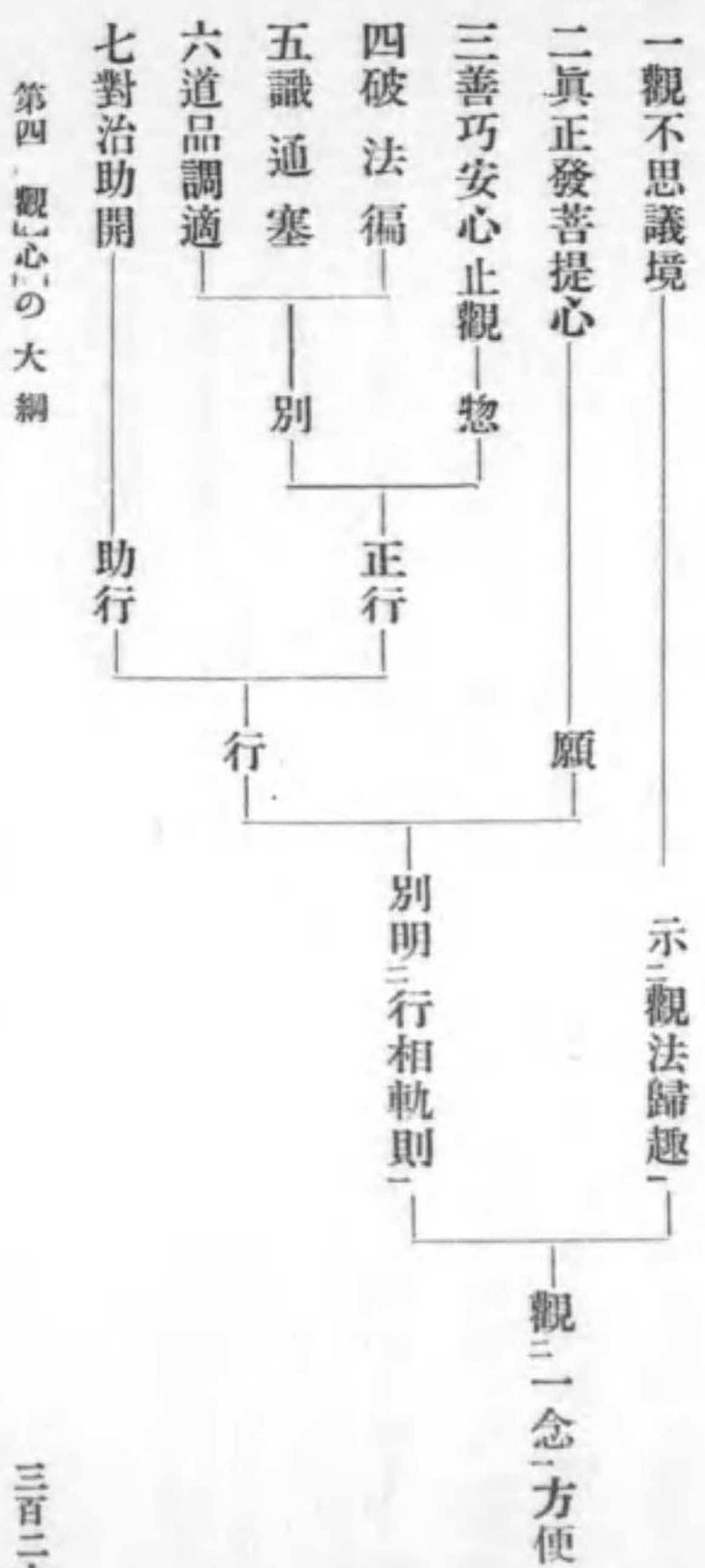
(二) 十乘觀法

次明正修十乘觀法亦四教名同義異今且明圓教餘教例此

【文科】以下十乘觀法を釋す。今は初に總じて標する語。

【句解】次明正修等。この下は先づ十法の名を總標して、その名は四教に通ずるが今此の下では圓教に就いて明す旨を斷つたのである。○十乘觀法は亦十法成乘觀法ともいひ、正しく一

心三觀の觀法をいふ。一心に三觀を觀する一つより外に觀法はないが、それに十法を開いて分けるのは云何といふに、われ／＼の迷はなか／＼深く且つ複雑であるから一通りのことでは夢は醒めぬ。種々の方法を廻して病に應ずる療法をせねばならぬ。よつて十法に分れる。元よりそれも結歸する所は一心三觀の外はない。そのことは次に掲ぐる圖によつて知るべし。十乗とは十の乗物ではなく十法成乘の略で十法がよつて一つの乗物が成就するの意で十乗といふ。乗とは法華譬喩品の大白牛車を指す。涅槃の彼岸に一切衆生をのせて運ぶ車乗は一心三觀の觀法である。それが十法によつて組み立てられてあるから十乘觀法といふ。十乘觀法の大要左の如し。



第四 觀心の大綱

八知 次位—約—凡聖位次—惣
 九能 安忍—約—五品位—
 十無法 愛—約—六根位—

進道上、用意

第十乘の次

圖示するやうに正しくの觀心の方法は前七法で、後の三法は觀心を修して道を進んで行く上に用意すべきことを列ねたものである。前七法は荒れ狂ふ無明煩惱の心を調御し眞理を體驗して行く次第を叙べたものである。即ち最初には一念心の上に直に三觀を觀じて不可思議の佛境界を體驗するのである。これは觀法の歸趣であるから最初であつて而も最後の方法である。餘の六法はこれを開き若くはこれに達する爲に設けらるゝものである。丁度藏教の三十七科の道品が最初の四念處觀に結歸すると同じ關係である。よつて 第一と、餘の六との關係は兩方面から考へられる。即ち第一法を觀することによつて第二が開け第二を觀するにより第三第四が出て來るといふやうに相生の次第として考へられる。この時は第一の觀法の中から餘の六が自然に展開するのであつて、それを攝めて見れば餘の六が第一の觀法の内容を表示して居るので、第一の觀法をする程の人なればこの六法が自ら具はり修せねばならぬのである。次に第一の觀法が成就したならば最早や煩はしく第二第三の行法を用ゐる要はない。よつて上根の人々は第一だけで佛境界を體驗して了ふ。(尤もその人にとつては別に餘の六法を取り立て、修せね

ども、自ら任運自在に餘の六法が修せられるのは前の關係にて言ふ通りである。)併し中根の人は第一だけでは充分でないから餘の六法を用ゐて第一の觀法を成就する。更に下根の人は前七法を修しても尙ほ佛境界を完全に體驗することが出來ない。その證據には途中で法悅の境を貪る暗禪者の仲間になり易い。それ故に後の三法に於いて進道の用意を喚起して、滯ることなしに道を進めるのが下根である。然れば十法は上中下の三根によつてそれ／＼所用の行法に多少が分れるが、この十法により萬機が普益されて一様に不可思議境に證入することが出来る。よつてこの十法は十方衆生を漏さず成佛に導く方法といふべきである。よつて『摩訶止觀』五、二、辯にこの十法を嘆じて。蓋如來^釋積劫之所^{菩提}勤求^{樹下}道場^{樹下}之所^{妙悟}身^身子^子之所^{三請}法^法譬^譬之所^三說^三正在^此乎^乎といひ、これが釋迦佛をして成道せしめた觀法であると同時に、法華經に於いて一切衆生皆成佛の法として開顯せられたのであると言つてある。依つてこの十法を大白牛車^譬譬喩^喩に説かれた^の車體^體其他^他の附屬品^品に配して、一切衆生の到彼岸の行法はこれに盡くる旨を示したのである。

一觀不思議境。謂觀一念心具足無減三千性相百界千如。即此之境。即空即假。即中更不前。後廣大圓滿。橫豎自在。故法華經云。其車高廣。

上根正觀此境

【文科】以下十乘觀法を明す中、第一觀不思議境。

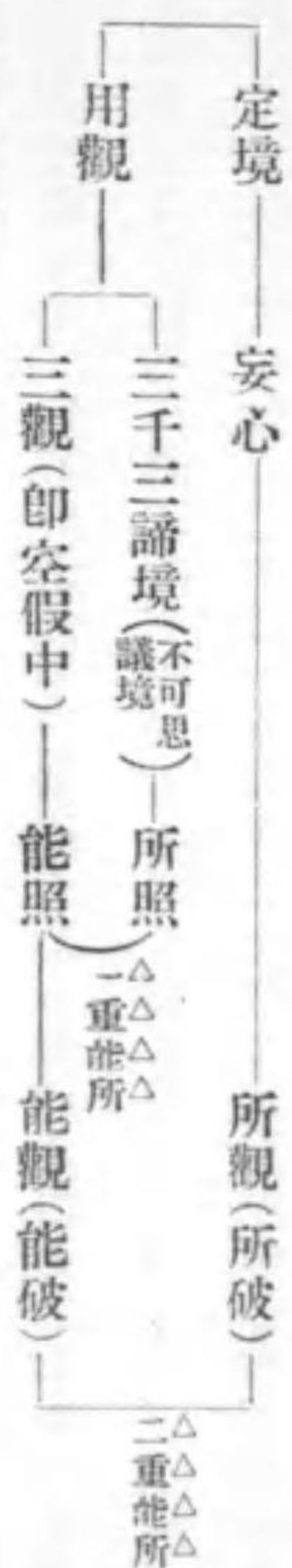
【句解】觀・不思議境は迷妄の心の上に不思議境即佛境界を觀する觀法ゆへこの名を得る。不思議境は前に圓教の下經に出た妙法の境界で、この下では三千性相百界千如といふがそれであるわれ／＼の迷妄の心から書き出して居る物質的な世界ではない。われ／＼の常識では見聞覺知することの出来ない、精神的な自由な絶待的な永遠性を持った實在の世界であるから不思議境といふ。この不思議境を觀するに就いて、何處どこにそれを觀するかを最初に決めねばならぬ。それを定境じやうきやうといふ。この境とは不思議境ではなく、それを顯し出す土臺となる所をいふ。達して見れば不思議境は法界に遍滿して居るから、どこを取つても不思議境ならざる處はない。従つて依正色心いづれの一點をついても眞實の觀智が進り出で、どこを押へても不可思議境の奥殿が開展する。一色一香無非中道である。併しその奥殿に入る爲めにはこの門からも入られ、どこをついても佛智の泉が出るにしても、いよく佛の奥殿へ入り佛智の泉を酌まんとしたならば、いづれかの一門を選び一地を定めねばならぬ。それが定境である。元よりそれを選定するのはまだ觀智が開けぬ前のことであるから、われ／＼の妄情の上で選定するのである。『摩訶止觀』にはこの所觀の境に就いて十境を開いて居る。陰入境界（迷の身心）・煩惱境・病患境・業相境・魔事境・禪定境・諸見境・増上慢境・二乘境・菩薩境これである。これらの諸種の場合に自由に佛

定境

用觀

境界を體驗するやうにならねばならぬ。その中初心の者は先づ陰入境を選定するのが最も觀じ易い。尙陰入境といへば廣いが、その中迷の身を棄て、心を選び、心法にも心王心所の別があるから、心所を捨て、心生を選び、心王にも善惡心もあれば無記心もある。心王は心の主であるからこれを取り、力の弱い無記心は力の強い善惡心よりは觀じ易いからこれを選取して先づ最初にこの無記心即ち介爾の妄心（介爾心は吹けば飛ぶやうな弱々しい心）を取つて所觀の境と定む。尤もこれに限つたことではないから適宜に定境すべきである。今斯書には一念心（一念心といふは介爾の妄心のこと。かく所觀の境が定まればいよく觀心にとりかゝる。それを用觀といふ。用觀は即空即假即中の三觀である。これが妄心を照しその妄を破る能照能破の觀智である。この觀智はどこから生ずるかといふに善知識に値ひて教を聞く時にそれによつて觀智が與へらるゝ。勿論それはまだ概念的の智慧に過ぎないけれど、その智慧そのものは法性の自體から生ずる智慧で常に三諦の理を照すのである。根柢の深い智慧である。この智慧がその祖上に妄心を置いて、その妄を破りその夢を破つて、妄心の當體不思議境である眞理そのものであると自覺せしむるが、この觀法である。この觀智は眞理から生ずるもので而も眞理を照すは、丁度太陽から光を放つその光が常に太陽を照すが如くである。その光によつて闇黒を照す時、闇が去つて闇の境がそのまま、光明境に變じて太陽の領土となるやうに、介爾の妄心はその三觀の智慧によつて照された時に黒

闇を破つて佛境界たる不可思議の妙境に融け合ふて了るのである。是を兩重の能所といふ。



○具足無滅は三千の諸法が一念の心に本來圓具して一法たりとも缺くるとはしない。○三千性相百界千如とは、法性そのまゝの世界の融攝無礙なることを顯す。三千は前の如し、性相は理體(性)と事象(相)をいふ。十如是中の最初の二である。百界千如は三千といふに同じ。十界は一界毎に十界を具するから百界である。又そ、一界毎に十如是をもつて居るから千如になる。この三千性相百界千如は不可思議境である。佛境界である。實在の世界である。この世界を迷妄の一心の上に體驗するのである。○即此之境は前の三千の妙境の當體が三觀の智慧である。この境から流れ出でたものが三觀であると示す爲に即してといふ。即は當體全是を顯す。○即空即假即中の三觀をいふ。(實參照)眞實の智慧である。迷妄の妄分別を破つてこの佛知見を開覺するが觀法の歸趣である。○更不前後は三觀といへばとて次第前後して生ずる智慧ではない。前に不縱といふに同じ。これに對して不横なること勿論である。よつて亦不二時といふ語を加へて見るべし。今は略するのみ。○廣大はその智慧が遍一切處なることをいひ。圓滿は一法に

一切法を具へて充實するをいふ。横は十方豎は三世に通貫して到らざる限なきをいふ。自在はその智慧が情を離れて何ものにも礙げられぬこと。○法華經云は譬喻品三車一車喻の大白牛車を叙する文(科註二之上)で、これを十法に配して十乘觀法が唯一佛乘(大白牛車)なることを顯す。源は『止觀』七之四註に出づ。其車高廣は車體をいふ。高は豎に三世に徹するに喻へ廣は横に周遍法界なることを譬ふ。○上根正觀等は上根は正しくこの觀法で觀成就することを言ふもので、中下根がこれを修せぬといふのではない。

二眞正發菩提心。謂依妙境發無作四弘誓願。憫他上求下化。故經云又於其上張設幢蓋。

【文科】 第二眞正發菩提心を明す。

【句解】 眞正發菩提心は四弘誓願を發すこと。眞正は前三教と簡別する語。即ち前三教では迷情を固めた發心であるが、今は迷情の夢が破れ本有の智慧が湧いて來た所に發す誓願である。凡心と佛心と到底同日に論すべきではない。○依妙境發無作等。妙境は前の不思議境をいふ。この不思議境を觀するに依つて誓願を發するのがこの眞正發心である。われらはこの境を知らなかつたから、迷の九界と悟の佛界とを別の世界のやうに思つて來た。従つてその九界をすて、佛界に入らねばならぬとばかり考へ、その爲に發願も立て修行もして來た。しかしそれはたゞ

いよ／＼苦惱を増すばかりであつた。然るに今や不思議境を観るを得た。これによれば今まで迷のみの世界と考へて來た九界がそのまゝ佛界であり、又悟のみの世界と執じて來た佛界も亦そこに九界を攝む。この安心の直下に佛心(今までは遠き所に求めて居た)が開展されて居る。その佛心はあらゆる迷の衆生を攝め取つて捨てたまはぬ。是心が是佛である。何といふ妙境であるか。翻つてこの安心を見るに無明長夜の夢なかくに醒めず、いつ迄もこの妙境に悟入せんと欲しない。何といふ愚心であるか何といふ悲しいことであるか。この自覺とこの悲痛とが現實の夢を破つて邇にある道を得ねば措かぬと奮ひたゞしむる。この己を憫む心はやがて他を憫む心である。自己の迷夢を悲しむ心はやがて一切衆生の迷夢を痛ますには居られぬ。こゝに一切衆生と共に佛道を成せん、一切衆生と共に迷夢から醒めて不可思議境に悟入せんとする誓願が發起せらるゝ。而してかく發願せず居られぬ様に仕向けた力は妙境それ自らの力である。妙境を自分の上に觀することによつて始めて發し得た誓願である。それを無作の誓願といふ。發さうといふ作爲の念なしに發るは無作である。發さざるを得ずして發つた行爲は最も勝れた價值を有する。○四弘誓願のこと前の如し(真參照)○憫己は妙境によつて照されて己の醜い相が知られたから自惚心を離れて己を悲み痛むのである。憫他は九界に即する佛界の妙境を見出さしめられたから、他の九界の衆生を憫れまらずには居られぬ。○上求菩提は己を憫むから生ずる自覺

である。下化衆生は他を憫む心の發露である。○轆蓋は大白牛車の車體の上に掛けてある帛の蓋即日覆の幌である。車中の人を覆ふ道具故に一切衆生を憫む誓願の喩としたものである。

三善巧安心止觀。謂體前妙理常恆寂然名爲定寂而常照名

爲惠故經云安置丹枕枕車內

【文科】 第三善巧安心止觀を明す。

【句解】 善巧安心止觀は善巧に心を安んずる止觀にて、われらの心は時には馬の如く荒れ狂ひ時には牛の如くに鈍重に沈んで御し難い。この心を時に應じ宜しきに隨つて巧みに調御して常に平正の心を保つが善巧安心である。かく常に心の落付きのあるやうにするはたゞ止觀より外はない。即ち善巧安心が爲の止觀であると同時に、善巧安心は即止觀である。止觀は散亂の妄念を起らぬやうにするが止で、眞實の智慧を思ひ浮べるが觀である。而して徹底的に妄念を息むる止はたゞ前の不可思議の妙境を觀することによつて成就する。又觀も亦同様である。不思議境はすべての妄念から離れ終つたもので寂靜の至極である。この境の行く處いづこにも雜音の響を許さぬ。すべての雜亂を化して寂靜に化し去らねば措かぬ徳用を持つて居る。それ故にわれらの胸はいかに狂ふとも一度この妙境を念すれば、忽ちにして靜かなること林の如くなつて了ふ。又不可思議境は其體智慧の光明である。すべての物の眞を徹見して少しも蔽ふこと

安心はた
止觀

のない全智である。これによつて妙境の光明の到る處少しの虚偽も許されない、善惡淨穢があらりのまゝの相を現はす。われらいかに愚痴闇鈍にして偽なるを捉んで真とし穢を以て淨とするとも、一度この妙境の智慧に觸るゝならば、忽ちその妄想顛倒の智慧をすてゝ眞實の智慧海に入る事が出来、進道の方向を見誤るゝことはない。然れば機に臨み變に應じて善巧にわれらの心を安んずるは唯一の妙境を念する止觀によつて成就する。○體前妙理の妙境は妙理である。妙理に體達するが止觀である。○常恒寂然は永遠の靜寂である。靜寂は法性そのものゝ本有の徳用である。人の睿智によつて創造せらるゝものではない。○定は止慧は觀。定慧即止觀である。天台は定慧双行を一代の標語としてそれに心血を注いだ。それが『摩訶止觀』に開顯した前代未聞止觀明靜の行法である。それは妙理妙境の自らの徳用である。その徳用をわれらの内心に體験することが、生死を超越していかなる境地にも動せざる善巧安心の唯一道である。○寂而常照はすべてのものゝ眞を徹照する眞實の智慧をいふ。時に若し斯の如くなれば第一の觀法と異なることなきやといふに然らず、第一はたゞ一念の心を所破とする觀法の常道である。今は心の浮沈を御する觀法で或時は止を用ひ或時は觀を用ふるといふやうに、臨機の處置を説くのである。○丹枕は車内にある赤色の枕、即身首を凭せかけて動搖させぬやうにする道具なればこれを安心止觀に譬ふ。

四破法徧謂以三觀破三惑三觀一心無惑不破故經云其疾如風。

【文科】四に破法徧を明す。

【句解】破法徧はすべての顛倒妄見を拂つて剩さないこと。法は顛倒妄見が「これだ」といつて妄りに捉んで居るものゝと、いはゞ概念である。妄見の中だけには客觀的確實性を持つて居る實法であるが、それは法性の智慧で照して見ると妄見の影なる主觀的概念に過ぎない。その妄想がつき纏つて居るからなかく善巧安心が出来ぬ。よつて今はその妄想を破盡するのである。概念の殻を打開するのである。徧といふは一切である。われゝの概念の世界の全體を指す。これが眞如だこれが佛だといふものも亦妄想の所見であるから破せらるゝゆへ徧である。われらの概念の世界は要するに妄想顛倒の心より開展して居るのであるから、その本源たる一心の顛倒を破するのが一切を破することである。よつて徧といふ。○以三觀破三惑。一切顛倒法は要するに安心で、安心は即見思塵沙無明の三惑である。これが所破のものからで、それを破する能破の智慧は法性そのものを用であり三觀である。三觀の智慧で三惑を破する時に妄想の世界の全體が破せらるゝ。○三觀一心は。前に三觀といったが、それは空の次に假中と次第に觀智を生ずるのではなく、その三觀は圓融渾一の智慧で一心の上に攝めらるゝ智慧であることを顯し

て三觀一心といふ。かゝる一心中の三觀を以てすれば一心の迷妄が破られる。一心の迷妄が破られた處に一切の迷妄の夢がすつかり、醒めて了ふとを無惑不破といふ。○經云等は前に叙ぶる大白牛車を述する下の文で、車乘の速力の疾いことをいふ。一心三觀の智は其勢猛利で同時に一切の妄想を破盡するから、速力の疾いことに譬へたものである。

五識通塞。謂苦集十二因緣六蔽塵沙無明爲塞。道滅滅因緣智六度一心三觀爲通。若通須護有塞須破。於通起塞能破如所破節節檢校名識通塞。經云安置丹枕車外。

【文科】 第五識通塞を明す。

【句解】 識通塞は道に導入するものと、道を塞いで妨をするものとを識別して、その通のものを守り立て、増上せしめ、その塞のものを遠ざけるのが識通塞である。前の破法徧では遮二無二妄想を拂はんとしたが、それでも尙法性に心を安立せしむることが出来ないものは、更に反省して通塞の見分をし守るべきものは守り破すべきものは破するのがこの第五の觀法である。然らば通塞とは何物ぞやといふに一般的にいふと特別の場合に就いていふと二途がある。○苦集等は一般的に塞の法門を擧げたもの。道滅等はそれに翻對して通の法門を列ねたのである。

苦集は惑業(集)苦にて道を塞ぐもの。十二因緣は迷の因果なれば塞である。尤も苦諦集諦十二因緣教は眞理を明したものでなれば塞ではない。六蔽は六度の反對で眞智を蔽ひ隠すもの。慳貪・破戒・瞋恚・懈怠・亂想・愚痴をいふ。滅因緣智は十二因緣の理を觀する智惠のこと。○於通起塞等は特別の場合に就いて通塞をいふ。もと通塞は心に就くもので理に契ふ心のすることがすべて通であり、理に違する心のすることはすべて通である。前の苦集が塞といはれるのは違理の心から生ずるものであるからで、道滅等は順理のもの故に通といはれた。然るにわれ／＼の心は道滅といふ通の法門を持ちながら、道を塞ぐ道具とすることが出来る。例せば八正道を修する行者が、若しその心にそれを修するといふことを誇つて、己を高ぶり他を輕んずるならば、その八正道は却つてその行者の眞理の道を塞ぐものである。かゝる場合には八正道を棄てねばならぬ。八正道の法門が悪いのではないが、それを持つ心が理に違するから惡となる。これは特別の場合である。今於通起塞とはこれをいふ。○能破如所破とは前の例に就いていはゞ八正道は能破の道である。それを以て惡いことをするからその能破の道をも所破として斷破して了ふこと。これはたゞ圓教の一心三觀の觀法でも若しそれに滯らば所破とする。これに反して塞の法門であつても若しそれを持つ行者の心が理に順することが出来たならばそれは通となる。例せば貪欲は塞法ではあるが、この貪欲を機緣として無上道に入るならば貪欲即是道となつて

通法となるから所破が能破のものと轉ずる。但し今の文はこれを略して言はぬ。○節節檢校は時々節々に由斷せず反省して通塞をしらべて誤らぬやうにせよとなり。○安置丹枕は前の善巧安心止觀に喩へたと同じく赤塗の枕であるが、これは車外の枕で車が停つて居る間支へて置く枕木である。これは車の動いて居る間は用事のないもので、車が停るとき入用である。今識通塞は行者が觀心の歩をどめていはゞ觀法の車體を檢査することであるから。又觀心の歩を進め出したらばこれを用ふるわけには行かぬ。よつてこれに譬ふ。

六道品調適。謂無作道品。一一調停隨宜而入。經云有_二大白牛_一等。已上五中根。

【文科】第六道品調適を明す。

【句解】道品調適は道品を程よく修すること。道品は前の藏教道諦の下に出でたる四念處等三十七科のこと。調適は調は三十七科の法門に熟達すること。適は時宜に適合するやうにすること。道品に達すれば自ら時宜に適ふ法門を用ゐることが出来る。されば時宜に適つた道品を程よく修しなすがこの道品調適である。○無作道品は無作は圓教の標語で圓教の道品のこと。圓教の道品は妙法を念することによつて修せらるゝ道で、妙法自體の徳用である。それ故行者

無作道品

の修道造作の念を離れて而も修道造作せらるゝから無作の道品といふ。然れば名は小乗教と同じであつても實質は全く別である。例せば四念處觀でも身受心法の四境の上に即空即假即中の三觀を修するが圓教のそれである。斯の如き圓教特有の三十七科の道品〔止觀〕七之科以下詳述可_二披見_一を無作道品といふ。○一一調停は三十七科を一一に調べて亂雜にならぬやうにすること。それはこの法門に習熟することによつて出来る。これは調の字を釋す。○隨宜而入は適の字を釋す時宜に適應する法門を修して悟入すること。○大白牛に譬へるのは、觀心の車體の動かぬのを進めるのは道品を修する力に依るから、それを今車を引く牛に譬へたものである。○已上五中根は第二以下第六までは中根人が修證するものといふ。これは勿論一往の配當のことで必ずしも前後を修せぬといふのではない。次下下根も亦然り準じて知るべし。

七對治助開。謂若正道多障。圓理不開。須修事助。謂五停心及六度等。經云又多_二僕從_一。此下爲_二下根_一。

【文科】第七對治助開を明す。

【句解】對治助開は助行を修して障道の重障を對治し、正觀を助けて妙理を開かしむるをいふ。蓋し障重きものは正しく妙理を觀する前六法を用ゐてもまだ妙理を證ることが出来ぬ。そ

れはその人その人に特別な病のある爲である。それを對治する爲に暫く淺近な藥を用ゐて先づその病を治し。それからいよく妙理を觀じて證るのである。○事助は妙理を觀する理觀に對して、その根柢の理に觸れない觀行を事といふ。助は理觀の正行に對して五停心觀六度等は助行である。○多・僕・從は馬丁等の從者のこと。助行なれば從僕に譬ふ。○此・下・爲・下・根は「止觀大意」にはこの第七までを中根とし第八より下根とす今と小異。根柢まち／＼なれば一概すべからず。

八知位次。謂修行之人免増上慢故。

【文科】 第八知位次を明す。

【句解】 知位次以下の三法は觀法にあらすして觀心の車を進めて行く道の用意である。即ち道に車の進む障礙となるものがあるからそれを取り除けるをいふ。其の中これは初心の行者の用意を明す。初心の行者の注意すべきことは菩薩の行位次第を能く承知して居ること、即ち今の知位次はそれをいふ。初心の行者は少しばかり修行して得る處があると、得てそれを誇大視してもう證つて了つたやうに思ひ込むものである。この増上慢が折角の修行者を魔道へ墮せしむる。それを免るゝ爲に位次を知つて真似の別未證と已證との異をよく辨へねばならぬ。大體この位次は已證の佛でなければ知れぬとであるから、已證の佛が未證の行者の爲にその道筋を知らせてくれたものであるから、この道案内を便りに進むのが後進の取るべき賢い方法である。

九能安忍。謂於逆順安然不動策進五品而入六根。

【文科】 第九能安忍を明す。

【句解】 能安忍は五品位の行者の用意。内外の誘惑に打ち勝ち能く耐え忍ぶこと。○逆順安然是逆順二縁に於いて動せざること。逆縁は内障で順縁は外障をいふ。即ち五品位に入れば觀行漸く進むに従つて、思ひがけぬ宿業宿惑が定中に顯れて禪定を礙げる。それは逆縁の内障である。次に觀行の徳が外に顯はれるから五品位の行者は、世に推重されて名聲が外に聞ゆる様になり。四方から囑請され説法を餘儀なくさせられるやうになる。かくて弟子眷屬が周圍を取り巻き、名利の奴となつて身動きもならぬやうになり自行を進むることが出来ない。これが順縁の外障である。これを振り切つて道に進むのが安忍である。『止觀』七之四評に曰く。若し名利眷屬外より來り破らば此の三術を憶ひて齒を齧んで忍耐せよ。千萬請すと雖も確乎として抜き難し。讓らん哉。隠れん哉。去らん哉。若し煩惱業定見慢等内より來破せば亦三術を憶へ」と。これ天台大師が自らの苦き經驗を叙べらるゝもので、大師は屢々山に入りて而も永く止ることを得ず。これが爲に魂を累するものが多かつた。大師晩年に弟子に語つて。我れ弟子を領することがなかつたならば六根位にまで進むべかりしに化他の爲に五品位に止まらざるを得なかつた」と述懐され、且つ弟子を誠めて徒らに弟子を領することなからんことを遺命され

たといふ。今の能安忍は正しく大師がわれらへの遺命である。

十無法愛。謂莫著十信相似之道。須入初住眞實之理。經云乘是寶乘。游於四方。直至道場。

【文科】第十無法愛を明す。

【句解】無法愛は六根清淨位(十信位)の行者の用意。この十信位は所謂相似即位でモウ一息で眞如法性を開覺する位であるから、その所證もいよく勝れて身心の自在を得ることなれば法徳に浸ること深く法悦を感ずること盛である。その法悦に住著する法愛の念に止り易いのがこの位の弊である。よつてその法愛の念を離れて小成に安んずることなく、進んで眞の法悦境に向つて精進することが此位に於ける用意である。この用意が充分であれば進んで初住位に入つて眞實の妙理に證入し、不思議境がまのあたり開展される。初住位に入ればもはや眞實の妙理が眼見されるから、大船に乗つた如くに、何等の檣棹を加へずして自然に大涅槃の境に達することが出来る。よつて十乘觀法には初住以上の菩薩の用意を擧げて居らぬ。○經云はやはり大白牛車を説く一聯の經文である。是寶車は大白牛車即ち一佛乘の妙法妙理である。游於四方は初住に入つて菩薩が任運に十住十行十廻向十地の四十位の行程を難なく超えること。直至道

場は大涅槃を證る道場に到り著いて妙覺果滿の佛位に登るをいふ。

第五 總 結

謹案台教廣本抄錄五時八教略知如此。

【文科】上來に教觀二門を明し終れるを以て、以下總結の辭を叙ぶ。其中初正しく總結。

【句解】謹案は今や筆を擱んとするに當つて端を改むる詞。○台教廣本は三大部・五小部(觀音玄義・觀音經疏・金光明玄義・金光明文句・觀經疏を五小部といふ)等の天台の章疏をいふ。此書主として『法華玄義』に據るも兼ては其他の疏を涉獵して成れるものなること本文の上に歴然たり。○五時八教といひて觀心門をいはざるは、本書の所詮教相門を明すにありて、觀心はその中に攝めて明すが爲なること前叙の如し。

若要委明之者請看法華玄義十卷。委判十方三世諸佛說法儀式。猶如明鏡。及淨名玄義中四卷全判教相。

【文科】後學の爲に教相の本據を指示す。

【句解】 若要委明等の下は。委しく教相を明らかにせんと欲する者の爲にその本據を擧げて、法華玄義と淨名玄義の二部を指示して居る。蓋しこの二部は五時八教を明すこと最も詳細を盡して居るからである。○淨名玄義四卷は天台撰述の『四教義』六卷のこと。「淨名玄義」を別卷として『四教義』として行はるゝとは古い時代よりのことと判溪『文句記』一語に云々して居る。然るにその『記』にも六卷といひ現流布本も六卷なるが、今四卷とするは當時の調卷四卷となれるものならん。○十方三世諸佛等。元より五時八教は釋迦教の說法儀式であるが、釋迦佛のなし給ふ所はそのまゝ一切佛のなし給ふ所、いかなる佛も同證であり又同勸であるから十方三世諸佛云々といふ。これ釋迦教の唯一眞實なることを顯すのである。

自從此下略明諸家判教儀式耳。

【文科】 終りに諸家の判教を略することを断る。

【句解】 諸家は天台以外の諸家のこと。天台以前と以後とに通ずる語なれば、いづれも解せられ又前後を一括した語とも解せらるゝが、以後の諸家の判教ならば慈恩(法相宗)道宣(律宗)賢首(華嚴宗)の餘宗の判教のこと、天台宗の教相と縁遠きものなれば、著者がこれを併べ擧げんとするのではあるまい。これに反して以前の諸家は『法華玄義』十上に列擧して一々これに天台が批評を加へたる南三北七十家の判教である。この判教は直接天台の判教の素材となつ

たもので、天台も其意を得ばすべて諸家の判教を取つて差支ないといつて居るから、これら諸家の判教は充分に理解せんとする者にとつては是非研究せねばならぬものである。されば今こゝに諸家といふのは南三北七の諸家を指したものであらう。

左の一文は予の舊稿であるが、偶々著者の略したるものを補ふ便ともなり、又一つには天台判教を知るの一参考ともならんかどて、こゝに【餘説】として輯むることにする。

【餘説】 天台以前の判教と天台の五時八教判。釋尊所説として信せられて居る数多い經典の上は種々雑多の教義が含まれて居る。若し釋尊を能く了解しやうとするならば、それらの教義の上にそれ々の意味を見出し又それらが皆一の體系をなして居るものであることを了知せねばならぬ。判教はこの要求に應じて生れたものである。今知られて居る一番古い判教論は訶梨跋摩の『成實論』の二諦説と、龍樹の『中論偈』の二諦説である。勿論これは教判論の原始的型式で後世の判教のやうな備つたものではないが、阿含經等の因縁假有説と般若經等の諸法皆空説との間に調和を見る爲に、小乗教は世俗諦の方便説で大乘教は第一義諦の眞實説であることを明したものであるから、これらの二諦説は最も古い判教論と見て差支はなからう。次に印度の判教論として興つたのは中觀瑜伽兩宗の論證當時に用ゐられた、戒賢の有空中の三時教と智光の心境俱有・境有心空・心境俱空の三教判とである。こゝへ來ると説時即

前に説かれた教は方便で後に説かれたは眞實であるといふ考が教判論の上に生じて来た。此の考は未だ龍樹や訶梨跋摩の上には見ない事であるが、これが支那の教判論の上に著しい發展を見たのである。元より此の説時を以て教判の一要素としたのは、印度よりは支那の方がズツト前である。支那では教判論は盛でとも印度の比ではない。これには理由のあることである。後漢明帝永平年中に公式に佛教が傳來してより、天竺西域から多くの梵本を輸入し來り迎接に違のない程であつた。其の經典にはいろいろの教義が宣べられてあり、中には甲の經と乙の經との矛盾撞着が少くない。實に望洋の歎があつた。支那の佛者の前へは譬は、玩具宮を投げ出したやうに、印度で永い歴史の間に築き上げられた經典が一時に不次第に輸入された。そこで支那の佛者はこの歴史を持つて居る經典を歴史を見ずに釋尊一代五十年の説として受け入れるべく餘儀なくされた。此に於いてか、これらの經典をいかに整理し按排するかといふ問題は、支那佛教殊に天台以前の佛者の没頭した宿題であつた。この故に六朝時代の佛者は教判論に力を入れた。淨影は『大乘義章』の開卷第一に教判を明し、嘉祥は其著『大乘玄論』に教述義の一科を置きて辯じて居る。もと教判そのものは釋尊の説教を整理することであるが、その教説を整理することはすぐ釋尊をいかに観るかといふことに直接觸れて居る。教判の上に其人の思想内容が顯されて居り、又自ら其人の信仰の立場を明にす

ることになるので、後世になつてから教判は立教開宗の一要件として取扱はれて来た。これは無理もないことであるか。その教判當初は立教開宗の目標として教判を立てたのではなく、教界に漲つて居る宿題に迫られてその時代の解答を餘儀なくされたのであるのが教判を立てる根本的動機である。

天台以前の教判論がどんなに發展し來つたかといふ歴史的敘述をするのが順序であるが、今それを略して、直ちにどんな教判が立てられたかといふ内容の研究に移らう。天台以前の教判は多種多様であるが、凡そ二つの潮流がある。一は經典の種類によつて區別を見るのと二には經典の内に顯はされてある佛化導の精神によつて凡ての經典を同一價值として見んとするのである。前者は經典に顯はれた所から釋尊を觀察しやうとするので、後者は釋尊から經典を見やうとするのであるが、共に雑多の教説を一佛所説として考へやうとすることは同様である。次に前者に又二類があり一は説教の形式によつて見るのと二は教義の内容によるのである。亦その形式による中に二類が分れ、一は説教の時節に就いていふのと二には説教の方法によるのである。これを總括すると次の四類となる。

- 一、説教の時節によりて一代教を分判す。
- 二、説教の方法によりて一代教を分判す。

三、説教の内容によりて一代教を分判す。
四、佛化導の精神より一代教を統一す。

此四類に天台以前の主要なる教判を配属すると次の如くなる。(南三北七は天台が『法華玄義』に挙げたものである)

一、成實學派の四時教及五時教・笈師の三時教(南)宗愛法師の四時教(明)柔・次二師の五時教(北)

二、南北共通の三種教相。

三、地論學派の四宗教及五宗教等・眞諦の三輪教・淨影の二藏・流支の二教(北)光統の四宗教(北)

四、北地禪師の一音教(北)嘉祥の一道教。

一は大體に於いて成實學派の教判である。宗愛は傳未詳であるが『法華玄義』に梁の莊嚴寺僧曼(成實學派の人)が之を用いたとある。柔・次は成實學派の僧柔・慧次のこと。笈師の事はわからぬが恐らく成實學派に屬する人であらう。何となれば成實學派は主に南方に行はれた宗旨であるのと、南三中餘の二師が共に成實學派の人で、而も略ぼ同じやうな説時による教判であるから推察して笈師も亦成實學派の人師であらうと思ふ。この成實學派の教判も大同小異で區々になつて居るが、宋の劉虬の五時教が最も能く整備して居るから代表的に挙げやう。これは

『大乘義章』一初及び『三論遊意義』による。



二の三種教相は南北共通の所談で頓・漸・不定の三教である。『法華玄義』十上に出づ。

三の菩提流支・惠光僧統・護身寺自軌・耆闍寺安慶及淨影寺慧遠は共に地論學派の人師で、眞諦三藏は攝論學派の人である。それ故此の類の教判は地論及攝論學派即ち主として北方に行はれた佛敎の所用である。四宗教とは一因緣宗(毘曇)二假名宗(成實)三不眞宗(般若)四眞宗(華嚴)である。五宗は更に法界宗(華嚴)を加へ眞宗を涅槃經に配したものである。六宗は四宗の外に更に常宗(涅槃)圓宗(華嚴)を加へ眞宗を法華經に配したものである。

四の北地禪師は恐くは羅什であらう。三論學派の嘉祥は『中論疏』十本『三論玄義』等に於いて

て羅什の「音教」を受けて大小乘經顯道無二といつて一道教を主張し、『中論疏』一本には如來從得道夜至涅槃夜常說中道といつて、一切の經典は釋尊の全體を詮顯したもので、すべて中道の開說ならざるはないと絶對的教判論を主張して居る。この旨を明にしたのが三輪判である。

已上天台已前の教判の内容を調べて見たが、これによると天台の五時八教の判釋が全然其の基礎をこれらの諸家の上に置いて居ることが知れる。即ち五時教は「一に化儀四教は二に化法四教が三を換骨脱胎したものである。このことは既に天台自身も承認して居る様である。『法華玄義』十上辭に南三北七を評破し了つて若除其病如上所說若不除法といひ。又用五味則次第如文といつて全然南地師の五時教を採用すと言ひ、また『四教義』(陽八地)には問曰四教義與地論人四宗義同不……今不依四宗立四教意乃多途云々と、四教は四宗に依らずとあれども、地論の大師の四宗と化法四教とを併べて論ずる所に其意を察すべし。尤も藏教通教の名目は劉虬の三乘別教三乘同教に負ふ所の多いことは彼此對照して可知。又化儀四教が南北共通の三種教相に據れることは『法華玄義』十上、十に大綱三種と標して頓漸不定此三名同舊義異也とあるので明かである。これによつて左の如き交渉を見ることが出来る。

天台と諸家の交渉



そして五時教と四宗教とが六朝時代の代表的教判であつたことは、淨影嘉祥の章疏にいつも此の二を取り出して批判して居るのでも察せらるゝ。

かく天台の五時八教が六朝時代の代表的教判論を接合したに過ぎないならば、天台教判の價値は半ば滅殺されるではないかといふに、決して然らず。天台教判の價値はその形式にあるのではなく其精神に依怙して居る。即ち舊き型の中へ新しい生命を吹き込んだ所にある。その新生命とは釋尊化導の精神である。天台の企てた所は五時八教によつて遺憾なく佛の自内證の悲智を打出さうとしたので、そこに價値が存する。成論や地論の人々が試みた所はこれに反してたゞ經典の外部的研究によつて釋尊の教説に秩序を立てやうとした。そこで經典研究の標準は小さい自己の智慧であつた。小智を唯一の標準として大きな釋尊を觀やうとすることが抑々根本的誤謬である。この敬虔の念を缺いた教判論は不知不識の裡に大きな誤謬に陥つて了つたのである。即ち佛金口の説法に對して是非の批判を加へ、ある經典をば不真虚誑を宗とするといふやうな潜越謗法の過失にすら墮した。勿論諸家とても教判を試みる最

天台教判の價値

初からさういふ意思を自覺したのではなく、數多い經典に系統脈絡を探りあて、一佛所説として信じたといふにあつた。そこに小智を以て佛經を裁かうとする恐ろしいものが潜んで居ることに氣が付かなかつたのである。即ちそれら諸家教判の弊は釋尊化導の精神を度外してたゞ所説の經典の上に眼を注いだ所にあつた。此の弊に注目したのは當に天台獨りではなく淨影と嘉祥とがある。淨影は『大乘義章』第一に五時教の堅判を破斥して聲聞菩薩の二藏判を主張し、嘉祥も亦『大乘玄論』第五に於いて、五時四宗の兩判を難破して大小顯道無二の絶對判を主張し又二藏三輪の判をなした。嘉祥の三輪判は稍見るべきものがあつたが、まだ完璧の域に達し得なかつた。嘉祥と同時代の先輩であつた天台が此弊を剔り出して教判本來の精神を最も能く發揮した。『法華玄義』十上初前代諸師或祖承名匠或思出三神於雖阡陌縱橫莫知孰是と喝破して詳細に南三北七の十家を評破し、佛化の意に參することなくば佛經に系統を見るのは、盲者の乳を談する如くに到底其眞を捉むことは出来ない旨を極説し、佛自内證の悲智は始終一貫改變することなけれども、諸種の機病を見てそこに異曲同巧の教説となつたのであるから、其の經典の系統はこの根本に遡らねば決して明らむることは出来ない旨を主張した。併し又折角此の佛化の精神に注目してもたゞ一音教一道教といつて教説の差別を全然混亡して了ふのは、事實に背くばかりではなく佛を以て一を説くことを得

て多を説くことを得ない不自由な、いはゞ實智一邊のもので權智のないものとするものでやはり佛の冒瀆である。佛の無功用智を疑ふものである。『法華玄義』十下ハトに羅什の一音教を批判して得實失權、鰥夫寡婦不成生活、永無子孫といつて居る。此の故に天台は佛化導の精神に立ちて經典を分類し教義の權實を判釋して五時八教を得たのである。即ち天台は教判の標準を佛自内證の悲智に置いて一代佛教を觀察し、これによつて諸家が自己の小智に立つことを批難したのである。次に天台はこの佛化導の精神をどこに感得したかといふに、即法華經である。法華は實に佛の廣大なる悲智を説いたもので區々たる法門を説いたものでない。『法華玄義』一上ナニ餘教當機益物不説、如來施化之意、此經明設教元始といひ。又『同』十上ナニには今經不爾、結是法門綱目、大小觀法十力無畏種々規矩皆所不、論爲前經已説、故、但論如來布教之元始中間取與漸頓適時大事因緣究竟終訖設教之綱格大化之筵第といふ。即ち如來施化之意は餘經に未だ説かずして法華獨明の法である。これによつて法華は實に教判の眼目である。五時八教が諸家の教判に卓絶するのは、此の眼目によつて觀開かれた一代教の眞相實體である所に存する。一代教がその儘釋尊の全體として取扱はれた所に、天台教判の價值がある。又天台大師の敬虔なる情操を捉むことが出来る。

最後に如上叙し來つた所を要約するに如左。

大正十一年二月一日印刷
大正十一年二月五日發行

定價金參圓

著作權
所有

著者 稻葉圓成

發行兼印刷者 西村七兵衛
京都市下京區中珠數屋町烏丸東入二十人講町二十二番戶

發行所

京都市東六條
電話下四五八番
大阪口座一七〇四番

法藏館

324
666

終

